

龍ノ忍×蛸ノ忍

ゆくゆく

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

小説家になろうで硬梨菜さんが連載中のシヤングリラ・フロンティアくクソゲーハンター、神ゲーに挑まんとすくの二次創作です。オリ主と秋津茜の恋愛モノの予定です。一部悪意のある表現があったり、原作と異なる部分もあるので苦手な方はご注意ください。

目次

黄金超克

無茶ぶり、ここに極まれり | 1

く
くさえ、ひっさつのしょくしゅあたつ | 7

ここは俺に任せて先に行け！（一度

言ってみたかった） | 11

時にコンプレックスは技となる

18

黄金貫く光 | 23

秘想伝刻

それは甘い毒のように | 43

暗く醜く蝕む悪意 | 48

狂気の代償、消える心 | 55

堕ちた蜻蛉 | 60

伝えなくてはならない想い | 66

それは柔らかく優しい想い | 72

間章

急遽作り上げた主人公を掘り下げる回 | 80

ふと思いついただけの話・前編

85

ふと思いついただけの話・後編

95

想告結心

暗く、重く | 108

明るく、優しく | 130

終情始恋

はー、クズばっかですわ | 147

控えめに言ってイカれてる | 153

幻想と現実の交差 | 161

Another Stories

乙女の恋争 | 167

Happy Birthday……? | 184

Happy Birthday!

193

甘々高校編

そういう星の元に生まれたんだろうね

| 199

書いてる時に吐いた砂糖だけでジャム

が作れる | 206

純然たる噛ませ犬 | 212

甘い話を書こうとすると書けない現象

| 223

需要があるのか分からない年表もどき

| 232

祭りだ!!! | 244

キャラ崩壊が酷いなあ(他人事)

249

妹と彼女 | 257

一途なる守護 | 268

”彼女”の意味

276

ゲロに触発されて

異形なるモノ Route 〽 Bad

End 〽 287

異形なるもの 〽 Route HAPP

Y END 〽 299

黄金超克

無茶ぶり、ここに極まれり

黄金の龍は天に吠え、漆黒の龍は地を進む。綺羅星の輝きを見せる男は臨界を超え、始原を纏う少女は過去からの遺産をもつて龍を制す。龍災止まぬ大陸にて、邂逅するは2人の忍び。

「・・・全く、星忍のじーさま達が騒ぐから来てみれば、こんな可愛い子とはね・・・ロリコンなのかな？あの人たち。」

敵対者を貫くは黒き触手。人を捨て忍の極地に至りし技は天を貫き地を這い、抗う者の尽くを滅する。

「えつと、あなたは・・・？」

これは出会いの物語。これは始まりの物語。龍の技を極めし忍びと、蝮の技を極めし忍び。その二人の邂逅が世界にもたらすものは未だ知れず。

「・・・貴方の同類さ、秋津茜さん？」

さりとして、その出会いは光風霽月。荒れ狂う新大陸の中で静謐に包まれし出会い。ベゲークスンク

龍災は終わらない。

◆
はい、学校終了！即帰宅！ヘッドギア装着！シャンフロへGO！流れるようにいつものルーティーンを取り、シャンフロにログインする。

「おはよおう、葵くうーん。」

「おー、おはよう。」

間延びした声で挨拶してきたのは魚人族のエレメ。タコの魚人であり……俺が改宗する元凶となった女だ。

「今日はあー、何するのあー？」

「んー、今日は星忍のじーさまたちのところに顔を出すかなー、そろそろ蛸忍聖になっておきたい。」

「ああー、最近忙しくてえー放置してたからねえー。」

「おう、てなわけでエレメはここいいぞ。」

「むうー、しよーがないなあー。」

悪いな、エレメ。こればかりはしようがない。後でなんか買つてやるからそんな目で見るな。

「さてと、行きますかね。」

お待ちかねの転職の時間だ！

はい、皆さんこんにちは。僕は今新大陸にいます。何ででしょうね、旧大陸にある忍者ギルドに行ったはずなんですけど。

「あんのクソジジイども・・・これ終わったら報酬ガツツリふんだくつてやる・・・！」



「星忍のじーさま、転職条件満たしてきたよ。」

忍者ギルドのさらに奥深くにあるこの隠し部屋は、7つの最強種・・・ユニークモンスタ―に深い縁を持った忍びのみが入ることを許された部屋。職業：忍者の隠し上位職及び最上位職に就くためには必ず来なければならない場所だ。

「おお、おお！ようやく蜻忍聖になるか！蜻忍は、就くものが少なくてのう・・・お主がなっけてくれて助かったぞ。」

「ほう、良かったのう、蜻忍タコ。」

「くつ、まさか蜻忍タコに先を越されるとはのう。」

「じーさまたち仲良いねえ。それはともかくさつきと転職させて欲しいんだが。」

「うむ、では我ら七星の忍の名のもとに於いて、今この時より忍者葵を「蜻忍聖」として認める。励めよ。」

「謹んで拝命します。」

「こういう所くらい真面目にやってもバチは当たらんだろう。しかし、思った以上に転職があつさりすんだな・・・つきり最終試験かなにかあるかと思つてた。」

「ところで、お主。秋津茜という忍びを知っておるか？」

「ん？今の声は確か龍の星忍の・・・」

「いえ、存じ上げませんが・・・その秋津茜さん？が何かしたのですか？」

「いや、そういう訳では無い・・・まあ、ある意味では何かしたと言ふべきか・・・
忍？」

「ともかくだ！その秋津茜が今新大陸にいるはずである。お前には彼女の様子を見てきて欲しいのだ。」

『クエスト「星忍の寵愛」お気に入りを受けますか？

はい／いいえ』

ふむ？他のプレイヤーが関わっている以上これはユニークではないにせよそれなりにレアなものであるとは推測が着く。であれば、受けるのが妥当か・・・？ただ・・・

「あのー、今から新大陸行けって言われても無理なんですけど。」

そう、新大陸に行くには船がいる。いくら俺が蛸の魚人とはいえ海を泳いで渡るの勘弁して欲しい。

「移動手段に関しては問題ない。それより行ってくれるのか？」

ふむ、移動手段はあるのか。であれば、問題は無いな。未だに視界の端に浮かんでいたウインドウのはいを押し、

「あー、移動手段があるなら断る理由もない。その依頼、謹んでお受けしましょう。クエストの受注を示す言葉を告げる。

「おお、行ってくれるか！では早速頼むぞ。」

パチンツ

「うえっ？！」

龍の星忍サマが指を鳴らした瞬間、ぐにやりと視界が歪む。そう、まるで転移魔法で飛ばされる時のような・・・って待って待って。えっ、今から新大陸行くの？マジで？なんも準備とかしてないんだけど。

ちよつと待てや、そう抗議しようとした瞬間視界の歪みは一気にその強さを増し俺の意識は遠のいていく。

「秋津茜の場所は現地に行けばわかる！彼女を頼んだぞ、新たなる蝮忍聖よ！」
薄れゆく意識の中で最後に思う。

（秋津茜さんって女性なのか・・・）

くらえ、ひっさつのしよくしゅあたつく

「んあ……ごんごんごんごん」

目を覚ましたら森でした。ちよつとアフターサービスが酷くないだろうか。夜だから暗いし……つてか、え？なにこの状況。デカイ黄金龍が空飛んでて？なんか黒い龍もいて？何これ、怪獣大決戦？シヤンフロっていつからゲームジャンル変わったの？

「きゅつ！きゅきゅつ！」

んえ？何か小動物的な存在の声が聞こえたような……

「痛ア!!」

なんか噛んだ、なんか噛んだ！ええい、捕まえちやる！必死になって足元の白い何かを捕まえる。

「よし、捕まえた！……つて何これ、ハムスター？超可愛いんやが。」

首根っこを捕まれじたばたと暴れている白いハムスター。シヤンフロにこんなのいたのか？まあ今はそんなこと気にしてる場合じゃないか。グツバイ、ハムスター。次にあったらペットになってくれ。

「ってか、行けばわかるって言ってたけど何処だよ、その秋津茜さんとやらは」

「きゅっ、きゅきゅっ！」

デジャブー？

「おいおい、ハムスター。俺は今君に構ってられるほど暇じゃないんだが？」

ん？なんか動いてる……あ、これジェスチャーのつもりか？えーつと、何何？前足をクイクイって……

「ひよつとして、ついて来いってこと？」

「きゅっ！」

そうらしい。それにしてもハムスターが案内人ナビゲーターとは。もう少し他になかったのだろうか。

「きゅきゅっ！」

「あー、はいはい。ついてくってちゃんと。ってか移動速度遅くない？もう少し速く走ってもいいんだけど。」

流星にハムスターの走る速度に合わせていられるほど余裕があるとも思えない。だから声をかけたのだが、

「きゅきゅきゅきゅきゅきゅっ!!」

は？えっ、はっや！ハムスターの全力、はっや！やべえ、追いつけねえ！くそっ、仮

にもこちとら忍びの頂点ぞ!? 負けてたまるかっ……!!

「うおおおおおおおっ!」

遮那王憑き、ニトロゲイン、パシススタンド、ついでにもう1回ニトロゲイン! 移動速度やスタミナ補正のあるスキルを多重起動して何とかハムスターに追いつく。何て速さだ、ハムスター。こちとらレベルキャップは解放してないとはいえExtend。そこまで雑魚ではないつもりなんやが?

「……………ん?」

戦闘音……それ自体は別におかしい事じゃないが、ハムスターが少し減速してきている。疲れやスタミナ切れと言うよりは目的地に近づいているかのように。ふむ……………

「魚人忍法【反響^{エコー}定位^{ソナー}】」

イルカとかが備えている超音波を利用した範囲探知。魔法であるアクティブソナーよりも広範囲を探れるこれなら……………見つけた! ここから真つ直ぐ進んで約500メートル。人数は……………なんかおかしいな。これじゃまるで1人を複数で囲んでいるような……………ひよつとして、この1人が秋津茜何某? ヤバない?

「へい、ハムスター。アクセル全開だ。お嬢様がピンチらしいぜ。」

「きゅきゅっ!? きゅきゅきゅきゅきゅっ!」

おお、お前も急いでくれるか……え、まだスピード上がるんですか？まあいい、見えてきた！

「……ペナがねーから割とガチでやったんだがなあ……いやはや、まさか持ちこたえるとは……」

！まずい、1人の男が這いつくばっている奴に剣を振りおろそうとしている。ここからだと這いつくばっている方はよく見えないが、まず間違いなくあれが秋津茜とやらで問題ないだろう。くそつ、まだ距離がある！走ってちや間に合わねえな！

「間に合えよ……！魚人忍法【雷纏・黒紫腕】!!」

ここは俺に任せて先に行け！（一度言ってみたかった）

「魚人忍法【雷纏・黒紫腕】!!」

周囲の闇よりもさらに深い黒に染まり紫電を纏った触手が俺の意思に従って襲撃者を襲う。

「があああああああ!!」

ふっ、悪いな、見ず知らずの襲撃者（仮）。お前に特に恨みはないが、割とレア臭いクエスト達成のために犠牲になってくれ・・・

「て、天首領さん!?!」

「ちっ、こいつ何しやがった!」

おっと、まずい。今の攻撃が秋津茜さんがやったと思われたのか割と殺意マシマシで襲いかかられてる。とはいえ言うほどまずくはない。何故かって？

「刃隠心得【空蟬】!」

リーダーっぽい男を痺らせている間に秋津茜さんに近づいていたからな!この近距離まで来てしまえば守り抜くのなんてそう難しい事じゃない。さてさて、お姫様のお顔

を拝見……って何これ、狐のお面？めっちゃ欲しいんやが。っていうかちっちゃいな。リアルと同じなら中学生くらいじゃやない？ひよっとしたら同じ年かもなあ、何て。おつと、皆さんの視線が痛い。僕は悪い忍者じゃないよ！

「……全く、星忍のじーさま達が騒ぐから来てみれば、こんな可愛い子とはね……ロリコンなのかな？あの人たち。」

とりあえず適当なことを言ってみる。ちよつと今テンション高いからなー。考えたことがすーぐ口に出る。

「えつと、あなたは？」

んー？なんかどつかで聞いたことあるような声……まあいいや。しかし、見た目と声がここまで一致してるとなると秋津茜中学生説が現実味を帯びてくるな……いやいや、リアルを探るのはマナー違反。この思考はストップ！

にしても、「あなたは？」ねえ……バカ正直に答えるのもなんかカッコ悪いし……ああ、これでいつか。

「……貴方の同類さ、秋津茜さん？」

ちよつと気取ってみたけど、恥ずいな！思ってたより！ほら、ポカンって顔してるもん！見えないけど！

「……ゴホン！あー、とにかく味方味方。一時的な共闘関係ということで。」

「なるほど！分かりました、よろしく願います！」

めつちや元気いいな。こういう子見てるとこつちまで元気になつちやう。

「おい！何だてめえ、横から出てきて。天首領さんをやったのはあんたなのか!？」

あ、忘れてた。ゴメンゴメン。

「フフ、そうだって言ったらどうする?」

なーにを言ってるんですかねえ、この口は！何がフフだ！こつわ、無意識の自分、こつわ！

「一人増えたところで変わるかよ！くらえ！」

「ははっ、威勢がいいな。やってみろよ。」

いいねえ、おもしろえ。．．．!

「刃隠心得蛸の巻・奥義【大海．．．!】

刹那、爆音が世界を覆い相対していた集団は吹き飛ばされた。

「ナニゴト!？」

「あ、ノワルリンドさん!？」

だーれ、それ。ワタシ、シリマセーン。現実逃避じみた思考をしている俺を置いて、ノワルリンドとやらは秋津茜さんと戦ってた連中を睨めつける。

『群がる虫どもめ．．．我が首を求めるなど実に不遜なる奴らめ』

「ノワルリンド……!!」

『だが残念だったな、この首を我が貴様に差し出すことはない……だが、全てが終わった後に浅ましく骸を刻む事は許してやろう……』

「え?」

『ふん、単なる気分転換……だ!!』

ノワルリンドとやらが翼を大きく広げたかと思うと空へと羽ばたいていく。そのまま宙で一回転。黄金の龍へ向けて一条の黒き流星となつて突き進む。誰もが皆、その結末を見届ける中……全く話についていけないんですけど? ノワルリンド is 誰。というか、え? 新大陸今こんなことになつてんの? こんな所に隠居プレイの弊害が出るとは……

「ああつ!!」

え、何何? なにかあつた? 秋津茜さんの悲痛な叫びを聞き、ノワルリンドの方を見る。黄金の龍が放つた閃光に体を貫かれながらも決死の特攻を続ける黒龍。その一撃は黄金の龍を確かによろめかせ、ダメージを与えたかのように見えた。

然れど、その特攻は失敗に終わったと言えるだろう。何せこの距離からでもわかる程に損傷した全身。そして、何より生物の構造的に折れるはずがない方向に折れた首。黒龍の死は確実なものだろう。

「うおつ、首からいった……」

「あれ……首どころか全身の骨が折れてない？」

「自滅？」

プレイヤーたちの声もさもありなんと云ったところだろう。ノワルリンドが行ったのは正しく無意味な特攻。黄金の龍にさしたる痛痒も与えなかった。それが大部分のプレイヤーたちの認識であり、だからこそ彼らは先程まで追い詰めていた獲物を逃がすことになる。

「ノワルリンドさん、随分痩せましたね！」

『たわけが！これは我が究極の秘奥……無影感情リモートエモートの応用！本来は分身を生み出す技だ

が……今回のように我を探す木っ端共を謀ることも出来る！』

『ところで秋津茜、そいつは誰だ？不快な匂いがプンプンする。噛み砕いてやろうか。』

お、やんのか？プチドラゴン。お前今大型犬だからな？

「だ、ダメですよ、ノワルリンドさん！この人は一応？味方だそうです！」

そこは断言して欲しかったなあ……

「そーいうことだ。よろしく、ノワリン。髪切ったー？」

『誰がノワリンか！切つたらんわ！』

「えーつと、あの凄い強い剣聖の人追つてきません・・・？」

あつ、もう状態異常治ったんか。もう少し強めのやつ打ち込んだときやよかった。

『・・・クク、よもや我が欺きを見抜く者がいるとはな・・・』

「まずくないですか！私もノワルリンドさんもワンパンされちゃいますよ!! 私今だいぶピンチですよ!!」

「じゃあ、ここは任せてもらおうかな？」

「えーつと、忍者さん？いいんですか？」

「元々君を守るためにここに来たしねえ・・・存分に頼つてくれたまへ。あ、後葵ね。俺の名前。覚えといてー。」

「・・・分かりました！葵さん、お願いします！」

そう言つて秋津茜は、ノワルリンドを連れて走り去っていく。

「・・・さーて、やりますかね。」

相手は多数。正面から向かい打つという忍びとしては最悪の構図。逃げるのが正解かもしれない。そうでなくとも、まともに打ち合おうとするのは悪手でしかないだろう。ただどなあ・・・!!

「ゲームだからなア！楽しまなきや損つてもんよ！」

さあ、忍聖の力その目に焼き付けてもらおうか！

「刃隠心得蝟の巻・奥義【大海嘯・鯨呑】!!」
はっははははははははははあ!

時にコンプレックスは技となる

刃隠心得。職業：忍者のみが覚えられる技。その特徴は印を結ぶことで従来の魔法に必要であった詠唱をせずに発動できるという点である。もちろん普通は両手を使って組む印。複数発動するようなことは出来ない。であれば、潤沢な魔力と一度に印を複数結べるような手段があるならば……？

「刃隠心得蝮の巻・奥義【大海嘯・鯨呑】！」

紫電を纏った黒い触手を携え、巨大な津波が敵対者を飲み込めんと暴威を振るう。

「うははははは！成功成功！実践でも行けるもんだなあ！」

印を複数結ぶことによる刃隠心得の同時発動。手が2本しかない人間範疇生物には出来ないことであり……改宗によって蝮の魚人となった俺には出来る。

「避けられると思うなよ？特別製だ！」

本来津波を生み出すだけの大海嘯。威力と範囲には優れているが1度避けられてしまえばそれで終わりの微妙な技。そこに触れた相手に強制的な行動不能を与える触手を網のように張り巡らせる！津波から逃げようとしても触手に捕まって動けないうち

にジ・エンドだ！我ながら完璧すぎる………！触手パイセン、マジパネエっすわ！

「うおおおおっ!?!」

「何だこれ、触手!?!」

うははははは！見事に引つかかてくれた奴らのセリフが気持ちいいねえ！さーて、秋津茜を追うかね。とりあえずポジション渡しといたとはいえ、ノワリン共々瀕死だったし………ぎっ！

「おいおい、今のほとんど当たってたる……良くもまあそこから動けたな。さっきの子といい自信無くしちゃうぜ、全く。」

飛翔する剣による死角からの斬撃。後一瞬でも反応が遅ればバツサリいかれてただろう。刺身になっちゃうとこだった………。蛸だけに。

「いやいや、まさかあの津波をくぐりぬけてくるとはねえ………。天首領だっけ？やるねえ！」

天首領……知らない名前だけど確か秋津茜が剣聖って言ってたな………。まさか修正前剣聖……？ヤバない、それ。俺の能力的に正面戦闘で勝てる気がしない。

「んー、ひよつとして天首領さんてば修正前剣聖でいらっしやるー？」

「あ？ああ。そうだが？てか、俺の事知らない？一応天ぶら騎士団の団長やってんだ

けど。」

天ぷら騎士団ー？知らない名前ですなえ。でも、修正前剣聖かー。そもそも俺はP V P そこまで得意じゃないしー、蝟忍聖に慣れてないことも考えると……

「戦略的撤退！」

「あ、テメー待てこらー！普通ここは戦うところだろー！」

知らん知らん！無意味に戦ってリソースを食い潰すのは愚者の思考よ！

「えー、天首領さんこつわーい。すーぐそうやって戦おうなんて良くないゾ☆（ロリボ）」

「え？は？中身女の子？いや、でも、え？！」

ははは、これぞ必殺だいたいロリボで適当なこと言つとけば大体の男は煙に巻けるの術！なお、変声技術は自前で用意してな！ははははは……はあ。あー、ヤダヤダ。逃げよ。

「ちっ、逃がすかよー！」

あれは……ソウヴァント……従剣劇！避けられるか？

「天井くーん！」

「あーそーぼっ！」

「お覚悟死ねコラアーツ！」

「何っ!？」

それは正しく奇襲。不特定多数が入り乱れる戦闘領域で一人の獲物だけを狙ったがゆえの隙をついた完全なる襲撃。

「PKerだと……!?! つつーかテメーらまさか、いやだが何故ここに……!!」

「嫌われてナンボのPK稼業!」

「足を洗うならド派手にな!」

「我らが偉大なる先駆者様からの情報提供、もはや躊躇う理由もなし!」

「ティーアスたん俺がケジメつけるとこ見てて……」

ぶっちゃけ言うとな誰だこいつら。全く知らんやつらがでてきたな。だが助かる!

えーつと、顔隠して、ここう、触手を縮めることで体格を女の子っぽくして……

「その劍聖さんに襲われてたんです! 助けてくれてありがとうございます! (口リ

ボ)(むしろ襲ってた)」

「いいってことよ! (誰だろう……)」

「可愛い子のためなら! (おのれ、天首領!)」

「ティーアスたん! (ティーアスたんハアハア)」

はははははは、戦略的撤退! 使えるものはPKでも使えってね!

黄金貫く光

「さてと……」

どうしたものか。秋津茜を助けるといまいちクリア条件の分からない
星忍の寵愛
 このクエスト。一時的なピンチを助けると言うだけだったら、さつき天首領から助けた
 ことがカウントされてなくてはおかしい。ということやはり……

「新大陸で起こってる全プレイヤー規模の謎クエスト……そのクリアまで手
 伝えつてことか」

てなると早急に秋津茜を探す必要があるか。どうもさつきから謎の光線が飛び交っ
 てるし……これどう見ても発狂形態とかそういう奴では？

「きゅっ！きゅきゅー！」

「んあ？……ああ、ハムスター、お前まだ居たのか。ちょうどいい。秋津茜の
 所まで案内してくれ」

「きゅっ！」

ん？何か向こうの方を指してる……あ、いたいた。何か黒い……ああ、ノ
 ワリンじゃん、あれ。と一緒にいるな……つて！

「うっそでしょ！どんだけピンチになるの!」

恐らく元々は美しい黄金におおわれていたであろう、しかし今では見る影もなくボロボロになった黄金の龍王。そいつから放たれた光線が一直線に秋津茜に迫る。

「いや、さすがに間に合わん……!くっそ、何でよけねえんだっ……」

着弾。それなりには離れてるこの辺りにまで爆風が押し寄せてくる。が、確かに見た。黄金の光が全てを飲み込まんと襲いかかった瞬間、昏い光が2人を覆った瞬間を。

「ゲホッ、ゲホッ!……あー、ひでえ目にあつた。無事かよ、あいつら……あ?」

黒と青の少女。全身の肌は青く、角を生やし、翼を生やし、体の各所を黒い鱗におおわれたその姿は正しく竜人とでも呼ぶべき姿で……垣間見える顔は確かに守れと依頼された少女の顔だった。

「……え、何あれ。合体?そんなの出来るの?って早ア!!」

自身の視界に映ったものがあまりにも非現実的であり、目を擦った瞬間に竜人の少女……秋津茜は凄まじい速度で戦場を駆け抜けていった。

「ハムスタアーツ!!全力で追うぞ!!」

「きゅー!!」

ドゴンツ!どう考えてもあんな小さい体の生物が放つ音とは思えない音を立ててハ

ムスターは暗い森を、そして黄金が照らす戦場を駆け抜けていく。

「うおおおおお！さすがにハムスターには負けたくないあーい!!」

連打連打連打ア!! ポーションの連続服用でみるみるうちに回復していくMPをそう
はさせるかとはかりに使い潰す。え? これでもまだ足りないの? どれだけだよ……

「ええい、こうなりや自棄じゃい!」
【加速する群走】! 【一点突破】! 【追い求める陽炎】
!!

ああああ、金が飛び去っていく音が聞こえるうー!! が、俺の財布を犠牲にしただけはあつて秋津茜の姿が見えかけていた。……あれ? なんて声かけよう。正直、あの龍相手に俺ができることとかなくない? これつて無駄足では? 何かこう物陰から援護するとかでよかつたような……

『あつ、葵さん! 無事だったんですか! 良かったです!』

わーい、バレた。ちくしよう、もう逃げられないやんけ。にしても近くで見るとホントに姿変わってんな。狐面も取れて……? 何かデジャブ感? あれー?

「あー、うん。無事よ、無事。オールグリーンですわ。秋津茜こそその姿どしたの? ノワリンは?」

『誰がノワリンだ! 食いちぎられたいのか!!』

ひよえつ。……あー、うん。把握したわ。

『ちよ、ノワルリンドさん！えっと、これはですわね！』

「あ、大丈夫。聞いたいて悪いけどだいたい分かった。ノワリンと合体したんでしょ？それよりも戦況が知りたい。とりあえずあのでっかい黄金のやつを止めるってことでいいんだよね？」

『はいっ！ジークヴルムさんを止めないと新大陸が消し飛ぶそうです！』
ふーん、随分とそれはまた……

『ふん、貴様は今更何をしに來たのだ。その傷ではろくに戦えないだろうに』
え、バレた？ははは、まさかあ……

「え、もしかして秋津茜ちゃん？ なにそれ！ 変身？ おねーさん初耳なだけ――」

『………あ？ なんだ貴様』

「………ああ？」

「ひよえっ」

あ、やべ。ついつい癖で………?!?!?急に話しかけてきたこいつのこの顔………

天音永遠。このゲームのキャラクリの自由度を考えると何もおかしいことではないが・俺はこの顔を好んで使いたがるやつを知っている………いや、ねえか。さすがに。なんせここはシャンフロ。神ゲー中の神ゲー。あんな世紀末円卓にいるよう

なやつがここにいるはずがない。

『あ、ペンシルゴンさん!』

「ペンシルゴン!?!」

「え、何いきなり。というか君誰?知り合いつて訳でも無さそうだし・・・・・・・・」
「いやいやいや、なんでもないですよ!ええ!」

『あれ?葵さん、ペンシルゴンさんと知り合いなんですか?』

ちよい!秋津茜、シー!静かに!

「葵?うーん、聞いたことない名前だけど・・・・・・・・私の名前に反応したってことはひよつとして円卓関係?」

ギクツ・・・・・・・・

「いや、なんスカね、円卓って!聞いたことないゲームだなあ・・・・・・・・あつ」

「ほほーう?私、円卓がゲームだなんて一言も言つてないけどねえ?」

詰んだ。なんて楽しそうな笑顔してやがる。鉛筆王朝時代が思い返されるな。・・・・・・・・まあ、別に知られて困るといわけでもないが。いや、またパシラれそう。さすがにもう一回城ごと爆破されんのはお断りだ。

「・・・・・・・・ブルーベル。これ以上は後で話そうか・・・・・・・・アーサー」

「・・・・・・・・え、マジで?」

「マジよ、マジ。大マジ」

「へえー・・・楽しくなりそうだねえ！」

それに関しては否定できそうにもない。被害にあったやつには悪いが、アーサー・ペンシルゴンと組んで起こす大爆発ってやつは・・・最っ高に楽しいからな。

『・・・あのー』

「あ」

秋津茜のこと忘れてた。すまぬ。

「つまり、君はジークヴルムの逆鱗の場所を知っていると？」

『はいっ！』

「そうか・・・」

アーサーに連れられ、秋津茜と一緒に言った先に待っていたのは凄まじい威圧感を放つ女性だった。何と言うか凄いでできる人オーラが漂っている。得意なタイプではない

かなあ……ていうかぶっちゃけ苦手である。ただでさえ、俺この場では浮いてるんだからさあ！やめてよお！

「それで、そちらの御仁は？」

「ああ、彼？私の旧友って感じかな。それなりには役立つんじゃない？」

「いや、紹介適当かよ。もうちよいなんかつたのか」

「えー、だって私ブルー……葬だっけ？葬君がどれくらい強いのか知らないしさー」

「まあ、それもそうか」

「あー、話し込んでるところ悪いがノワルリンドは？倒されたのか？」

『ノワルリンドさんですか？』

「ああ……というかその姿は？」

『ふん、この我に何か用か』

「……」

強者感の漂う女性……サイガー100が沈黙する。いや、分かるよその気持ち。秋津茜の顔でノワルリンドの仕草するの違和感しかないもんな。何やらアイコンタクトをしていたらしいアーサーが答える。

「あー……こちら、忍者の奥義で合体した秋津茜 in ノワルリンドさんです」

『跪いて驚愕する事を許す』

「あれか？ 【旅狼】は人間をやめたやつしか入れないとかそういうルールでも課したのかお前は？」

「いや、頭おかしいのはサンラク君だけ——」

ちよつと待て、サンラク？ 革命騎士 あいつもいるのか。

直後、メカメカしい鳥を全身に纏った小柄な少女が炎を噴き出しながら降りてきた。

「……集まつてたので来た」

いや、誰よ。マジで知らない人が来たあ……つーか、シャンフロにこんなメカメカしい物体あつたんだ。俺の知らない間に地上では色んなことがあつたんだなあ……

「何かやらかすの？ ぶつちやけ手持ちのリソースが尽きてるんだけど……」

増えた！ 誰だよ、もう！

「信じてたぜカツツオ君！ 凡庸魚類は伊達じゃないね！」

カツツオ……カツオ……カツツオタタキ！ サンラクがいる時点で何となくそんな気はしたがやつぱりか！

「うん、素手でも戦つてやるよ。手始めにPKデビューかな？」

「こっちは聖槍使うけど」

「こいつ……!」

うわー、この感じ懐かしいな。あいつら良く煽りあつてたからなー。

「何か葵君、他人事みたいな顔してるけど君も大概人外の見え目してるよね?」
おっと、こつちにまで火の粉が飛んできた。

「あれ? 面白いえばその人誰? ペンシルゴンの知り合い?」

「ふふふ、彼に関してはカツツオ君も知ってるはずだよー? 何せ我が鉛筆王朝の最強騎士、ブルーベル君だからね!」

「は? え、マジで!?!」

「マジだねえ」

「マジだなー、改めてよろしく。カツツオタタキ」

「あ、よろしく。後ここじゃ俺オйкаツツオだから」

結局カツオじゃねーか! ……ふふふ、なんだかんだ言いつつもやっぱり昔のゲーム友達に会えるのは楽しいな。

その後、ペンシルゴン主導のもとジークヴルム討伐計画が立てられた。途中で……：……何だっけ、過労死する有給？とかいう人が来たりしたけど知らん知らん！基本的にこの場においてアウエーな俺は空気になるのみよ。

まあ、そんなこんなは置いて結論を言おうと秋津茜がジークヴルムにトドメを刺すからそれまで皆でジークヴルムの気を引いたり援護しよーねということだ。超シンブルじゃん。とはいえ俺は所詮この場におけるイレギュラー出された使命はとりあえず^{実質}な^的な^なやつ^放とい^置て……ああ、あれを渡しとくか。

「へい、秋津茜。これあげるよ」

『？何ですかこれ？』

「うーん、まあお守りみたいなものかな。持つといて損は無いよー」

『わかりました！ありがとうございます！』

当然単なるお守りなわけではない。俺の肉体の一部を媒体として作った『ヒトガタ』。アイテム名と名前だけ見れば完全に呪いのアイテムだがその効果は絶大も絶大。一度だけ致死ダメージを無効化する。……いや、この言い方は正しくないか。致死ダメージを無効化するのでは無く、致死ダメージを移す。だから秋津茜がこれを発動させると俺が死ぬわけだけど………幸運による食いしばりあるし大丈夫だろ。うん。

そんなことをしている間にも戦場はどんどん過激化していく。降り注ぐ無数の魔法、振り下ろされる数多の剣戟。それに応えるは黄金の閃き。今、こここそが、この瞬間こそが、我が人生の終着点とばかりに黄金の暴力が吹き荒れる。

……ああ、これだ。人の輝き。暗く汚い人間が魅せる魂の輝き。ここはゲームで、非日常の世界で、だからこそどこまでも……現実なんだ。横にいる少女を見やる。小さな体に一体どれほどの期待を背負ってここにいるのだろうか。それでもただ前を見続けるその姿に俺は確かに魂の輝きを見……

刹那、世界が揺れた。

遙か昔に沈んだ鋼鉄の鯨。それが今、新たなる人の手によって呼び出される。海を割り、空に到り、彼女は謳う。

『おはよう！ おはようございます！ 私は勇魚イサナ!! やつと会えた!!』

『恒星間航行バハムート級アーコロジーズシップ「リヴァイアサン」！ 現時刻をもって次世代新人類とコンタクトを取るべく浮上します!!』

それは正しく爆弾。一人の男によって齎された情報という名の爆弾。この世界戦場に存在する全ての者が目を離せずにいる……否、ここにいる。例え何があろうとも

前だけを見んとした一人と一匹が。そして、少女は駆け出し……それに付き添う影もまた大地を駆ける。

『行きます!!!』

なんかもう超展開すぎて着いてけんわ!着いてくけどさあ!海の方から飛び出してきたなんかでつかい魚。その場にいた全員が目を引かれるなか秋津茜だけはジークヴルムを見据えていた。そしてそんな彼女を見ていたからこそ反応できた。

凄まじい速度で戦場を駆ける秋津茜を必死に追う。やばい、速い。やばい。え、マジで速くない?さつきから頭の中から語彙力が消滅している。あああ、人が邪魔ア!!・大跳躍。何か前で空中ジャンプを決めている秋津茜は見なかったことにして彼女を追う。

『ドラゴンブレス! 重ねて【竜威吹】!!』

秋津茜の口から黒と黄金を束ねた荘厳な光線が放たれジークヴルムの顔を跳ね上げる。いや、そりやノワリンと合体してるならドラゴンブレス吐けてもおかしくないけどさあ……

そして、その瞬間を狙ったのだろう。どこまでも赤く、赤く染まった一羽の鳥が天を裂き、そのままの勢いで黄金の龍王の左目を切り裂く。

『グゴアアアアア!!?!?』

今まで聞いたこともないような悲鳴を上げるジークヴルム。だがその隙、狙わせてもらうっ……!強く台地を蹴りジークヴルムの顔に肉薄し……!

「何の見せ場もないつてのもねえ……!刃隠心得・蛸の巻【黒墨隠】!!」

『ガアアアアア!!?』

そりゃあ蛸なんだ。墨くらい吐くさ。知ってるか?蛸の墨つてのは天敵たるウツボの感覚を狂わせるくらいの毒性があるんだ。そいつが強化されたらどうなるかなんて分かりきったことだよなあ!黄金の龍王サマは耐えられるかな!?

『ガアアアアア!』

「んびゅっ」

調子乗って追撃仕掛けてたら吹っ飛ばされた。

そして、勇士は集まる。

己と同じ境遇の戦士達社畜達を束ねる魔と剣ロイシを振るう戦士ウの相棒を犠牲とし放つ一撃は凄まじい勢いでジークヴルムに突き刺さり、それに続かんとする者たちの攻撃もまた同様

にジークヴルムへと襲いかかる。

狐面の少女に付き添う白く小さな兔の侍は大地を割り、パートナーを導かんとする青々とした道を作る。

数多の剣達を振るう2人の剣聖による剣の演劇^{ソウゲンブツ}。黒き狼を倒さんと研鑽を重ねてきた剣技と、最多の人員を率いる首領の剣技が重なり、黄金の龍を貫く。

それでも……黄金は沈まない。無数の攻撃を受け、その身を守る鱗さえも失い、それでも沈まない、終わらない！最後の一瞬までその本領を失わずに輝き続ける龍王。

そんな煌めくような人々の、そして龍の命の輝きの中に確かに見えた1つの輝き。その目は決して諦めず、ただ真つ直ぐに戦うべき相手を見据え、その足は決して止まることはなく、黄金を墮とすことを狙い続ける。

それに対し黄金はこれが最後とばかりに膨れ上がる。放たれた光線は少女を襲い……どこかからかの守護の光が破滅の運命を覆す。

ならばとばかりに振るわれた黄金の腕は確かにその小さな体を引き裂かんとし……冥府からの腕によって阻まれた。

骸の城を作り上げし城主が振るう一撃は次に繋ぐ一撃。確かな一撃を少女が放てる

ように……己を犠牲としたとしても彼女は己の作品を守る。

確かな認識。一瞬の隙もなく展開された防御障壁とともに黄金の腕が振るわれる。守るものはなく、阻むものもない。そんな一撃は確かに少女を引き裂き……少女は虚ろとなって消える。否、それは影。湖面に映りし月の如く揺蕩う水鏡。

『致命……忍法!!』

踏み込み、叫ぶ。黒を宿した羽を羽ばたかせ、少女は宙を駆ける。だが……足りない。黄金は振るう。渾身の一撃を。それは奇跡の一撃。有り得ざる一撃。確かに届くはずの刃。終わらせるはずの一撃。そんな少女の技を無為に返さんと放たれる光線。宙にある少女に避ける術はなく、その身は光に飲み込まれ……

イレギュラーは笑う。弾かれ、飛ばされ、守るべき相手から離れてしまった。できることは最早見ているだけ。だが光線は、少女を貫いたはずの光線は彼の身を灼く。それは逃れられないはずの死の運命。少女を灼き、世界を終わらせるはずの終焉の光。例え残り少ない体力では生き残ることなど出来ないのだとしても……彼は笑うのだ。

現実では見ることのなかった人の輝き。それを見ることが出来た。守ることが出来た。その事実だけで、彼は満足なのだから。

そして致命の技は放たれる。

『満開咲閃』ハナヒラケ　——つ!!!』

「………きゅつ!きゅきゅつ!」

あー?何か聞き覚えのある声が聞こえるが………もうちよい寝かせてー。

「きゅつ!!きゅう!」

………何もう、しつこいなあ………だいたい俺は秋津茜の身代わりになって死んだはず。つまりこれは幻聴。よし、寝よう。

「きゅきゅ——つ!!!」

「ぐはあ！」

は、腹が……何かんでもない衝撃が腹につ……！何とか体を起こすと人の体の上に座ってるハムスターと目が合う。

「きゅっ！」

「何でお前ここに居るの？てか俺死んでなかった？」

「きゅきゅっ！」

えーつと、何何？一回死んだけど？蘇らせた？誰が？……え、お前が？マジで？

「あー、うん。ありがとう？……てかあれだよ。ジークヴルムはどうなったんだ。」

戦場の方を見やるとそこにはその体のほとんどを光の塵に変えながらも開拓者達俺達に始原の脅威を伝えんと、祝福を与えんと叫ぶジークヴルムがいた。だがそれも僅かなこと。数瞬後にはその肉体は光の塵となり空へと溶けていった。

『天覇のジークヴルムは永き敗残の戦いを終えた』 『天より火が消え、新たな灯火は人の中へ』

『決戦フェーズ終了』

『ユニークシナリオEX「来たれ英傑、我が宿命は幾星霜を越えて」をクリアしました』

『参加者全員が称号【龍狩り】を獲得しました』

『参加者全員が称号【竜狩り】を獲得しました』

『参加者全員が称号【天より高く金より眩まばゆく】を獲得しました』

『ジークヴルムの角破壊者が称号【破天】を獲得しました』

『参加者全員がアイテム【黄金の龍灰】を獲得しました』

『ジークヴルムの角破壊者がアクセサリー【霊角の残影】を獲得しました』 『参加者全員

がアイテム【赤竜の魔菌】を獲得しました』

『参加者全員がアイテム【白竜の魔菌】を獲得しました』

『参加者全員がアイテム【世界の真理書「天覇編」】を獲得しました』

『特定条件を満たさなかったプレイヤーの「呪い」が消失しました』

『特定条件を満たしたプレイヤーの「呪い」が変化しました』

『ワールドストーリー「シャングリラ・フロンティア」が進行しました』

『始源が動き出す』

『ワールドストーリーの進行により以下のレイドモンスターが実装されます』

『レイドモンスター「焔がる大赤翅」が出現しました!』

『レイドモンスター「彷徨う大疫青」が出現しました!』

『レイドモンスター「庄恵む大富黒」が出現しました!』

『レイドモンスター「廻る縁大緑」が出現しました!』

『レイドモンスター「嵩増す大黒織」が出現しました!』

『レイドモンスター「隔てる大白壁」が出現しました!』

『レイドモンスター「蟲喰む大緑宮」が出現しました!』

『レイドモンスター「貪る大赤依」の再出現カウントを開始されました』

ははーん、これ途中参加の俺には何の恩恵もねえな?クソが!

「きゅきゅっ!」

「あ?何だよ、ハムスター。傷心の俺になんか用か。」

「きゅきゅきゅっ!!」

あれ、この光見覚えが……ああ、あれだ。随分前に思えるが実際のところ数時間前に見た光。ここに飛ばされる時に見た光で……ちよいちよいちよい。え?もう帰るの?せめて秋津茜に挨拶とか

「きゅきゅー!!」

そんな抗議が届く訳もなく俺の意識は光に塗りつぶされた。

ちなみにクエストクリア報酬としてなかなかの量の経験値とマーニ、レアそうな巻物を貰えた。・・・許す！

秘想伝刻

それは甘い毒のように

というわけで今日は秋津茜、そして何故かいるノワリンと一緒に狩りに来ています。

「おい、秋津茜！なぜこいつがいるのだ！」

「そりゃこっちのセリフだよ。お前あんなにボス面してたのに何懐いてんのさ。」

「あはは……すみません、ノワルリンドさん。でも大丈夫ですよ！葵さん、すつごく強いので！」

「そういう事だよ、よろしく、ノワリン！あれかな？ノワリン魚とか食う？鮭あげようか？採れたてだよ？」

「ええい！気軽にノワリンなどと呼ぶな！……その馴れ馴れしさは気に食わんが我に食物を献上しようとする心意気は認めてやろう」

「さあ、寄越せと目で訴えている。さてはこいつ、意外と可愛いな？小動物味とツンデレを感じる。」

「ほーれ、ノワリン。ご飯だよ。」

「いいですね、それ！私もノワリンさんにご飯あげたいです！」

「おお、秋津茜積極的だねえ。はい、鮭」

「はい！ノワリンさん、あーん」

「私はペットでは無いぞ、貴様ら！」

「この懐きっぷりでその言い訳はなかなか苦しいんじゃないかなあ。」

「つと、お客さんかな？」

常時起動させていた反響定位に反応がある。このサイズ、そして木の上。間違いないな。

「秋津茜、ノワリン！ドラクルス・デイノウルだ！奇襲に注意！」

「分かりました！ノワリンさん、行きますよ！刃隠心得奥義【超転身】!!」

「ふん、緑の眷属ごときに使うのも勿体ないが良いだろう！葵とやら、そこで我らの勇姿を見ているがいい！」

「えー、やだよ。俺だつて戦いたいし。ほら、俺つてば秋津茜とは出会い方が出会い方だから？ろくなアピールとか出来てないし？こちらで良いとこ見せときたいかなーつて」

あれ、俺今なんか変な事口走つたな？まあいいかあ。そんなことを考えてるとドラク

ルス・デイノウルが木々の間から突貫をかけてくる。

「わわわ！速いですね！葵さん、そっち行きましたよ！」
インファイト起動！かーらーのお！

「任しとけてえ！そおら、これでも食らつときなあ！」

【雷纏・黒紫腕】 つ！

「うははは！痺れとけえ！」

「ノワルリンドさん、私達もやりますよ！刃隠心得【龍気揚々】！はああ！」

「ギョアアア!？」

秋津茜が印を結ぶとともに全身にまとわりついた黒いオーラが、武器に宿りドラクルス・デイノウルを切り裂く。何それ、超カッキーじゃん。いーなー。俺もやりたい。

「つて、秋津茜！後ろ！」

「え？・・・わわわ！」

ドラクルス・デイノウルに集中していた秋津茜に後ろから襲いかかったのは小型恐竜のような見た目をした群体モンスター、ドラクルス・デイノトリアシクス。まずいな、対応しきれない。

「刃隠心得【鎖縛帷子】！ほら、秋津茜！こつち！」

「すみません、ありがとうございます！」

にしても、妙だな・・・基本的に新大陸の森でモンスター同士が連携を取ってくるということはまずない。偶然・・・？いや、でも・・・

「とりあえずこれでも食らつとけ！」

動きを封じられてるドラクルス・デイトリアシクスに格闘系スキルや状態異常系スキルを重ねがけした拳で正面から殴りとばす。怯んだ隙にもう1発。

「オラァ！トドメだ、硬気功！からの魚人忍法【蒼海撃】！」

触手の硬度を一時的に高めた上で水を纏った拳を叩き込む。断末魔の悲鳴をあげ、ドラクルス・デイトリアシクスが光となつて散る。よし、やったな。

「あとはドラクルス・デイトウルか・・・」

ん、秋津茜が戦ってくれてる。あの様子だともうすぐで倒せるだろう。さつき感じた違和感も考えてみれば大したことじゃ・・・いや、待てよ？ドラクルス・デイトリアシクスは群体モンスター。であれば、俺が倒したのは何故一体だけなのか？まるで何者かに操られているかのような・・・おいおい、まさか！ドラクルス・デイトリアシクスを倒す際に一時的にオフにしていた反響定位を即時起動させる。・・・やっぱりか！

「やった！倒しましたよ！葵さん！」

「秋津茜っ！伏せろ!!」

「えっ?・・・あっ・・・」

ドシヤツ

忠告は1歩間に合わず、秋津茜の体がふらりとかしぎそのまま地面に倒れ込む。そして一瞬の後広範囲に及ぶ魔法攻撃の雨が秋津茜に降り注いだ。

暗く醜く蝕む悪意

新大陸の森の一角で色とりどりの花が咲き誇る。ある花は周囲を巻き込んで燃え盛る業火の矢であり、ある花は触れたものを瞬時に凍りつかせる氷獄の刃であり、はたまたある花は雷速をもつて敵対者を滅する轟雷の獣である。悪辣なる意思に蝕まれた哀れなる蜻蛉には逃げる術はなく……さりとて、蜻蛉を守護せんとする一本の刃は決してその輝きを失わせまいとその力を振るう。

「秋津茜っ!!」

ええい、前もあつたなこんな状況!とはいえ今回はあの時とは何もかもが違いすぎる。秋津茜は疲労ではなくシステムの制限によつてその行動を封じられているし、そんな彼女を狙う攻撃の密度もまた段違いだ。そして、俺の位置から秋津茜の元までに地味に距離があり、魔法が着弾するまでの到着はほぼ不可能。であれば諦めるのか? 秋津

茜を見捨てて、自分だけ逃げおおせるのか？まあ、可能不可能でいえば可能だろうな。

「……………ははっ……………」

そんなつまんねえ事するわけねえだろ!!女の子の前でカッコのひとつもつけられねえ様じゃあなア!

「やつてやろうじやねえか!秋津茜エ!そこで見てなア!!」

「我が身を盾に!そんなでもつてえ!魚人忍法【不転・珊瑚障】!!」
マイホデイ・アス・ア・シールド
ファイア・コーラル

己の内に守ると決めたものがあるのならば!俺の鎧は碎けねえ!!魔法の嵐、何するも
 のぞ!

「うおおおおお!!」

痛い痛い痛い!偉そうなこと言つてすみませんでした!めっちゃ痛てえ!え、こんなに痛覚再現されてました!?

魚人忍法【不転・珊瑚障】・・・攻撃・補助系統の技術が多い魚人忍法の中でも貴重な完全防御特化魔法。物理、魔法両方への高い耐性と一定範囲へのかばう、一時的な体力自動回復効果など、多くの効果が詰め込まれているがその代償として少くない魔力と圧倒的なまでの激痛を味わうこととなる。

あー、やつべ

刹那、トドメとばかりに巨大な火球が放り込まれ俺の視界は爆炎に塗りつぶされた。

「……へへっ、やったな？」

「ははははは！ぎまあみる！ドラ姫だなんて持ち上げられていい気になるからこんなことになるんだよ！はっはははあ！」

「ちよ、ちよつとグルメチキンさんヤバくないっすか？ただでさえ天ぷら騎士団の評判はダダ下がりだって言うのにこんなことしちゃったら……」

「おいおい、今更ビビってんのかあ!?気にすんなよ！あのジークヴルムを倒したドラ姫を倒したってなりやア、だーれも文句なんかつけられねえよ！」

「……待ってください、グルメチキンさん！まだあいつら生きてぐべっ」

「おい、どうした！」

「ははっ、不意打ちで魔法の雨とはやってくれる。なーにが目的だア？」

「つてメエ！生きてやがったのか!!」

そーだよ。いや、めっちゃうそ痛かったけど。VRにあるまじき痛みだわー。魔法が任

意のタイミングで解除できるのもいやらしい。最早途中から魔法を解除しようとする己の指との戦いだった……ただその分性能は破格だったかな……つとお「おいおい、話の最中に切りかかってくるとかキレてんねえ。カルシウム足りてないんじゃない？ 鮭食う？ 鮭」

「食うか！……へへつ、虚勢を張ってるようだけど意味ねえぜ！ てめえの弱点は知ってるんだよ！」

ほう？ 俺の弱点？ 気になるねえ……

「忍者の隠し職業についてるらしいがどうせハズレ職だろ！ なんせ状態異常特化職なんだからなあ！ つまり状態異常無効アクセサリを大量につけてる俺たちにはてめえはなんにも出来ねえつてことだよオ！」

「ただなあ……？ 俺たちが用があるのはあくまでそっちのドラ姫ちゃんだけだからさあ……あんたが逃げたいって言うなら見逃してやってもいいぜえ！……ああ、そうだ！ なんならあんたも一緒にPKしようぜえ！ 女を殺すのはいいぞお……ホントに殺つてるみてえですげえ興奮すつからよオ！」

はア……？ 俺が秋津茜を見捨てて逃げる？ 挙句の果てには秋津茜を殺せ？ 笑わせんな……！

「……ん……くっ……」

「っ秋津茜！起きたのか。良かった、大丈夫か？」

後ろで秋津茜が何とか身を起こそうと体をよじらせている。

「ああ、無理すんな。ここは俺に任せとけ」

「おいおいおい、起きちまったのかよ！」

「・・・へへっ、まあいいかあ。意識無いやつを黽つても気持ちよくなれねえしなあ・・・！！」

反吐が出るな。正直、こんなやつと言葉をミミリたりとも秋津茜に聞かせたくない。こんな奴のせいで純粹な秋津茜が歪む様を見たくない。

「へへっ、にしてもあんたえらくドラ姫ちゃんにご執心じゃねーか。ひよつとして、身体でたらしこまれた口かア？」

「はあ？何言つて・・・！！」

「っーかドラ姫さんよオ！ジークヴルムの時から思ってたんだよ！あんたは楽でいいよなあ！無責任に頑張れ頑張れつてよオ！！あんたが好き放題やってジークヴルムを倒したせいでこっちは大迷惑なんだよ！これだから周りのことも考えないで自分のことばっかり考えてるやつは困るんだよなあ！」

「おい！さつきから聞いてりやべらべらと・・・いい加減にしろ！」

言いがかりにも程があるだろ・・・！この世には言つていい悪口と言つてはいけない

悪口があるが、こいつのは完全に後者だ。カルマ値はたまるがしやうがない。仕留めるか……

「ああ!?!いい子ちゃんぶってんじやねえよ!てめえもさあ、心の中じや思ってるんだろ?!」「あーあー、こいつについて来たせいでPKに襲われるし最悪だよ。マジで迷惑だな」つてよオ!なあ!?!あんたも可哀想だなあ!向こう見ずの馬鹿女に振り回されてよオ!

「しかもよオ!そこの女はユニークを独占してんだぜ!?!あのツチノコ野郎もそうだが、こいつらには周りを思いやるつて言うことが出来ねえのかなあ!!自分たちの行動のせいで何人ものプレイヤーがシャンフロを本来の楽しみ方できてねえつてのによオ!!しかもそれを悪びれもしねえ!何だ何だア!?!勝者の当然の権利とでも思つてんのかあ!?!負け犬は黙つてろつてか!?!あーあー、やだやだ!勝者はなあ、敗者に気を使うんだよ!お前のせいで苦しんでるヤツがいるつてことを知つて、それを後悔し続けなきやいけねえんだよオオ!!」

「それを知らねえで楽しそうにしてるだあ!?!有り得ねえなあ!どうせリアルでもお前の周りのヤツは迷惑してるだろうよオ!!ホント、楽でいいよなあ!!」

「——— 黙れ」

「ああ?なんか言つたかあ?」

もういい。こいつはダメだ。ただPKするだけでは必ず復讐してくる。

「お望み通り見せてやるよ——てめえの見たがってたユニークだ……！！」
——今ここに狂気は舞い降りた。

狂気の代償、消える心

——蛸忍という職業がある。忍者の隠し上位職業であり、ユニークモンスターと深い関わりを持つことよって開放される。その能力は状態異常特化。自身の触手に毒や麻痺、暗闇など様々な状態異常を付与し闇討ちする直接戦闘力には優れない職業。

……であれば、そのさらに上は？ 蛸の忍びの技を極めた者のみがることを許された蛸忍聖。それも状態異常特化であり、ハズレ職であるのか？

——否、否！ 否！！

忍聖が、忍びの技を極めた者が、7つの最強種の名を冠したものが！ 弱者であるはずがない！！ 見よ、開拓者よ！

悠久の墓守は、刹那の誓いを守りその身朽ち果てようとも永遠にその刃を振るつた！

黄金の龍王は、己の創造主の想いを継ぎ世界に英雄を見出した！

時渡の歌姫は、過去からの遺志を繋ぎ、新たなる世代へと繋がる渡り鳥に想いを託した！

暗夜の狼王、憎悪の龍蛇、彷徨の首狩兎。

全て、全て、己の全てを賭して世界に在る。

「——刃隠心得終極奥義——」

【深淵^ク反転^{ター}・具現^{ニツ}蛸^ト】

自身の心臓がはねる音が聞こえる。カラダが広がり、触手は捻れ肥大化し絡まりあつていく。みるみるうちに見える視界が高くなっていき、周囲の木々を見おろせるくらいになつてようやく視界の上昇は止まる。・・・嗚呼、カラダが叫んでいる。吼えろと、セカイに己を示せと。

『Boooooooooooooooooooo!!!』

はははは!!! 良いねえ、最高にハイ[!]つてやつだア! その心粉々に砕いた上でお家に返してやるよ!!

「あああああ!!? 何だ何だ何なんだよオ![!]? クソがア!!」

下の方で魔法が着弾したのが分かるがほとんどダメージがねえ・・・半端ねえな、刃隠心得終極奥義。

『Ooooooooooooooooooooo!!!』

「があああああああああ!!! アタマがア!!」

はははははは! 効き目抜群じゃねーか! 状態異常特化アクセサリはどうしたんですかーっ!

『Krrrrrrraaaaaa!!!』

「ぎゃああああああああ!!」

うはははははは!まさには鎧袖一触!足を動かすだけで敵が吹っ飛んでくねえ!!

『Kysyaaa aaaaaa!!!』

「・・・あ・・・ああ・・・ああ・・・ああああああ!お、俺が悪かった!

だからやめでくれええ!!」

おつ、これは幻覚効果かな?良いねえ、イイネエ!いい具合に怯えてんジャン!

『kyuriiig.iiiiiiiiiiG!!!』

ア・・・ア・・・アあ?今なんか意識が・・・気のせいかな?あ、下の方で死にかけてるのが逃げようとしてんな。逃がスカヨオ!!

『rrrrrrrrrrrrrvdnstfkrmxferapuvrrqr!!!』

アハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハア
ヒヤハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハア
!!!!!!!!!!!!

刃隠心得終極奥義・【深淵反転・具現蛸】

忍者系統隠し最上位職蝮忍聖になった時に開放される奥義書を読むことよって習得可能。7つの最強種が1つ、クターニツドの力を一時的に借りることが出来る。ゲーム的な説明としては最大MP、スタミナの9割を消費し、両手を合わせる印を結ぶことで発動可能。5分間巨大な触手生命体へと変貌を遂げ活動可能。発動中は常時体力自動回復効果がかかっている。また、通常のスキルや魔法は使えないが、この形態の時のみに使えるスキルがある。効果終了時、使用者の意識が残っている場合はMP、スタミナの最大値が一定時間ゼロになる。また、全ステータスに大幅な下降補正がかかるため、効果終了後はまともな戦闘活動は望めない。

——忘れてはならない。人は人に過ぎぬ。その身に過度の力を宿せば心無き怪物と成り果てん。力に我を忘れれば、自力にて元に戻ることは能わず。怪物は、忘れられる——ゆめゆめ忘れることなかれる——

ヒヒヒヤハハハハハハハハハハ

!!!!!!!!!!!!

堕ちた蜻蛉

side : 秋津茜

今日は良い日になるはずでした。ジークヴルムさんとの戦いの時に知り合った、天首領さんとの戦いで殺されかけた私を助けてくれた命の恩人の葵さん。そんな彼と一緒
に新大陸の森に狩りに来ていました。彼はまだレベル上限を解放していないのにとて
も強い人なんです！戦い方が上手いんでしょうか？なんだかサンラクさんにもちよつ
と似ている気がします。ノワルリンドさんも何だかんだ言いつつも嫌そうにはしてい
ないので私も嬉しいです！

でも、違いました。モンスターを倒した隙を狙われて何らかの攻撃を受けた私は地面
に倒れ込んでしまいました。体は痺れ、視界は暗く塗りつぶされ、合体してはるはずのノ
ワルリンドさんの声も聞こえません。ああ、ここで死んでしまうのかとまで思いまし
た。でも、葵さんは私を助けてくれました。目は見えなくても分かります。心の底から
私を心配してくれているのだとわかる声。たくさんの攻撃が降り注ぐ音。それが柔ら
かいものにあたり、同時に聞こえる苦悶の声。

私のせいでした。その後何人かの人達が私たちの周りに出てきたのがわかりました。

その頃には体の痺れも弱まってきて、周りの様子も少しですが見えるようになっていました。何とか体を起こそうとしたら葵さんはすぐに近よってきてくれて心配してくれました。優しいな……でも、その後に聞いてしまった言葉。私のせいで苦しんでいる人が、シャンフロにもいる……？私はリアルでは陸上をやっています。そこでも勝ち負けはあつて、負けた人が泣いていて……でも勝者は勝ち誇るべきであるはずで……

私がいけなかったんでしようか。走ることが楽しくて、でも、周りは苦しんでいた……？楽しんでいたのは私だけだった……？新しく始めたゲームでも他人に迷惑を……？恩人にも迷惑を……？

私は……もう他人の笑顔が、私に向けてくる善意が信じられないかもしれないかもしれません……だって……全部……私が……悪いから……

どれくらいだったのでしょうか。後悔と自責、恐怖と絶望が心の中で渦巻き、何も考えられなくなっています。気づけばノワルリンドさんとの同化も解けています……通じ合えたと思っていたのも私だけだったんでしようか……

また、負の感情のスパイラルに落ちかけていた私の思考を木々の破碎音が引き止めま

す。そういえば葵さんはどうなったのでしょうか．．．きつと私なんか見捨ててしまっているのかもしれない．．．今の今まで助けられたことも忘れて、自分のことしか考えていなかった私の事なんか．．．

『Boaaaaaaa!!!』

耳に障る、だけど優しく、でもどこか悲しい悲鳴が聞こえてきます。導かれるようにして上を向くと見るだけで心が削られていくような怪物がそこにはいました。（ああ、ちようどいい。ここで殺してもらえれば、もうシャンフロにこない言い訳ができる。）普段の諦めることを望まない私からは考えられないような弱音が頭のどこから私に囁きます。

『A——aggi．．．zuaaaga．．．neeeee．．．』

．．．．．?今、私の名前を呼ばれたような．．．．．気の所為ですね．．．自意識過剰でしょうか．．．．．

『gg, gggaaaaaaa!!aaaaaaa!!!』

何でしょうか．．．やっぱどこか苦しんでいるような．．．．．あれ?よく見るとこの怪物、蛸に似ているような．．．タコといえば葵さんが．．．．．まさか?

「．．．．．葵さん、ですか．．．?」

『A——a a a u a』

『A k i . . . t u 茜』

私が葵さんの名前を呼んだ瞬間、怪物の全身が光を発し、みるみるうちにその巨体が萎んでいきます。そして、光と煙が収まると、そこにはいつも通りの葵さんが疲れきった様子で座っていました。

「. つ！葵さ」

ついついついものように駆け寄ろうとしましたが、体が凍りついたように動きません。拒絶されるんじゃないか、罵倒されるんじゃないか、「お前のせいでこうなった！」そんな言葉を聞くのが怖くて、葵さんの顔を見ることが出来ません。

「. 秋津茜」

つ！

「. す、すみません . . . わた、私のせいで . . . こんなことになって 葵さんもボロボロで」

拒絶されるのが怖くて、でも何も言わないという選択肢を取るほどの勇氣もなくて、泣きそうになりながら必死に言葉を紡ぎます。

「. ご、ごめんなさい」 (. . . 助けて . . .)

「. あー、」

「……め、迷惑ですよね……」（……見捨てないで……）

「……秋津茜」

「……もう私には会わない方が……」（……一緒にいたい……！）

「秋津茜！」

「ひっ！」

あ……つい悲鳴を上げちゃいました……葵さんは悪くないのに……もうダメですね、私……闘病生活の時を思い出します……あれから変わったと思えたのに、結局心の根はあの頃から何も変わってないんでしょうか……

「……あ、えつと、ごめん。」

「……やめてください……葵さんは悪くないのに……謝らないで……」

「とりあえず、助けてくれてありがとう。秋津茜が呼びかけてくれなきゃ、俺は戻って来れなかった。」

「……そんなこと言わないでください……私は葵さんに感謝されるような人間じゃ……」

……葵さんが感謝してくれているのに、本当ならとても嬉しいのに、こんな卑屈なことしか言えない自分が嫌になります。……ほら、困惑してる。2回も助けてくれた恩人なのに、こんなことを言っただけで困らせることしか出来ない。……もう、消えちゃい

たいです……

「……いいや、言う。俺は言うぞ！何回だつて言つてやろう!!何を思つてるかは知らんが、秋津茜が自分のことを俺に感謝されるような人間じゃないと言うなら、そんなこともう二度と思えないくらいに感謝し倒してやるよ！」

「つーか、どうした秋津茜。ひよつとしてあのPK野郎が言つていたこと気にしてんのか？」

「……葵さんにはお見通しみたいです。」

「……はい。」

「……葵さんは、私のことをどう思つてるんでしょうか……やっぱり迷惑なのかな……気になります。気になるけど……聞くのが怖い……」

「あー、秋津茜？何か言いたいことあるなら言え。望む回答はくれてやれないかもしれないが、踏み出さないよりかはマシだろ。」

「……」

「……葵さんは、私のことをどう思つてますか……？」

「ふあ!?!」

伝えなくてはならない思い

『rrrrrrraaaaaaa
!!!!!!』

ハハハハハハ!!イキブンダ!

『Oooooonnn!!!』

アア?ムシガ、マダノコツテイタカ?

『Boaaaaaa
!!!!!!』

ツブレロ!!

——おい

『gi····gaaaaaa
!?!?!?』

ガ····カラダガ···

『A····gizuu····aganeeee···』

ア····アあ····あー?

「········葵さん、ですか?」

——ああ。

『A．．．．．k i t u ．．．．．茜．．．．．』

秋津茜に名前を呼ばれると共に今まで暗く染っていた世界が急速に色を取り戻していく。．．．．．なんか知らんけど、めっちゃ疲れてる。えっと、確か——

「．．．．．つ！葵さ．．．．．」

んあ？ああ、秋津茜にお礼を言わないとな。多分意識飛んでたのは刃隠心得の終局奥義の影響だろ。どんだけやべー技なんだ。

「．．．．．秋津茜．．．．．」

ありがとう。そう続けようとしたが、

「．．．．．す、すみません．．．．．わた、私のせいで．．．．．こんなことになって．．．．．

葵さんもボロボロで．．．．．」

んー？なんか変だな。妙にオドオドしてると言うか、腰が引けると言うか．．．．．かそう考えるときっきの呼び掛けもなんか変だな。普段なら飛びついてくるぐらいのことはしてもおかしくないと思うんだが．．．．．？

「．．．．．ごめんなさい．．．．．」

んんん、やつぱり変だ。秋津茜はこんな相手の目をまっすぐ見ないような喋り方はない。

「……あー、」

とりあえず何か声を掛けなきゃ行けない。そんな思いと共に声をかける。

「……め、迷惑ですよね……」

何がやねん。いや、マジで。

「……秋津茜」

「……もう私には会わない方が……」

いやいやいや、どつからその結論が出てきたんだ。段階飛ばしすぎじゃん……飛び

級かよ……

「秋津茜！」

「ひっ！」

うえっ!? ヒメイ!? ナンデ!? ……いや、とりあえず謝ろう。うん。

「……あ、えっと、ごめん。」

気まずう! なんも答えてくれないの、超気まずう! んん、ゴホン。

「とりあえず、助けてくれてありがとう。秋津茜が呼びかけてくれなきゃ、俺は戻って

来れなかった。」

「……そんなこと言わないでください……私は葵さんに感謝されるような人間

じゃ……」

ええ……何コレえ。光属性はどこに行った。ていうか感謝される人間じゃないだろ？……ムカつくな。そういうのは感謝する側が決めるんだよ……！

「……いいや、言う。俺は言うぞ！何回だつて言つてやろう!!何を思つてるかは知らんが、秋津茜が自分のことを俺に感謝されるような人間じゃないと言うなら、そんなこともう二度と思えないくらいに感謝し倒してやるよ！」

「つーか、どうした秋津茜。ひよつとしてあのPK野郎が言つていたこと気にしてんのか？」

いや、これで「あんな化け物とは思わなかった。近づかないでください。」とか言われたら立ち直れない気がするけどな。けれど、そんな俺の心配は杞憂だったようで

「……はい。」

か細い声で、震える声で秋津茜が静かに肯定する。……そつかあ、気にしてんのかあ……俺から言わせれば、あんなやつ言うことなんざ欠片も気にする必要は無いんだが……そう簡単には割りきれなかったということなんだろう。ただなあ……さすがにこのままという訳にもいかんし……

「あー、秋津茜？何か言いたいことあるなら言え。望む回答はくれてやれないかもしれないが、踏み出さないよりかはマシだろ。」

地雷を踏む覚悟で、秋津茜に思っていることを聞く。よしこい、ドンと来い！よつぽ

どの内容じゃなきや受け止めてやろう!

「……………葵さんは、私のことをどう思ってますか……………」

……………

「ふあ!?!」

んえ!?!ええええええええ!?!?!?

「ええええええと、あの、あ、秋津茜さん?そ、それはどういう意味でいらつしやりますのですの?」

「……………すみません、何でもありません……………迷惑、でしたよね……………い、今までありがとうございます……………もう会いませんからつ……………」

はい、選択肢間違えたね!んー!もー!ああー!

「秋津茜、待つて!」

ノロノロとした動作で秋津茜がこちらを振り向く。その目は酷く陰っていて、深い絶望に心をおおわれているように見えた。

「あーつと、まず俺は秋津茜と一緒にいて迷惑だなんて思ったことは無い。」

これは本当。何かしらのトラブルに巻き込まれることもあるが、秋津茜と一緒にいられることの楽しさに比べたらどうってことは無い。

「んで、だな。秋津茜のー、なんてーの?諦めることを是としない姿勢っつーか、そう

いうのすごく好ましいと思う。うん。」

暗く澱んでいた秋津茜の瞳に一筋の光が見えた気がする。．．．ええい、南無三！

「秋津茜、俺はな。秋津茜のことが——」

龍災轟く新大陸の森の中。絶望的な状況にありながらも最後までその輝きを失わなかった一人の少女。——ああ、そうだな。今考えると俺は、あの時からその輝きに魅入られていたのだろう。あの出会いの時から続く万感の想いを、単純な言葉に込めて送り出す。

「——好きだよ。大好きだ。」

それは柔らかく優しい想い

「——好きだよ。大好きだ」

んんんん、恥ずかしっ！いやいや、ここは平静を保たねば・・・

「・・・ごめんなさい・・・」

んぐえ。とんでもねえカウンターをくらったぜ・・・ああ、もう帰ってえ・・・めっちゃ恥ずい・・・

「・・・私、もう分からないです・・・周りの人が私に今まで向けてくれていた笑顔が、言葉が、本当に心の底から出たものなのか・・・」

「・・・皆みんな、心の底では迷惑だと思ってるんじゃないか、楽しいのは私だけじゃないかって・・・」

「・・・ホントは葵さんに好きだって言われて、凄く嬉しいんです・・・でも、この状況を早く終われたいから言ってるんじゃないか、ホントは好きでもなんでもないんじゃないかって思っちゃうんです・・・」

・・・ああ、そういうごめんなさいか・・・良かった！秒で振られたかと思いました

！……んー、でも、ホントは好きじゃない、ねえ……

「ねえ、秋津茜。俺はさあ、こういう真面目な場面で嘘つくやつって大嫌いなんだよね。……それでも俺が秋津茜のことを好きって言ったのが嘘だと思おう？」

「………思わないです……けど……」

「………でも、でも！分かんないんです！ホントの心が！……今まではそんなこと思ってもみなかつたんです！周りの人がどう思ってるかなんて！だって、だって！私は今まで諦めることしか出来なかつたから！それでも頑張つて！諦めずに色んなことをやれるようになったんです……！」

「……だから、頑張れるのに、私に出来ない事を簡単に出来るのにそれをやろうとしない人は嫌いだし、そんな人になりたくないんです……！」

「……葵さん、私のことを好きだって言うなら答えてください……私は……間違ってるんですか……？」

秋津茜が間違ってるか、かあ。過去に何があつたかは知らんが……いや、なんとなく想像は着くけどさあ……うん、でもそうだね

「秋津茜が間違っているか、そうでないかと言えばまあ、間違ってる」

「………つ、で、ですよね……」

「まあ、最後まで聞け。頑張ろうとしても、頑張れない人もいる。諦めたくなくても、

諦めざるを得ない人もいる。だからそんな人に頑張ることを、諦めないことを押し付けるのは間違ってる」

「でもな、世の中は正論だけで回ってるわけじゃない。正しいものが必要になる時もある。間違っているものが必要になる時もある。秋津茜の何にでも諦めずに挑戦する姿を見て救われた人だっているだろう」

「人は神様じゃないんだからみんなを救うことも出来なければ、みんなから好かれることも出来ない。だからさ、いいんだよ別に。自分をすり減らしてまで周りに合わせる必要なんてない。好かれようとしなくなるといい。自然に振舞って、それでも周りに残ってくれた人がお前に一番合う人ってこった」

んー！恥ーずーいー！何言ってるの、俺！びっくりだわ！この口か？この口なのか！ああああああああ!!!

「・・・そうなんですか・・・私は自分の楽しいように過ごしていいんですか・・・？」

「良いって言うてるだろ？・・・それに、秋津茜が楽しいように過ごしても、絶対に見捨てないやつがー人は確実にいるしな」

うわああああああ!!!はあああ?!んああああ!!言ってる恥ずかしいー!!全力で逃走したい!!ほらあ、ちよつとキョトンとしてるじゃーん!!お面のせいでみえない

んだけどねえ!

「………あおのくん………」

んん?

「待つて、秋津茜。今なん」

ドンツと軽い衝撃と共に秋津茜の体温が余すことなく全身に伝わってくる。え、何コレ。何で!?

「あ、秋津茜さーん……?」

「………もうちよつとだけでこのままで居させてください………」

先程よりも強く秋津茜が抱きついてくる。それはまるで親にしがみつく幼子のように、零れ落ちた自分のカケラを俺の中に見ているようで………何故か俺にはそんな秋津茜がとてつもなく愛おしく思え………手は、口は勝手に動いていた。

「ん………よしよし。大丈夫、大丈夫。秋津茜はいい子。ちよつと疲れちゃったね。今だけは……存分に休んでいいよ?」

「………はい………」

寒い冬に温め合う動物のように、互いに互いを抱きしめ合う。傷ついた心を癒すために、人の温かさで凍りついた心を溶かすために。人の目などない深い森の中、俺と秋津茜は優しく、されど激しく、互いに抱きしめあつた。

「……ん、もう落ち着いた？」

「……はいっ！」

「まあ、その、何だ……どうしても耐えられないような辛いことがあつたら……頼つてくれな？……俺も秋津茜は笑つてる方が好きだし……」

「……そつか……えへへ……そつかあ……」

あ、なんか凄いい嬉しそう……良かった、良かった！それでも考えねえと恥ずか死ぬ……いや、普通に恥ずかしいわ！すぐにでもこの場を離脱したいっ！

「んん、あー、秋津茜さーん？」

「はいっ！何ですか、葵さん！」

わーい、すごい元気そう。やはり光属性。立ち直るの早いなあ……

「まあ、とりあえず帰ろつか。今日は疲れたでしょ？」

俺もちよつと疲れた。明日も普通に学校だしな……。めんどくせつ

「……私、もうちよつと葵さんと一緒にいたいです！」

んみゅー、嬉しい。けど困る。もう結構夜だし……。つーか俺どんだけ暴れてたんだろうなあ……

「んー、じゃあスカルアツチまでだよ？」

「はいっ!・・・えいっ!」

「みやつ!?!」

秋津茜がいきなり腕に引つ付いてきた。何この子、可愛いかよ。つてか積極的過ぎん?え、これが光属性パワー?てゆうか秋津茜さんてば、何がとは言わないけど結構あるんだね・・・

「あー、あのー、秋津茜ー?コレはどーゆう?」

「こうしてたいんですけど・・・ダメ、ですか?」

「全然いいよー!」

ノータイム返事やめろや!さっきから口がよく回るねえ!あああ、今思い出しても恥ずかしい。ゲーム内で告白つてそれたんなる出会い厨じゃん・・・てかそもそも秋津茜の中身が女の子じゃない説も無くはないんだよなあ・・・チラツ

「?」

すつごいキラキラした目でこつちを見る。うーん、溢れ出る小動物感。これの中身がおつさんとか有り得ねえな、うん。いや、でも、うーん。

「あのさあ、マナー違反を承知で聞くけど秋津茜つてリアル女の子?」

あー、聞いてちゃった。出会い厨?出会い厨になるの?俺。超リアルなゲーム始めたら

出会い厨だった件、始まっちゃおう？

「はい、そうですね！えっと、私も葵さんのリアルのこと聞いてもいいですか・・・？」
んんん、それは・・・でも秋津茜も答えてくれたし・・・うーん、まあいつか。質問によるって感じで。

「いいよー、何が聞きたいの？」

「葵さんつてすごく大人な雰囲気ですけど、その、何歳くらいですか？」
年齢かあ・・・まあこんくらいなら大丈夫かなあ。一応他の人には言わないようにしてもらえれば。

「んー、そんな大人じゃないよ。まだ中学生。」

「ええっ！そんなんですか!?!じゃあ、私と一緒にすね！」

今明かされる衝撃の事実。秋津茜氏は中学生だった!!いや、まあそんなくらいかなーとは思ってたけどね？

「ふふ、ひよつとしたら同じ学校かもねえ。」

「えへへ、そうだったらいいですね!じゃあじゃあ・・・」

狂気の忍は過去に閉ざした心を赤とんぼの少女に救われ、赤き龍の忍は暗き闇に閉ざ

された心を昏い青の少年によって救われた。2人の忍びの物語は未だ終わらず・・・

「あー!!!ノワルリンドさんのこと忘れてました!!」

「確かにい!!」

「秋津茜えええ!!!我をおいていくなあああああ!!」

間章

急遽作り上げた主人公を掘り下げる回

俺が紅音と付き合ってしばらくたったある日の午後。デートの途中で適当な喫茶店に入り、しばらく談笑していたのだが……

「俺の過去について知りたい？何で？」

「思ってたんですけど、私たちってお互いのことをまだ全然知らないじゃないですか。だから少しでも伊鈴くんのが知りたいなって……ダメ、ですか？」

……いつかは聞かれるだろうとは思っていたが、結構早かったな……

「あー、そんな面白いものじゃない……っていうか結構嫌な話だけど大丈夫か？」

「大丈夫です！よっぽどの事がない限り伊鈴くんのことを見捨てたりなんてしませんから！」

「……はあ、そうだな。何から話すか……」

そうだな、まずは家族構成から話すか。父親と母親、それに俺と妹の四人家族だな。妹……夢花は紅音も会ったことあるだろ？……そうそう、あのはっちゃんも忙しいらしく帰ってくるのは正月と俺たちの誕生日の時くらいか。んで母親の方なんだが……まあ、病弱なもんでな、夢花を産んだ時以来病院から離れられない生活を送ってるよ。……ああもう、そんな顔すんなって。別に命に別状がある訳じゃない。しよっちゆう会いに行ってるしな。そのうち紅音を紹介しなくちゃなー……

話がズレたな。後はちっちゃん頃の話か……幼稚園は特に何も無かった。母さんは行事とかに來られなかったけどその分親父が来てくれてたからな。特になんも思わなかった。酷かったのは小学校の頃だな。これは小一とかその辺のことなんだが……ま、簡単に言っちゃえば虐められてた。何だろうなあ……何か小学校の授業参観つて親が両方來ない家はおかしいみたいだな風潮あるじゃん。まあ、それで何で母さん來ないのー？みたいなこと聞かれて病院にいるつつたら腫れ物を触るみたいなの……これ、いじめじゃなくて無視か。低学年の頃はなー、煽り耐性も無かったから割とよく泣いてたりしてあの頃が一番きつかった。……だからそんな顔すんなっての！別に

う昔のことだし、気にしてねえよ。

で、あれは小四くらいだったかな。簡単に言えばキレた。というか人と関わることを諦めた。こんな辛い目にあうくらいならもう関わろうとしなきゃいいって考えてなー、その頃には親父も割と忙しそうにしてたから相談とかも出来なかつたし……んで、勉強とか体力作りとか後……家事とか料理とか。とにかく何でも自分一人のできるようにつてやり始めたのもその頃だな。

「まあ、小学校の頃はこんな感じかな。高学年の時もそんな扱い変わらなかつたし。そんな大した話じゃないでしょ?」

「だいぶ大した話でしたよ!?……その、話させちゃって大丈夫でしたか?トラウマだったりとか……」

「あはは、大丈夫だって。もう昔のことだし気にしてないよ」

んで、これもまた俺の人生、というか性格が大きく変わったとこだな。中学上がった時かな？親父がVR機とゲームソフトいくつか買ってきてくれてさ、最初は何か全然やってなかつたんだけど一回やってみたらまあ、どハマリしてねー……ん？どしたの、そんな意外そうな顔して……ああ、まあ確かにさつきまであんな病んでたやつがいきなりゲームにどハマリとか不自然だもんな。んー、でもなあ事実だし……なんて言うかさ、当たり前なんだけどゲームの中じやあ相手のリアルの背景なんて気にしないわけじゃん。親が片方病院にいるとか、泣き虫だとか、女顔だとかそういうのを全部無視して自分の能力だけを評価してもらえる。強い敵に負けたら励ましあって、勝てたら皆で喜んで。そんな当たり前の人との関わりが何よりも嬉しくて、欲しくて。だから俺はVRゲームにハマったんだと思う。自分としていられるけど、自分として見られないから……あ、後はそれまで抑圧してきたイライラとかをモンスターに合法的にぶつけられるって言うのもあったけどネ……くく、そうそう。笑つてりやいいんだよ。当事者の俺がもう気にしてねえんだ、紅音が気に病むことじゃない。

まあ、後は知つての通りよ。ゲームの中じやあ俺は俺でいられたけど、中学時代のリアルのは俺は私でしか居られなかつたからな。特に誰かに絡むことも無く、教室の隅で適当に過ごしてたわけよ。いやー、マジで今だから言えるけど最初に紅音が話しかけてき

た時に思ったの「……うわ、めんど……」だからね。……まあまあ、むくれるなって。しゃあないじゃん。クラスの人気者であられた隠岐さんに話しかけられるとか当時の俺からしたら青天の霹靂、寝耳に水、藪から棒つてなもんですよ。

「……ざつとこんなもんかな。後は紅音も知ってるようにゲームでもリアルでも色々あつて今やこうなってるわけだからねえ……人生つてホント何がきつかけで変わるかわかんねえや」

「ホントですね……でも私、あの時伊鈴くんに話しかけて良かったです！だって今こうして一緒にいられるんですから!!」

「……全く、中学校生活を通して俺なりに成長できたと思ってたけど彼女サマには勝てそうにもないな。」

「……ああ、そうだな。紅音と付き合えて俺はホントに幸せ者だよ」

ふと思いついただけの話・前編

これは忍者ギルドの奥深く、星忍たちの住まう場所にて与えられた試練の話である……



「……でも、何の用でしょうか。葵さんと私をわざわざ指名してくるなんて。」

「何だろうねえ。まあ、龍忍とか関係ではあるんだろうけど……」

新大陸でのジークヴルム戦が終わってしばらくしたあと俺と秋津茜は星忍のじーさま達に呼び出しをくらっていた。用件を言わない緊急の呼び出し。この時点で怪しき度合いはだいぶ高いのにあの時以来あんまり会ってないの秋津茜との共同呼び出し。……疑えと言っているようなものだろう。

「こんにちは！」

「こんにちは」

互いの性格がよく出た挨拶とともに星忍の間に入る。

「……うむ、よく来たな龍忍秋津茜、蝮忍聖葵……」

「……今日呼び出したのはお前たちにある試練を受けてもらうためだ……」
 試練？

「試練ってどんなのですか？」

「……そう急くな、龍忍秋津茜……」

「……この試練で試されるのは汝達の対応力、適応力……」

「……そして、絆……」

「……どうだ、この試練受ける気はあるか……？」

「クエスト「星忍の試練」を受けますか？ はい／いいえ」

んー、どうしよ。前の例星忍の寵愛を考えると報酬はかなりいいと思うけど……俺と秋津茜の

絆ア？絆も俺たちの関係性って知り合いに毛が生えた程度じゃん……

「葵さん、葵さん！どうしましょう？」

「んー、秋津茜はどうしたい？何をするかもわかってないけど……」

「私は受けてみたいですよ！何をするのかも気になりますし……それに何かあっても前みたいに葵さんがきつと守ってくれますから！」

そんなこと言われたら受ける以外の選択肢がないんですけどお!?

「よし、じゃあやってみよっか！」

視界の端に浮かんでいたウインドウのはいの部分を勢いよく押し込む。

「……試練の内容は単純……」

「……ある場所に行き、あるモンスターを倒すだけだ……」

「……では頑張れよ……」

あるモンスター？ちよつと情報が少なすぎやしないだろうか。そう思い、詳しく話を聞こうとしたが……

「……では試練を始める……」

「うわっ!？」

「きゃあっ!？」

鋭い光が部屋を覆い、一瞬の後、俺たちの意識は光に溶けていった。



あー、頭がふわふわしてる……そう、これは寒い冬の朝に布団の中で微睡んでいる時の感覚……ああ、もうちよい寝かせてー……

「みゃっ!?!」

顔面に水滴がぶち当たり慌てて体を起こす。何!?!何事!?! . . . あー、確か星忍のじーさまたちの試練を受けて . . . んでなんか急に光って . . .

「. . . (んん) (んん) . . . ?!」

つてか、秋津茜! 確か光る前までは一緒にいたはずだけど
「. . . . え?」

え? え? . . . はあ!?! 秋津茜を探すべく周囲を見渡した俺の視界に飛び込んできたのは、うつ伏せで倒れている俺の姿だった。

「え、え? どゆこと!?!」

そ、そういえば何か声が妙に高いような . . . そう、あえて言うなら裏声を出している時の声のような . . . それはつまり女声ということだ . . . !!

「えーつと、鏡鏡。何か顔を見れるものは . . .」

いや、体見ればいいだろかと思うかもしれないが、予想が当たってたら事案になりかねんし . . . ええい、俺は誰に言い訳してるんだ。

「. . . あ、あつた。水溜まり . . .」

「. ああああああああ!! やっぱいいいい!!」

水溜まり、いや、池かこれ？を覗き込めば、映り込んでいるのはよく見なれた狐面であり、つまりそれは俺の体が秋津茜のそれになっているという事実の証明にほかならなかった。

「絆を試すつて……そういうこと？」

つまり、体が入れ替わった状態でモンスターを倒してみると。訳わかんねえなあ……前回の試練といいだいぶ私情入つてない？

「……ん……あれ、ここは？」

お、秋津茜が起きた。さっきの悲鳴で起こしちゃったかな。

「つてええ!? 私が2人!? え、え!?」

うーん、いい反応。俺もきつとこんな反応してたんだろうなあ……でもね秋津茜。その体で分かりやすく女の子の子した感じの動きするのやめよつか。酷い見た目になるから。

「んん、とりあえず秋津茜。何があつたか思い出せる？」

「え? えーつと、確か星忍の人達のクエストを受けたら急に光が当たつて……???'」

んー、まあそうなるかあ。へーい、秋津茜。カモンカモン。

「葵さんですよね? でもなんで私の体?」

「とりあえずほら、こつち来てみ?」

「はいっ、わかりましわぶっ！」

「おお、思いつきしコケた。」

「秋津茜!?大丈夫!?!」

「だ、大丈夫です・・・ひゃあ!」

あー、分かった。俺の体だもんな。それまで普通の人間の体だったやつが触手生命体になつてまともに活動できるわけが無い。

「つとと・・・秋津茜、ほれ肩貸してやるから掴まれ。」

うう、秋津茜の身体、体格はリアルの俺とほとんど変わらないのに、1部分だけ決定的に違うせいで重心がブレまくる・・・この状態で戦闘はキツくないかい？

「ありがとうございますーよつとー!」

うあ、自分じゃ気づかなかったけど触手に触られるってこんな感じなんだ・・・小柄な少女に体を預ける体のあちこちから触手が覗いている瘦躯の青年・・・事案臭が漂ってんなあ・・・

「んー、にしてもここどこだ？見たことないエリアだけど・・・秋津茜見たことある?」

正直地上にあまり上がってないこともあり、シャンフロ世界の地理は疎いからな。秋津茜も最近は大大陸に多いことが多いらしいがそれでも俺よりはマシだろう。そう

思ったのだが……

「うーん、見たことないです！モンスターもみあたらないですわね！」

そう、モンスターを倒すだけの試練といってたくせにモンスターがどこにもいない。となると後は……

「やっぱりこの池の中かぁ……？」

自分の顔を確認するために覗き込んだ、割と狭い空間であるこの鍾乳洞の半分以上を占める巨大な池。モンスターがいるとしたらここ以外にないだろう。

「戦闘つてなるとスキルやらインベントリの中身がどうなってるのかも確認しなきゃな……秋津茜、なんかわかりやすいスキル持ってたりしない？」

「うーん……えいつ！」

うわ、秋津茜が空中ジャンプし始めた……ああ、スカイウォーカーか。俺はムーンジャンパー止まりなことを考えるとスキルは変わってないと見るべきか。それなら戦力はそこまで……いや、落ちてるわ。魚人忍法やら刃隠心得・蛸の巻とか使えねーじゃん。触手ないし……クソつ、まさか触手に愛着が湧く日が来るとは思わなかった。

「使えました！スキルはそのまま使えるみたいですね！」

「ああ、そうだな。つてなるとインベントリの中身も……」

思った通り、中身はそのままだな。つてことは体が入れ替わったと言うより一時的に見た目が変わってるって言う方が近いかな？

「あの一、葵さん。」

「ん？どうした、秋津茜。」

「触手ってどうやって動かすんですか？なんかすごい違和感があるというか……」
「んん、罪悪感……！いや、別に俺は悪くないんだけどまだ年端も行かないような女の子に触手の使い方、動かし方を教えるっていう状況が何とも……」

「あー、そうだな……言うて俺もいつも全部の触手を動かしてるわけじゃないからな……とりあえず一番太いこの触手を腕と思って……」

口で言っただけでは分からないと思ひ、触手を掴んだのだが……

「あんっ……?!?!」

「んんんんんん?!?!?!?!」

「あ、ああああ秋津茜さん……?」

「あつ、すいません！ちよつと変な感じがして……」

「いやいやいやいや！こつちこそごめんね！うん！」

びびった。マジで。や、何っーか今まで手のかかる後輩とか妹くらいにしか思つてなかつた秋津茜も女の子なんだな……って思つたというか……ああああああ

ああ!!何考えてんだああ!!クールダウン!クールダウンをさせろ!!

「あつ、葵さん!？」

急速に顔に血が上り、冷やしたくなつた俺が選んだ選択肢は非常にシンプルな…そう、水で冷やすというものだった。

ブクブクブク・・・

わー、透明度たかーい。きれーい。

「ふはあつー!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・大丈夫ですか？」

ガチトーンで心配された。そりゃそうだ。

ごく一部の者しか知らぬ秘密の鍾乳洞の中にある淡水湖。この奥底深くに潜む主は己の領域を侵害するものの気配を敏感に感じ取り、その巨体をくねらせ水面へ向かう……

ふと思いついたただけの話・後編

「まあ、聞け秋津茜。今の行動は池の中にモンスターがいるのではないかと疑問に基づいた行動であり決して俺が奇行をしたとかそういうことではない、いいな!」

「そうなんですか! それで何かありましたか?」

「純粹っつ! 心が痛むぜ・・・すまない秋津茜。」

「いや、見た感じ特に何もいなかった。普通の魚なんかも、な」

「??」

「そうだな・・・ここが普通のゲームだったら別に違和感を感じるような事じゃない。でもここはリアリティお化けのシヤンフロ。何かがないということはそれなりの理由があるはずだ。」

「えーつと、つまり、この池には何らかのモンスターがいるかもしれないってことですか!」

「ああ、そうだ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

何でこんな簡単な結論出すためにこんなイキつてたんだよ・・・やっぱりまだ頭が冷えてねえなあ・・・

・・・シヤアア・・・

「?葵さん何か言いました?」

「いや、何も言っていないけど・・・」

ひよつとしてモンスターか?くそつ、反響定位が使えないのが悔やまれるな・・・

・・・キシヤアアア・・・

「やっぱり何かいますよね!」

「ああ、間違いねえ!と思う!準備しとけ、秋津茜!」

そう叫んだ数瞬の後、池の水面が大きく盛り上がり全身に淡く水の衣をまとった巨大な竜が飛び出してきた。

キシヤアアアアアアア!!!

「でっかい蛇ですー!」

「はいっ！任せてください！」

しかし、見た事ねえモンスターだな……何とか攻撃パターンを見極めたいが……うん？首を後ろに引いて？口の周りに纏っている水を集めて……？

「——っ！秋津茜えっ！全力でこっちまでこいつ!!」

「え、ええ!?分かりました！」

上手く走れないであろう俺の体で何とか俺の元までたどり着いた秋津茜を抱き抱え目の前の池に飛び込む。一瞬後、決して広くはない洞窟の中を青い光が埋めつくした。

ええい、こんな狭いところでプレスを吐くな、プレスを!!マツプ全体攻撃はVRでやっちゃダメってお母さんに言われなかつたんか!?うーん、水中行動持つてりゃいいけど持つてないプレイヤーには無理ではー？

「ふはっ！」

「はあはあ……ありがとうございます、葵さん！」

「ん、お礼は後で！今は目の前のクソ竜をぶった斬る！」

「はいっ！」

噛みつき攻撃を跳んで回避し斬撃を当てる。お、ナイスクリティカル。

「ははははは！三枚おろしがご希望かなあ!？」

「葵さん、蛇捌けるんですか!？」

「んん、っ」

あんまり突っ込まないで欲しいなあ・・・

「ああああああ!!ふざけんなああああああああ!!」

大技当てようとした瞬間、ブレス打ってくるのやめろやあ!しかも3回目え!!……
とはいえ、長く続いてきたこの戦いにも終わりが見え始めている。幾度となく刀術スキルを乗せた斬撃をくらってきた水竜はその絢爛なる水の衣の殆どを失い、その奥にある鱗にも損壊が見られる。ただ、こちらもそろそろ限界が見え始めている。秋津茜は道具のほとんどが尽き、俺も回復アイテムの数かなり底をついてきている。

「つしや、オラア！発狂モードに入って結構立ってんだ！いい加減素材落として死にさらせえつ!! 魚人鉄術・刀舞——夢追伽々里つ……!!」

ブレスが止んだのを見計らい、水面から大跳躍。そのまま空中で体をひねり、回転の勢いを利用してコストと隙がデカめの大技を叩き込む。紫電を纏った斬撃が深く水竜の肉をえぐる。

キシヤアアアアアアアアア?!!?

よつし、かなり削った……あれ、鱗落ちてね? ひよつとして素材? ……ちよつとくらい取ってもバレねえかな……

「うお、危ねえ!!」

触れさせねえとばかりに放たれた無数の水弾が俺が踏み込もうとした先に降り注ぐ。ちくしよう、素材のひとつくらいよこせ!

「秋津茜！次のブレスの後にアレを打ってもらう！用意しとけ!!」

「分かりました！お任せ下さい!!」

恐らく俺の持つている切り札を超えた切り札……鬼札と言うべき刃隠心得終極奥義を除いた中で最も火力を出せるのは秋津茜の使う龍威吹だろう。本人曰くあのクターニツドにすらトドメをさした一撃。こんな木つ端竜程度なら焼き払えるはず。

「オラア、さっさとブレス打てやあ!!」

その巨体を使った押し潰しをバックステップによる最小の動きで回避し、そのまま体表に斬撃痕を刻む。

キシヤアアアア・・・!

「つと、来たな!秋津茜、カモン!!」

「はいっ!!」

走ってきた勢いそのままに飛びついてきた秋津茜を抱え、水に飛び込む・・・いや、待て。今なんか挙動が変じゃなかったか?・・・そう、あの挙動は他ゲーで似たようなのを見た事がある。何故か口から弾丸を吐き出してくる野生動物の群れ相手に戦う無双ゲー。その中でイルカが使ってきた技に似ているんだ。確か使ってきた技はホーミングミサイル・・・!!

「秋津茜、返事はいいからしっかり掴まっとけえ!!」

秋津茜の返事も待たず、池の底に向かって高速で泳ぐ。あつてよかった、水中行動!でも全然進まねえな、これ!ちくしよう、体格差ア!!

右に、左に、後ろから追隨してくる水球を全力でかわす。ああ、もうキリがねえ!!このまま水面に向かって突っ込むか・・・!

「秋津茜!このまま水面に突っ込む!攻撃用意!!」

今度はしっかりと頷いたのを確認して、勢いよく泳ぎ出す。こちらリアルじゃ水泳

の授業くらいしか泳いだ経験ないけど、シャンフロじやあプレイ時間のほとんどを水中で過ごしてんだ。今更水球ごときに遅れをとるかよ・・・!!

「うりやああつ!」

一気に加速して水面を割り、そのまま空中に飛び出す・・・ビンゴ!あの水球を操ってる間は動けねえみたいだな!

「秋津茜えつ!決めろ!!」

「刃隠心得奥義【龍威吹】!」

「すううううう・・・わあああああああああ!!!」

秋津茜の口から放たれた一条の光線は空を灼き、水竜の全身を焼き尽くす。

キ、キシヤアアアアア・・・

そして、一際大きな爆発が起こったあとには地底湖の主の姿はなく、大量の俺たちの勝利を決定づけるものが転がっているのみだった。

「やつ、やった!やりましたよ、葵さん!!」

「ああ、やったなあ!最後の一撃良かったぞ、秋津茜!!」

いやあ、爽快爽快！長かった試練もこれで終了。それに・・・ふふふ、あのサイズ
のモンスターをたつた2人で倒したことによる大量の経験値とドロップアイテム
ム・・・まあ経験値は無駄になるんだけど・・・はあ、早いとこレベル解
放しないとなあ・・・

「葵さん、葵さん！」

「・・・？秋津茜がこちらに手を向けて・・・？・・・ああ。

「はい、ハイタツチ。ありがとな、秋津茜。」

「はいっ!!」

ちなみに、今まで自分で触ったことが無かった触手の手触りは意外と柔らかかった。

「ところで、これってどうやって帰るんでしょう？」

「そういやその問題があったな。ここへは星忍のじーさまたちの魔法？で飛ばされて
きた。なんてこった、自発的に帰る手段がないなんて。やだぞ、ここまで来てデス〇ー
ラするのは。」

「うーん・・・あれ？葵さん、あの子なんでしょう！」

「んー、どれどれ・・・ってあー！お前え!!」

「きゅっ！きゅきゅう!!」

そう、俺が秋津茜と出会った新大陸の森。あそこに俺を送り込んだハムスターが洞窟

のすみに隠れていたのだ!

「いや、でも助かったわ。多分こいつ転移魔法使えるし。」

「え!? そうなんですか、ハムスターさん!」

「きゅきゅー! きゅつ、きゅきゅ?」

「んー、大丈夫かな。秋津茜もここでなんかやり残したことないよね?」

「あつ、はい! ドロップアイテムもちやんと拾いました!」

「ん、おつけー。じゃあ頼むわ、ハムスター。」

「きゅ! きゅー．．．．．きゅきゅきゅー!!」

ハムスターの鳴き声と共に俺達の視界は再び光に包まれ、それとは裏腹に意識は暗転していった。

．．．．．転移魔法っていちいちこんな暗転挟むつけー?

「．．．．．目覚めよ．．．．．」

．．．．．あー?

「．．．．．目覚めるのだ、龍忍秋津茜、蛸忍聖葵．．．．．」

「……………あとごぶんねかせてー…」

「……………目覚めよ……………」

「……………うあー……………」

「ここは……………?……………ああ、星忍の間か……………はっ!

「……………すみません……………でした……………」

「……………構わぬ」

「……………まだ寝ておる者もおるしな」

え?……………ふと横を見るとすやすやと人の触手を掴みながら幸せそうな顔で寝こけて
いる少女……………秋津茜がいた。んん?なんか違和感が……………ああ、お面外れてる
のか。そういや、秋津茜の顔初めて見るな……………てか、これなんだ。傷か?そんなん残
るっけ?

ていうか、違和感はそれだけじゃないような……………どこかで見たことがある?でもど
こで……………

「……………んう……………あ、葵さん……………?」

「ん、おはよ。秋津茜。」

「んみゆう……………おはようございましゅ……………ここは……………?」

寝起きの秋津茜が可愛すぎる件!まあ、待て。落ち着け、俺。ピークール、ピークー

ル。お前はやればできる子だからな．．．？

はい、落ち着いた。

「ここは星忍の間だな。」

「．．．．．？．．．．．え!?!あ、すみません!」

「．．．．．気にするな、龍忍秋津茜。」

「．．．．．うむ、良いものを見たしな。」

は？おいおい、秋津茜の寝顔とか言うなよ？ロリコンか？事案か？

「．．．．．そう敵意を出すな、蛸忍聖葵。」

「．．．．．我が真に見たかったのはそなたたちの絆。」

「．．．．．我らの後継者はほぼ居なくてなあ．．．」

「．．．．．せめて、新しくなった者たちが仲良くあつて欲しい。そう思つてな．．．」

え？じゃあホントに今回のクエストって俺と秋津茜が仲良くなるためだけのクエスト？

「．．．．．その通りだ、蛸忍聖葵．．．」

えー、マジでー。別に秋津茜と仲良くなりたくないわけじゃないけど、なんか釈然としないって言うか．．．

「あの一、よく分からないんですけど私と葵さんが仲良くなれば良いんですか？」

「・・・いかにも」

「じゃあ、大丈夫です！私と葵さんはとっても仲良しですから！！ね、葵さん！」

「・・・うん、そだね！」

なんかもういつかあ！ベツタベタのこと言うけど秋津茜のこの笑顔が一番の報酬でしよ！

ちなみに普通にマーニと秘伝書貰えました。え？秋津茜の笑顔とどっちが良かったかって？ははははは、ノーコメント！！

想告結心

暗く、重く

最近俺は学校に行くのが憂鬱だ・・・何故か？

「おはようございます！青野くん！」

「・・・おはよう、隠岐さん。」

俺の隣の席の女子、隠岐紅音が最近やたらと親しげに話しかけてくるからだ・・・いや、それはいいんだ。話しかけてくるのは別にいい。問題なのはそれに過剰反応するクラスメイト共なんだよなあ・・・

「青野くんは志望校どこにするんですか？」

「・・・んー、悠央かな・・・」

悠央高校。この辺り、というよりこの県でもトップクラスの高校だ。特にこだわりがあるわけじゃないけど、うちの学校からは年に1人か2人しか行かないような学校だから一緒に行くやつもないかと思っただけの理由なんだよな。

「おおー、凄いです！私も行けるでしょうか・・・？」

いや、志望してるってだけじゃ凄くもなんともしねえだろ・・・つつーかそれは困る。困

るんだが・・・

「・・・や、そんなすごいことじゃないよ。それと・・・隠岐さんなら頑張れば行けるんじゃない?」

無理だよ、諦めろ。なーんて言えねえよなあ・・・

「はいっ! 頑張りますね!」

「やつほー、紅音! ちよつと青野借りていい?」

げ、最悪・・・

「借りていいって私の物じゃないよ、恵美ちゃん。」

「あ、そつか。じゃあ青野、来・て・く・れ・る・よ・ね・?」

いやでーす!! 断固お断りしまーす!! と言えはすもなく・・・

「・・・ああ・・・」

そう、こいつこそが諸悪の根源。クズ中のクズ。隠岐さんの魅力に惑わされ心酔して
る迷惑女、桐原恵美。大人しく惑わされときやいいものの隠岐さんが男と話すのは絶対
許さない、自分の言うことを素直に聞かないのは許さないと言っただけの態度であ
る。

「・・・うーん・・・」

後ろで何やら唸っている隠岐さんは放置しつつ桐原について行く。

ああ、憂鬱だ……

「ねえあんた。どういうつもりなの？」

「……どういうつもりも何も無いですけど……」

「はあ!!?じゃあ何で紅音と会話したのよ!!」

「何でって……話しかけられたからです。」

「何!!?紅音のせいにする気!!?あんたは紅音に話しかけられても返事しなきゃいいのよ!!あんたなんかと会話すると紅音が穢れちゃうわ!!」

「ねえ、分かっているわよね?あんたの大切な妹ちゃんを傷つけたくないなら黙って言うことを聞くのよ?いいわね?」

「……」

「いいわね?って聞いてんのよ!!いい!!紅音にもう話しかけないでって言いなさい!!そうすりゃ見逃してやるわよ!!」

「……分かりましたよ。」

「ふんっ……最初からそう言っときゃいいのよ!」

結局、隠岐さんに話しかけられたのは放課後だった。話しかけようとしても隠岐さんが誰かと話していたり教師に呼び出されたりで話しかける機会がなかった。

「……あー、隠岐さん。ちよつと今大丈夫?」

「っはいっ!大丈夫です!」

話しかけられただけでこんなにも嬉しそうな表情をうかべる隠岐さんに実質絶縁を告げるような言葉をぶつけるのはとても心苦しい……心苦しいがやらない訳には行かないのだ。

「んつとね……その……」

「……ごめん……もう話しかけてこないで……?」

歓喜に彩られていた隠岐さんの表情が一瞬にして絶望に染まるのがわかる。これ以上この場にいられない。今まで他人を拒絶することなんて何回もあったのに……何でこんなにも俺の心は鋭く痛むのだろうか……

「……さよなら……」

そのまま鞆を持って足早に教室を出る。

「何あいつ、酷いね。ねえ紅音?あんなやつと関わらない方がいいよ?」

後ろで諸悪の根源が何か言っていたようだが・・・もう関係ない事だ。俺と隠岐さんは明日からは話はしない。アイツらと関わることももう無くなる。これでいいんだ・・・これで。

家に着いた俺はシャンフロをする気も課題をこなす気もわかずそのままリビングのソファに倒れ込んだ。夢花はまだ帰ってないみたいだ・・・ああ、このままここで消えてしまいたい・・・なんてな。

ピロント

俺の気分とは裏腹に明るい通知音がSNSに何らかのメッセージが来たことを伝える。体を起こす気もわかず、寝っ転がったままノロノロとメッセージを確認する。

【葵さん】

秋津茜：葵さん、今日シャンフロで会えませんか!?

葵：・・・どうしても今日じゃなきやダメ・・・?

秋津茜：はい! どうしてもです!!

葵：んー、分かった。あんまり長くは入れないから。

正直、気は進まない。シャンフロをやるような気分でもないし、秋津茜にこんな姿見せたくない。それに秋津茜もあの告白もどき以来ほとんど会ってないし……はあ、とりあえず家事するかあ……

秋津茜との待ち合わせの1時間前に魚人族の里で目を覚ます。

「葵くうーん、おはよおう。」

「あー、おはよ。俺ちよつと待ち合わせしてる人がいるんで行ってくるわ。」

「あー、それってえー、あれでしょおー？秋津茜ちやあん！」

何故バレたし。うーむ、そんなにもわかりやすい顔してるだろうか。

「そーそー、それぞれ。ファイティシアまで行ってくるわ。」

「はいはあーい。行つてらっしやあーい。」

あー、憂鬱。行きたくねえー！

フィフティシアの裏路地にあるカフェ、蛇の林檎。あの外道共が良く集まりに使う場所らしい。今回ここで待ち合わせをしたはずなんだが・・・ああ、いたいた。

「……………ん、秋津茜。早いね。」

ちよつと声かけるのに躊躇いがあるな。

「あ、葵さん！いえ、私も今来たところなんです！」

よかつた、そこまで遅れたって訳でもないか。いや、そもそも待ち合わせ時間までまだ30分近くあるんだけどなあ・・・

「んで秋津茜。話って？」

「あ、えーつと……………」

ん？何か言い出しにくいことなのか？流石に呼び出しておいてなんにも考えてないなんてこたあないだろうし・・・

「秋津茜？どしたの？」

「実はこの前の告白の返事をしたくて！呼びました!!」

「……………へあ？」

予想の数倍とんでもないこと言われた気がする。え、待って。告白ってあれ？あのクソ恥ずいセリフ言った時のこと？

「この前新大陸の森で葵さん、私のこと大好きだつて言ってくれたじゃないですか！それに対してまだ返事してなかったなつて思ってたんですけど……」

そうだったらしい。いや、困る。返事を求めて告白したわけじゃないし、秋津茜と付き合つて楽しませられる自身も俺にはない。それに、今はそんな気分じゃないしなあ……

「あー、うん……あれかあ……。えつと、ごめん秋津茜。今そんな気分じゃないつて言うか……」

「思つてたんですけど!!」

「ひゃい!」

ビビったわ!いきなり大声出すんじゃないよ、秋津茜え……

「その……葵さん何かありましたか？すごく元気がないように見えます!私に何か出来ることがあればなんでも言つてください!!」

……はあ。そう来ちゃったかあ……。だから会いたくなかつたんだよね。秋津茜に会つたら絶対にバレるし……。耐えられなくなつてしまうから。俺が俺で居られるこのゲームで出会えた大切な人。そんな人にこんな状態で会つてしま

えげば・・・・・・・・甘えたくなつてしまう・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・ねえ、秋津茜？」

ああ、でも・・・・・・・・

「はいっ！」

もしも彼女が俺を受け入れてくれると言うなら・・・・・・・・

「・・・・・・・・俺はさ、本当は弱ちちくてどうしようもないやつだからさ・・・・・・・・拒絶されないかが怖いんだ。だからさあ・・・・・・・・約束、してくれる？」

俺の事を嫌いにならないで・・・・・・・・そんなどうしようもなく自分勝手なお願ひも言えてしまう。嫌われるのが怖くて、頼れる人を演じて、甘えずに甘えさせて。でも本当は頼りたかったのだ。甘えたかったのだ。現実で擦り切れた心を電子の世界でいから癒したかったのだ・・・・・・・・!

「・・・・・・・・なりません・・・・・・・・!なるわけないです!!私にとつて葵さんは見習うべき人で、一緒にいると心がポカポカする人で・・・・・・・・とつても!大好きな人なんです!!もし、葵さんが嫌つて言つても離れませんが!!」

・・・・・・・・はは、だつてよ。

「・・・・・・・・ふふ、そこまで言つてもらえるなんて思わなかつたよ。・・・・・・・・うん、秋

津茜。聞いてくれる？」

自然と・・・言葉は口から滑り出た。今までにあつた色んなこと。隠岐さんに酷いことを言つてしまったことや、仲直りしたいと思つてること。抱えていた重く苦しいものを吐き出すかのように言葉は止まらなかつた。

全てを語り終えてふと我に返る。こんなにも自分勝手な悩みを抱いていた俺に幻滅するのでは？隠れていたはずのそんな考えがあふれてくる。だから聞いてしまう。傷ついたとしても、聞かずにはいられないのだから。

「秋津茜・・・どう思った？正直に聞かせて欲しいな・・・」

「葵さんは悪くないです！それにその女の子も話せば分かつてくれますよ！絶対!!」

そうなのだろうか。でも秋津茜はゲームの俺葵しか知らなくて。私吉野伊鈴が本当は酷く醜い

モノである知らないから・・・

「そう・・・？でもリアルの俺はゲームの中みたいに強くは居られないんだよ？他人に對して強く出られないし・・・隠岐・・・ゴホン！その女の子に話しかける勇氣もないから・・・」

「んー！もうっ！何でそんなこと言うんですかっ!!」

「え、だつて・・・」

「だつてもへチマありません!!」

「ええ・・・」

「いつのネタだよ、それ・・・」

「だいたい私に言ってくれたこと忘れちゃったんですか!? 無理に周りに合わせようとしないでいいって! それでも周りに残ってくれる人はいるって!!」

「怖いのは分かります! 誰だつて好んで他人に嫌われたくなんてないです! でも! ここで葵さんが踏み出さなきゃ一生そのままなんですよ!? そんなのって・・・あんまりじゃないですか・・・!!」

・・・・・・・・

「・・・・・・・・秋津茜・・・」

「あの日、あの時、私は貴方に勇気を貰いました。私は

・・・私のままでいいんだつて。そう思える勇気を! だから今度は私が貴方に勇気をあげる番です・・・!!・・・失礼しますっ!!」

秋津茜が急に怒り始めたかと思ったらキスされた。・・・???:!!?.....

!!!!???? 混乱する視界の中、秋津茜の目が目に入る。もしかしたらシャンフロの中で初めて見たかもしれない秋津茜の素顔。初めて見る秋津茜の顔は強い決意の色に彩られており.....ああ、この目だ。俺は.....私はこの目を見たことがある。

むりむりむり！もうかえる!!ねるう!!!

……他に客居なくてよかった……

……いやあ……どうやって話しかけよう……話しかけんって言っちゃった手前言い難い……ああ、そうだ。えーつと、ノートの端でいつか……かきかき……

『昼休みに人目につかないように屋上に来て欲しい』

よし、はい隠岐さん……気づいてえー、机の上ー、気づいてえー!あ、気づいた。……
見ないで、そんな煌めいた目でこつちを見ないで……!浄化されてしまう……

時が経つのは早いものでもう昼休みである。屋上は普段解放されてないけど……優等生ってこういう時イイネ!適当に理由をつけてら鍵を貸して貰えた。……まあ、伊丹先生にはバレてた気がしたけど……

「……屋上って初めて入った気がします……!」

ん、来たか……

「……まあ、普段解放されてないからねー」

「青野くん!」

あああ、純粹な目……心が痛いつ……!

「えっと、青野くん。話して何ですか?」

うん、うん……よし!

「……ごめんなさい!!」

「昨日隠岐さんの気持ちを全然考えてない独りよがりのこと言っちゃったこと謝りたくて。」

「隠岐さんは大した返しもできない俺なんかにも沢山話しかけてくれて、それなのにあんなこと言っちゃって……」

「本つ当に、ごめんなさい!!」

こういう時とはかく謝るんだよ!でも本当に思ってるので!マジですいません!!

「えっと、大丈夫です!気にしてないので!」

いや、嘘でしょ。あんなだけ悲しそうな顔してて気にしてないとか。……. 氣い使ってくれてんだろうな。

「・・・や、私が言えたことじゃないけどさ、隠岐さん嘘ついてるよね。正直に言っ
て欲しい。それがどんな罵倒でも私は受け入れる。受け入れなきゃいけないんだ。」

放った言葉は、傷つけた心は、無かったことにはならないのだから、せめてどんな言
葉も、想いも、受け止めなくてはいけないんだ。

「えーつと、その、ですね・・・しよ、正直に言うと言った傷つきました！とつても！」
うぐっ・・・

「だってだって！一年生の頃から同じクラスで、いっぱい話して！友達だと思つての
に、いきなり話しかけないでなんて言われて!!傷つかないわけじゃないじゃないですかあ
!!」

・・・そっか・・・友達、か・・・そうだよね。

「・・・そうだよね・・・ホントごめん。ごめん！」

「青野くん!!」

「・・・はいっ！」

なんか昨日もこんな感じのことあったな、とか思い

「青野くんは私のことどう思ってるんですか!？」

みっ・・・

「え、ええ!?そ、それはどう言った意味でえ・・・?」

ど、どどどどど意味かなあ・・・？

「どういうも何も無いです！私は・・・青野くんのことをとつても大切に思ってますよ！別に私が大切に思っているからって同じように思つて欲しいってわけじゃないけど！それにしたつて青野くんは私に対して他人行儀すぎです！！もう3年近い付き合いなんだからもう少しフレンドリーに接してください！！」

・・・やべえ、なんも言えない。だつて超ド正論なんだもん。

「・・・あつ、ハイ。」

「えつと、うん。隠岐さんのことはー、うーんと、少なくともリアルじゃ家族の次くらいには大切な人、だよ。うん。」

何も考えずに言つたと思われるかもしれないけどホントのことだ。リアル限定無しだと秋津茜が上に来るけど・・・でも隠岐さんだつて大切な友人・・・うん、友人だ。

「そ、そうですか・・・」

「う、うん。そう。」

「・・・」

「・・・」

「・・・そ、それで！青野くんはそんなに大切に思つてる私に対してなんであんな

なことを言ったんですか？」

「……まあ、確かに気になるよな。」

「や、それはちよつと……」

「私のことなら気にしないでください！どんな真実でも受け入れる気ですから！」

「……いや、言えねえ。例えあの女がどんだけクソだとしても隠岐さんにとつては大
事な友人だろう……多分。知らないのなら知らないままの方がいいのだ……ど
うせあいつ悠央には来れねえだろうし。」

「……や、言えない。無理、絶対無理。ごめん。」

「隠岐さんが嫌いだから言わないとかじゃなくて、隠岐さんのことが大切だから。だ
から言えない。」

「……なんか変なこと口走った気がする……」

「……分かりました。じゃあ、これからはちゃんと話してくださいね！約束ですから
ね!!守らなかつたら怒りますよ!!」

「……うん、約束。もう隠岐さんを悲しませないよ。」

「はいっ！絶対ですよっ！」

何とか仲直りすることが出来たな……とりあえず隠岐さんを教室に帰す。……

どうせ避けられえねえよなあ……

「青野お！ちよつと来なさい!!」

案の定、6限が終わったあとと桐原が俺を呼び出してくる。はつ、ちようどいいわ。どうせもう夢花の小学校に根回しは済んでる。無理に騒ぎを起こすことは無いと思って、今まで耐えてたが……もういいやあ!!はつちやけてこうか!!

「ああ、いいよ?」

はは、イラついてる。余裕な態度が気に食わないってか?

「えつと、青野くん……?」

……そういや隠岐さんと帰る約束してたな……

「んー、すぐ終わらせるから玄関で待つててくれる?ごめんね、ついさつきあんなこと言つたばつかなのに。」

「いえ、大丈夫です!じゃあ待つてますねー!」

あー、可愛い……え?あれ?んん?あれ……?

「青野お……!!もういいわ、公開処刑よ!!」

はは、ガチグレじゃん。ウケるわ。てかもう本性隠す気ないねえ。

「ねえ、皆！こいつは紅音に色々吹き込んだ挙句一緒に帰る約束までしてるのよ!?許せないと思わない!!」

わーい、隠す気マジでないじゃーん。隠岐さん居ないからってのはつちやけすぎじゃない? い?

「はあ!?許せねえ!」

「……最っ低……」

! ！
どこぞの鉛筆仕込みの煽り術……まさかりアルで使うとは思ってなかったけど……

「……悪いねえ、俺は人間でさあ!負け犬語は履修してないって言うかあ!?なんて言ってるかわつかんないんだよねえええ!!」

さあさあ、全力で飛ばしていこうかあ!!

「……はっ、はああああ!!?!」

「つぎっけんなあ!」

「誰が負け犬よ!!」

ああ、悪辣なる鉛筆の囁きが聞こえてくる。……「煽られて平常心失ったヤツとか完全にかモじやーん!」激しく同意だつ……!

「ええ、反応しちゃうって言うことはあ、自分達でもそう思ってるんじゃないんです

かああ?？」

「・・・あつ! しようがないかあー! こーんなひ弱な男の子ー人糾弾するのにもクラス全員でかからないと出来ないような人達だもんね!!」

「ごめんねえ、現実突きつけちゃってえ! 必死で目を逸らしてたのにねええつ!!」
いや、楽しいーつ! 溜まってたストレスが目に見えて減ってくうー!!

「あんた、自分の立場が分かってんの!!? 妹がどうなつてもいいの!!?」

「そつ、そうだそうだ!」

「青野の癖に生意気なのよ!」

「土下座しろ! 土下座!」

くく、弱者が吠える姿は滑稽ですなあ、ペンシルゴン軍師い!!

「あははははつ! 状況を理解していない君桐原ちゃんにいーいことを教えてあげよう!! これ、

なーんだ!」

さあさあ、取りいだしたりしますはICレコーダー! 録音音声加工できないやーつ!
今までの脅迫の歴史が入っているのさ!!

「な、何よそれ!」

え、知らないの? マジで? ははつ、ウケる・・・いや、ウケねえわ。マジでえー・・・
相手がアホすぎると煽りが効力をなさないのかあー。何かもういいかなあ・・・

「あー、これあれね。ICレコーダー。会話録音出来るやつ。あんたの今までの暴言とか脅迫とか全部入ってるから。」

「別に公開しようとかは考えてないんで。もう俺に関わらないで。以上。」
あ、いいこと思いついた。

「じゃあ俺、紅音と帰るから。じゃあねえー!」

かんつぜんに空気が凍りついてるう!楽しいいー!

教室からさっさと逃げ出し、昇降口に急ぐ。．．．あ、ちよつとしょんぼりしてる。

「遅くなった!!ごめん、紅音!．．．あ。」

「え!」

やっべ．．．完全にさっきのノリのままだった。．．．うう、どうしよ．．．

「え、も、もう!いきなりどうしたんですか．．．い、伊鈴．．．くん?」

あ、これもう逃げられねえやつだ。

「何となく呼びたくなっただけ!帰ろ、紅音!」

「あ、待ってくださいよ、伊鈴くん!」

．．．ま、こんなのも悪くないかな。

明るく、優しく

最近私は学校がとても楽しいです！何故かって・・・

「おはようございます！青野くん！」

「・・・おはよう、隠岐さん。」

私の隣の席の男の子、青野伊鈴くんに会えるからです！実は彼はシャンフロ内での私のとっても大切な人・・・葵さんと同一人物なんです！最近はもリアルでも彼と仲良くなれるように頑張ってます！

「青野くんは志望校どこにするんですか？」

「・・・んー、悠央かな・・・」

悠央高校。この辺り、というよりこの県でもトップクラスの高校です。うう、青野くんと同じ高校に行きたいですが・・・私の学力だとだいたい足りないです・・・頑張らなきゃ！

「おぉー、凄いです！私も行けるでしょうか・・・？」

「・・・や、そんなすごいことじゃないよ。それと・・・隠岐さんなら頑張れば行ける

んじゃない？」

「はいっ！頑張りますね！」

「やつほー、紅音！ちよつと青野借りていい？」

「借りていいって私のじゃないよ？」

今声を掛けてきたのは私の友達の桐原恵美ちゃん。ちよつと強引なところもあるけどいい子です！

「あ、そつか。じゃあ青野、来てくれるよね？」

「・・・ああ・・・」

そういえば・・・最近よく青野くんがクラスの女の子に呼び出されているような・・・はっ！まさか告白されているんじゃないや・・・うう、どうしましょう。青野くんは頭が良いし、優しいし、その・・・カッコイイので告白されてても全然おかしくないです！！

「・・・ううーん・・・」

「・・・紅音ちゃんどうしたんだらうね。」

「さあ・・・？でも唸ってる紅音ちゃんも可愛いわ」

「そうだね！」

うう、気になります・・・

結局、青野くんが戻ってきたのはHRが始まる直前だったので何を言われたのか聞けませんでした。その後も他の子に話しかけられたり、青野くんがどこかに行ったりして話しかけるチャンスが・・・仕方ないです。明日聞きましょう！

「・・・あー、隠岐さん。ちよつと今大丈夫？」

「っはいつ！大丈夫です！」

まさか青野くんの方から話しかけてくれるなんて！ひよ、ひよつとして告白とか：

!?そ、そんな皆の前でだなんて・・・

「んつとね・・・その・・・」

わくわく。

「・・・・・・・・・・・・・・・・ごめん・・・もう話しかけてこないで・・・・・・・・？」

・・・・・・・・え・・・・・・・・？

「・・・・・・・・さよなら・・・・・・・・」

そのまま青野くんは鞆を持ち足早に教室から去ってしまいました。

何と言われたのかが分かりません・・・分かりたくありません。

「何あいつ、酷いね。ねえ紅音？あんなやつと関わらない方がいいよ？」

恵美ちゃんの言葉も頭の中を通り抜けていくだけです。確かに青野くんは私が秋津茜であることを知らないけど……でもあんなことを言うような人じゃ……

「……確かめなきや……！」

「え、ちよ、紅音？」

青野くんの家は分からないし、今から追いかけても追いつけるか分かりません。でもシャンフロの中なら。隠岐紅音では無く秋津茜としてなら。きっと彼は私に会ってくれます。ちよつとズルい気はするけど……二度と青野くんと話せなくなるよりはいいです！

「あ、待ってよ紅音！」

「ごめん、恵美ちゃん！でも私行かなきや行けないから！」

恵美ちゃんに呼び止められました。それぞれどころじゃありません。急いで帰らないと！

「……何よそれ……このままじゃ計画が台無しじゃない……」

家に着いた私はすぐに携帯端末を立ち上げ、葵さんに連絡を取ります。

【葵さん】

秋津茜：葵さん、今日ジャンフロで会えませんか!?

葵：・・・どうしても今日じゃなきやダメ・・・?

秋津茜：はい! どうしてもです!!

葵：んー、分かった。あんまり長くは入れないから。

その後、何時に待ち合わせるか、どこで会うかなどを話し合いました。青野くんが何故あんなことを言ったのかは分からないけど・・・でも会わなければ何も始まらないと思っから!

葵さんとの待ち合わせ時間の1時間前に兔御殿で目を覚まします。

「秋津茜殿、おはようで御座る。」

「シークルウさん、おはようございます! 私ちよつと待ち合わせしている人がいるの

で行ってきますね！」

「いつもの事ながら突然で御座るな！では拙者はここで待機してるゆえ、葵殿との逢瀬を存分に楽しんでくるで御座るよ。」

「えっ！なんで分かつたんですか!?!」

まさか超能力?!シークルウさん、凄いです・・・!!

「秋津茜殿との付き合いもそれなりで御座るからな。それくらいのことには顔を見れば分かるで御座るよ」

「うう、そんなに分かりやすいですかね?とりあえず行ってきますね、シークルウさん！」

「行つてらっしゃいで御座る。」

よーし、待つて下さいね、葵さん!

「ちよつと早く着きすぎちゃつたでしょうか?」

ファイティシアの裏路地にあるカフェ、蛇の林檎で待ち合わせをした私たちですが

さんはまだ来てません。

「……………ん、秋津茜。早いね。」

「あ、葵さん！いえ、私も今来たところですので！」

噂をすれば何とやらでしょうか！でもやっぱり普段の葵さんとはちよつと違います。どことなくしよんぼりしてると言うか元気がないというか……

「んで秋津茜。話つて？」

「あ、えーつと……………」

……………なんて言いましょう。葵さんに会うことだけ考えてて何を話すか考えてなかったです！えーと、えーと……………

「秋津茜？どしたの？」

あわわわわわ……………そ、そうだ！

「実はこの前の告白の返事をしたくて！呼びました!!」

「……………へあ？」

「この前新大陸の森で葵さん、私のこと大好きだつて言ってくれたじゃないですか！それに対してまだ返事してなかったなつて思つてたんですけど……………」

「あー、うん……………あれかあ……………えつと、ごめん秋津茜。今そんな気分じゃないつて言うか……………」

「思ってたんですけど!!」

「ひゃい!」

「その・・・葵さん何かありましたか? すごく元気がないように見えます! 私に何か出来ることがあればなんでも言ってください!!」

お節介でも構わないです! 葵さんが・・・葵さんと一緒にまた笑えるなら!

「・・・・・・・・・・・・・・・・ねえ、秋津茜?」

「はいっ!」

「・・・・・・・・俺はさ、本当は弱っちくてどうしようもないやつだからさ・・・・・・・・拒絶されないかが怖いんだ。だからさあ・・・・約束、してくれる?」

俺の事を嫌いにならないで?・・・・そう告げた葵さんの顔は今まで見たどんな葵さんの顔よりも悲しそうで辛そうで、何より寂しそうでした。

「・・・・・・・・なりません・・・・! なるわけないです!! 私にとつて葵さんは見習うべき人で、一緒にいると心がポカポカする人で・・・・とつても! 大好きな人なんです!! もし、葵さんが嫌って言っても離れませんから!!」

言っちゃいました、言っちゃいました! ホントはもつとロマンチックなシチュエーションで言いたかったのに!

でも、私の言葉は葵さんの失った笑顔を取り戻させることは出来たみたいです。

「……ふふ、そこまで言ってもらえるなんて思わなかったよ。……うん、秋津茜。聞いてくれる？」

そう言つて葵さんは私に話してくれました。クラスの子に脅されたこと。同じクラスの大切な友達に酷いことを言つてしまったこと。謝りたいし、仲直りしたいけどもう向こうは話してくれないかもしれないということ……などなどいっぱい、いっぱい話してくれました。

葵さんが悩んでるのに申し訳ないけど、ちよつと嬉しかったです。葵さんは今まで私に弱い所を見せたことがなかったから。弱々しい人が好きなわけじゃないけど、ちよつとくらいは甘えて欲しかったので！

「秋津茜……どう思った？正直に聞かせて欲しいな……」

「葵さんは悪くないです！それにその女の子も話せば分かってくれますよ！絶対!!」

「そう……？でもリアルな俺はゲームの中みたいに強くは居られないんだよ。他人に對して強く出られないし……隠岐……ゴホン！その女の子に話しかける勇氣もないから……」

こんなにも私のことを考えてくれるのは嬉しいですけどっ！もう見てられませんか!!

「んー！もうっ！何でそんなこと言うんですかっ!!」

「え、だつて……」

「だってもへちマありません!!」

「ええ・・・」

困惑したようにしている葵さんですが、もう止まりませんよ!

「だいたい私に言ってくれたこと忘れちゃったんですか?!無理に周りに合わせようとしなくていいって!それでも周りに残ってくれる人はいるって!!」

「怖いのは分かります!誰だって好んで他人に嫌われたくなんてないです!でも!ここで葵さんが踏み出さなきゃ一生そのままなんですよ!?そんなのって・・・あんまりじゃないですか・・・!!」

「・・・秋津茜・・・」

「あの日、あの時、私は貴方に勇気を貰いました。私は

・・・私のままでいていいんだって。そう思える勇気を!だから今度は私が貴方に勇気をあげる番です・・・!!・・・失礼しますっ!!」

心の中で熱く、何よりも熱く燃え盛っている気持ちに逆らわず、勢いそのまま葵さんに抱きつき、優しく口づけをします。恥ずかしいです・・・!けど、葵さん青野くん 隠岐紅音が私と仲直りする勇気を持てるように、私の想いを伝えるために、しっかりと葵さんを見つめます。

「・・・ぶはっ!」

「・・・あ、秋津茜・・・?」

も、もう限界です．．．！早くこの場から離れたいですー！

「ちや、ちやんと仲直りしないと許しませんからあつ!!」

何とか最後にその一言を発し脱兎のように逃げ出します．．．うう、明日青野くんの顔を真つ直ぐ見れる気がしません．．．

その後シークルウさんとの待ち合わせ場所まで全力で走りました．．．前も似たような事をやったとはいえさすがに街数個分の距離を走るのは疲れました．．．

「秋津茜殿、随分早いで御座る．．．ね．．．」

「あ、秋津茜殿お!!?何かすごく顔真つ赤で御座るよ!?大丈夫で御座るかあ!？」

「はひ．．．大丈夫ですよ．．．シークルウさあん．．．」

「どう見ても大丈夫じゃないで御座るう!!」

その後すぐにラビッツに戻りログアウトしました。今日はもう寝ましょう!．．．ちやんと寝れるかなあ．．．

『昼休みに人目につかないように屋上に来て欲しい』

朝学校に行った時に青野くんに話しかけて貰えなかつたのでちよつと絶望しましたが、授業中に手紙を渡してくれました！こういうのいいですよ、憧れてました！

「紅音ー、ご飯食べよ？」

「あ、ごめん恵美ちゃん！ちよつと先生に手伝つて欲しいことがあるって呼ばれてるからー」

「そなの？まあ、頑張つてね。」

「うんっ！」

嘘ついちやいました．．．いや、これは必要なことですから．．．！誰にも知られないようにつてありましたし！

「．．．屋上つて初めて入つた気がします．．．！」

「．．．まあ、普段解放されてないからねー」

「青野くん！」

割とすぐに行ったのにもう屋上には青野くんがいました。というか、普段解放されて

ない場所をどうやって……?」

「えっと、青野くん。話して何ですか?」

「……ごめんなさい!!」

「昨日隠岐さんの気持ちを全然考えてない独りよがりのこと言っちゃったこと謝りたくて。」

「隠岐さんは大した返しもできない俺なんかにも沢山話しかけてくれて、それなのにあんなこと言っちゃって……」

「本つ当に、ごめんなさい!!」

口を挟む隙がないくらいスピードで青野くんが謝ってきます。予測はしていたとはいえ……なんて答えましょう。

「えっと、大丈夫です! 気にしてないので!」

嘘です。すごく、すごく傷つきました!……でもそれを言っても青野くんを苦しめるだけですから。

「……や、私が言えたことじゃないけどさ、隠岐さん嘘ついてるよね。正直に言っただけです!?! そういえば葵さん相手に嘘をつけた試しがありません……そんな顔に出てるんでしょうか?」

「えーっと、その、ですね．．．しよ、正直に言うとお傷つきました！とつても！」

「だってだって！一年生の頃から同じクラスで、いっぱい話して！友達だと思つてのに、いきなり話しかけないでなんて言われて!!傷つかないわけないじゃないですかあ!!」

もうこうなつたらヤケです！今まで言えなかつたことや聞きたかつたこと。ぜーんぶ言いますからあ!!

「．．．そうだよね．．．ホントごめん。ごめん！」

「青野くん!!」

「．．．はいっ！」

「青野くんは私のことどう思つてるんですか!?!」

「え、ええ!?!そ、それはどう言つた意味でえ．．．?」

「どういうも何も無いです！私は．．．青野くんのことをとつても大切に思つてますよ！別に私が大切に思つているからつて同じように思つて欲しいつてわけじゃないけど！それにしたつて青野くんは私に対して他人行儀すぎです!!もう3年近い付き合ひなんだからもう少しフレンドリーに接してください!!」

「．．．あつ、ハイ。」

「えつと、うん。隠岐さんのことは、うーんと、少なくともリアルじゃ家族の次くら

いには大切な人、だよ。うん。」

ふえっ?! 家族の次くらいって……思ってた以上に大切に思われてたみたいです……

「そ、そうですか……」

「う、うん。そう。」

「……………」

「……………」

「……………そ、それで! 青野くんはそんなに大切に思ってる私に対してなんであんなことを言っただんですか?」

「こ、この言い方すごく恥ずかしいです! 何かすごい自意識過剰に聞こえます!」

「や、それはちよつと……」

「私のことなら気にしないでください! どんな真実でも受け入れる気ですから!」

「……………や、言えない。無理、絶対無理。ごめん。」

「隠岐さんが嫌いだから言わないとかじゃなくて、隠岐さんのことが大切だから。だから言えない。」

「そこまで言われちゃったら何も言えません……」

「……………分かりました。じゃあ、これからはちゃんと話してくださいね! 約束ですからね!! 守らなかつたら怒りますよ!!」

「・・・うん、約束。もう隠岐さんを悲しませないよ。」

「はいっ！絶対ですよっ！」

こうして、無事私と青野くんは仲直り出来ました！しかも一緒に帰る約束まで！えへへ、楽しみですよ！

楽しいことが待つてると時間が経つのは早いですね！もう放課後です！

「青野お！ちよつと来なさい！！」

えっ。

「ああ、いいよ？」

ええっ！

「えつと、青野くん・・・？」

私との帰る約束はあ・・・？

「んー、すぐ終わらせるから玄関で待つてくれる？ごめんね、ついさつきあんなこと言っただばつかなのに。」

「・・・気になります！気になりますけど！

「いえ、大丈夫です！じゃあ待つてますねー！」

あああ、気になりますー！

・・・まだかなあ・・・何の話をしてるんでしょう・・・何か最近恵美ちゃんもちよつと怖いし・・・

「遅くなつた!!ごめん、紅音っ!・・・あ。」

「え!?!」

い、今名前で・・・!?!そ、そんないきなりですか!?!えつと、えつと・・・

「え、も、もう!いきなりどうしたんですか・・・い、伊鈴・・・くん?」

「何となく呼びたくなっただけ!帰ろ、紅音!」

ま、また・・・!うう、なかなか慣れませんね、これ!

「あ、待つてくださいよ、伊鈴くん!」

・・・えへへ、色々あつたけど前より仲良くなれた気がします!!

終情始恋

はー、クズばつかですわ

今日は中学校の卒業式。学校生活における大事な行事。ではあるのだけれど・・・正直、面倒くさくないですかあ!?!いや、泣いてる人とかには悪いんだけどお!あんまそういう感じのタイプじゃないし・・・卒業式で起こる恋愛イベントとかフラグすら立つてないし・・・っていうか、まだ式どころか朝礼すら始まってないのに泣いてるやつね。ちよつとよく分かんない。

「おはようございます、青野くん!」

「んー、ああ、隠岐さん。おはよう。今日も元気だね。」

「えへへ、ありがとうございます。それより今日は卒業式ですね!青野くんは卒業式とか泣いちやう人ですか?」

「あはは、まさか。そんなタイプじゃないよ。でも、隠岐さんとかはすごい泣いてそうないメージだけど?」

「うーん、確かに高校は別のお友達もいるので寂しいですけど・・・学校が離れても会えなくなったわけじゃないですから!会いたくなったら走っても会いに行きますよ

!

なんか今日はやけに話しかけてくるなあ。隠岐さんとの会話は楽しいから別にいいんだけど、周りの人の目がっ……痛いつ……!

「隠岐さんらしいねえ。そういえば隠岐さんとは高校同じだよな。これからもよろしくネ?」

「はいっ、よろしくお願いします!一緒ですよ、一緒!えへへえ……」

んー?なんか妙に喜んでない?嫌ってわけじゃないけどそんなになるほど接点なくなあい?

「ねえねえ、紅音!こっちで一緒に写真とろーよ!」

あ、隠岐紅音防衛隊クラスメイトの女子がやってきた。引き渡さないと俺が危ないヤツですわー、これ。

「え、あ、でも今青野くんとお話してるから……」

「んー、気にしなくていいよ。行ってらっしゃい、隠岐さん。」

すまぬ、我とて命は惜しいのだ。……冗談はさておき俺みたいなものばっかに構ってるのも良くないだろう。なんか最近やたらと話しかけてくるけど、本来は住む世界が違スクールカーストうからなあ……

「ごめんねー、青野くん!紅音は借りてくね!」

「あ、ううん。全然気にしなくていいよ。」

はい、皆さん。今のセリフの裏には（紅音はあんたなんかじゃあ不釣り合いなんだよ。身の程をわきまえろ）という意味が込められています。冗談だと思うでしょうか？ 実際言われてますからねー、これ。隠岐さんが階段で転びかけて抱きとめた時、放課後に呼び出されて言葉のナイフでブッスブスですよ。・・・そりゃ卒業式で泣けんわな。むしろ笑うわ。はーあ、帰ってシャンフロやりてー。

というわけで式が終わって教室に戻ってきたんだが・・・

1 カメ：キラキラした目で爆弾発言を放った無自覚の加害者隠岐紅音。

2 カメ：とんでもなく引きつった顔をした被害者ですよ青野伊鈴。

3 カメ：殺意すら籠った目で俺を見てくる自分が正しいと思ってるアホどもクラスメイト達。

ちくしょう、逃げられんっ・・・！

事の発端は少し前。体育館での式典が終わる教室に戻ってきたあとのこと。結局、朝

い。

「青野くんに確認したいことがあるの！恵美ちゃんには、えつとその、関係ないから。うん。」

「な、何よそれ……」

「ちよつとあんた！紅音に何吹き込んだのよ！あんたみたいなゴミ陰キャに紅音がこんなふうになるわけないわ！きつと無理やりにも言わせてるに違いない!!」

なんだこいつ。なんだこいつ（2回目）。いや、真意を聞き出そうとしたのはたすかるがなんでそこでコツチに攻撃してくるんだよ。情緒どうした。カルシウムか？カルシウムが足りないのか？ここにインベントリあつたら鮭出してたぞ。

「いや、知らないけど……」

「嘘だわ！」

はあ？

「そうだそうだ！」

「お前みたいなのが隠岐さんに相手される方がおかしいだろ！」

「俺の方が隠岐さんに相応しいぞ！」

「こんな純粋な紅音を誑かすなんて！」

「最低ね！」

「謝れ！」

「そうだ！謝れ！」

「「「あーやーまーれー！あーやーまーれー！」」」

なんだ、こいつら。頭おかしいんじゃないの？

控えめに言ってイカれてる

ぜんかいのあらすじ。

急遽クラスカースト最上位の美少女、隠岐紅音に校舎裏に呼び出された主人公、青野伊鈴。クラスメイトはクズばっかじゃけえ……

はい、回想終了。

マジで何言ってるんだろうなあ、こいつら。隠岐さんのことを好きって言っても限度があんだろ。誘われた側が言うことじゃないがこういうのは個人間のことじゃないんですかああ？あつ、ひよつとしてモテない人の僻みですかあああ!!?!!?

「ほらね、みんな思ってるのよ。今なら土下座で許してあげるわよ?！」

うーわつ。そもそもこいつらは分かかっていないんだらうか。ここは教室で、お前らが大好きな隠岐さんはここにいるということぞ。

「やめてください!!青野くんのことを悪く言うような人はみんな大っ嫌いです!!」

あー、コレはガチギレですね。まあ、当然だろう。隠岐さんじゃなくてもまともな感覚をしたやつならこんなのは嫌だろうしな。

「な、何でそんなこと言うのよ！私は紅音のために思つて・・・」

「私のためを思つてるなら邪魔しないで！」

「うぐつ・・・」

ははは、言い返されてら。ウケる。てか、ほんとに訳わかんないことばつかな。こいつらの情緒とか、隠岐さんが言いたいことつても・・・いや、それは何となく心当たりが無くはないけど・・・いや、気のせいだろ。うん。

「や、やつぱりアンタのせいよ！紅音はこんなこと言う子じゃなかったのに！そもそも去年からおかしかったのよ、急に紅音と仲良くして！あんたがなんか吹き込んだに違いないわ！」

それは違う。仲良くしてたんじゃなくて向こうがやたらと話しかけてくるようになっただけだ。というか、ティーチャーはまだ来ないのか。いくら何でも遅すぎん？

「あー、てかさ。あんたは隠岐さんの何なの？さつきから紅音は、紅音は、つて。」

「はあ!?友人よ友人！友達がクソみたいな男に引つかかってたら止めてあげるのが友達役目でしょ!?!」

ええ・・・(困惑)、友人名乗るなら邪魔してやんなよ・・・明らか迷惑そうじゃん・・・

「・・・つ、いい加減に・・・!」

「おらー、お前ら席つけー。卒業式の時くらいいい子ちゃんていれんのか。」

おおん、グッドタイミングというかなんとか……まあいいや。助かったぜ。

「あー？……なんだこの状況。おい、隠岐。なんかあったか？」

「あ、伊丹先生……。えっと、皆が青野くんのことを悪くいうんです！」

「ちよつと紅音!?!悪いのは青野じゃない！」

「恵美ちゃんは黙っててください！」

「あー、もういい。あの隠岐がそこまで言う時点で悪い方は大体わかる。んで、青野。お前からなんか言うことは？」

えー、そこで俺に振るのー？正直面倒になつてきたんですけどー……

「面倒なのは私も同じだ。今日はさっさと帰りたいんだよ。さっさと言え。」

わーい、素晴らしいコメント。変に善性ぶつてないだけ信用できるけどな。

「あー、簡単に言えば隠岐さんが私のことを呼び出したら勘違いしたクラスメイト達バカどもが騒いでる、つて感じですねー」

「青野が隠岐に？……それはそれで気になるがまあ置いとこう。んで、桐原。お前は何か言うことあるか？」

おいコラ、どういう意味じゃ。俺も思つてはいるけど。呼び出される理由とかほとんど心当たりないし。

「私たちは青野に騙されてる紅音を助けようとしただけです。自分のことを棚上げし

て私たちを悪人にしてしようとしている青野が全部悪いんですよ、先生！」

「……ふーん。それで、隠岐。当事者たるお前からは？」

「ちよつと、先生！ふーんって何ですか！もつと真面目に……！」

「あ？るつせえわ。つーか今までも言つてたけど、うちのクラスの評判教師間で最悪だからな？生活態度最高クラスの隠岐とテストほぼ毎回1位の青野がいるから苦情を押しえ込めていたようなもんだからな？他のやつは成績は下がるわ、いじめまがいのことはするは……ひでえもんだよ」

「いい機会だから言つとくがうちのクラスは皆隠岐を甘やかしすぎてんだよ。甘やかすだけならまだしも近づいたやつを全員排除しようとするし。正直、青野が不登校にならないかが最近の心配だったわ。」

「隠岐紅音防衛隊の過激派共がバツが悪いように目をそらす。Fooooo！もつと言つてやれー！yeah!!!」

「青野ー、調子乗んなー。お前は積極性が無すぎんだよ。頭の中で考えてばつかなのやめろ。」

んぐつふ。バレバレじゃん。今更だけど。

「はーい。すみません。」

「んで、隠岐。お前はもう少し他人の誘いを断ろうとしろ。ここ数ヶ月はマシになつ

てたが、それでもだ。一人の人間が受けられる愛の重さなんかそう多くはないんだから自分が制御できる範囲にしとけ。」

「はいっ！」

「・・・はあ、柄にもなく色々言っちゃまったな・・・まあ、いいや。はい、これでこの話は終わり。配るもん配ってさっさと終わりにすんぞー。」

伊丹ティーチャーの言葉に渋々みんな席につこうとする。・・・だがこの女はまだ納得していないかったらしい。

「ちよつとー私はまだ納得してないわよー！」

いや、納得しろよ。あの伊丹ティーチャーが、生徒に良いこと言わない先生ランキング堂々の1位の伊丹ティーチャーが！めっちゃいいこと言ってたのに！！

「青野、お前後でグーな？それで？桐原は何が納得できてないんだ？聞くだけは聞いてやる。」

何で分かるのこの人・・・怖あ。そんなに顔に出てるのか？むにむに。うーん、わからん。

「何が!?!全部よ全部!?!私の言うことをよく聞いてた紅音が反抗してばつかなのも!?!青野みたいなクソ野郎が生意気なこと言うのも!?!紅音がそんなクソ野郎に告白しようとするのも!?!全部全部納得できないの!!何で私の思う通りにならないのよ!?!」

「そもそも私と紅音は同じ高校に行くはずだったのに！急に紅音が志望校を変えたせいでそれも叶わなくなつた！しかもその高校に行くのが紅音とそのクズだけなんて！あああああああああ！！！！！！」

「・・・っ！」

「あああああ！アンタのせいで紅音は変わった！あたしの思い通りに動く可愛い可愛い紅音！アンタのせいよおおおおお！！！！」

「おいおい、マジかよ。殴りかかってくるか、普通!?いや、こんだけ壊れてたら普通は通じないか。」

「んー、絶妙に終わってる。そもそも他人ひとを思い通りにできるって思ってる時点で、な。思い通りにならないから人間関係ってのは楽しいんだ。思い通りになる人とだけ一緒にいるなんて、お人形遊びと変わらない。まあ、そう思えるようになったのは隠岐さんのおかげなんだが、な。」

「桐原・・・お前・・・マジか。はあ、こんなになるまで気づけなかったのは私の責任だな。」

「別に先生の責任じゃないと思うので助けてプリーズ！なんでこいつこんな力強いのか？俺だって鍛えてるんですけどー。」

「・・・恵美ちゃん、もうやめてください！私が変わったのは・・・変われたのは、青野くんが私のこと好きだって言ってくれて、私の生き方を肯定してくれたからなんです！」

んひゅっ

「何があっても見捨てないって言ってくれたから、だから変わることを恐れずに一歩を踏み出せたんです・・・！恵美ちゃんのこととは今でも友達だと思ってるけど・・・私は誰かの思い通りになるような生き方は絶対にしたくないんです！！・・・だから、ごめんなさい。・・・さよなら」

超・展・開！・・・じやないよバカあ！コレはあれですかー？やつぱり隠岐紅音フアイナルアンサー秋津茜ということF A？うーん、言いたいことも聞きたいこともいっぱいあるけど——とりあえず伝えるべきことを伝えよう。

「いきなり何口走ってんの!?! おバカ!!」

幻想と現実の交差

秋津茜エ・・・、いや隠岐さん？まあ、どつちでもいいや。今言いたいのはこの凍りついたクラスの状態をどうにかしろってことだよ!!ちくしようめ!

「・・・あー、青野?え、マジ?お前から隠岐に告つたの?」

告つたの?じゃねーわ!うるさいよ、この野次馬教師め!そんなもん気にしてる暇あつたらこの状況どうにかしろ!!

「マジでか・・・教師人生で1番の驚きだ・・・ゴホン!あー、何だ。桐原、これで納得したか?隠岐がお前の言うことを全肯定しなくなったのは青野の影響。隠岐に起こつたことの代いたいは青野の影響だ。」

あれ、その説明都合の悪いこと全部俺に丸投げしてない?

「だからつて青野に復讐してやるとか考えるなよ?この論争で誰が間違つてるかを決めるならそれは間違いなく桐原、お前だ。教師だからつて優しい言葉を掛けてくれるなんて思うなよ?お前が隠岐の優しさに甘え、つけ込んだ結果だ。存分に反省しろ。」

「………何よ」

「何よ何よ何よ!!!みんなみんな青野のこと裏でいろいろ言つてたくせに!知つてるのよ!あんたも、アンタも!紅音のことも裏では都合のいい女とか言つてたじゃない!!それなのに私ばっか悪いみたいに!!」

腐つてるううう!!……まあ、俺のことはいいや。そんな素晴らしい性格してるつて訳でもないし。でも、あんだけ持ち上げてた隠岐さんのことですら裏で色々言つてた奴がいたとか……救いようがないなあ。

「あー、もしもし、保健の先生?ちよつとうちのクラスのやつ連れてつて欲しいんだけど……え?理由?……見ればわかる。んじやよろしくー!」

教師 あんたもあんたで丸投げすんな!

「あー?なんだよ青野。文句あんのか。コレはもう無理だ。壊れてやがる。まあ?他の奴にも面談の必要があるかな?つて感じたが……面倒いな……」

無いです。にしてもなんて卒業式だ。やはり悪い文明……ああ、帰りにえな……隠岐さんが秋津茜ならシャンフロ内で話できるし……

「はあ、この話は終了だ、終了。配布物はここに置いとく。各自で持つて帰れ。はい、

かいさーん。」

やったあ、帰れるー。さつさと帰ろ．．．地味に精神的に疲れたよ．．．ヒスの相手はしたくない。

「あ、あの．．．青野くん。一緒に帰りませんか．．．？」

やはり逃げられぬか．．．高校同じだから良くね？ダメ？つーか、この状況の後でそれを言い出すメンタルよ。ああ、でも完全には割りきれてねえのか、チラチラ見てるし。

「．．．一緒に帰るのはいいけど——良いの？」

「．．．はい。確かに大事な友達だけど．．．私の一番大切な人は葵さんで、それを悪くいうのはやっぱり．．．許せないです．．．」

「ん、そっか。じゃあ帰ろう。」

そう言つて半ば強引に隠岐さんの手を引き教室から逃げるように立ち去る。全く．．．とんだ卒業式だよ．．．

「．．．あの、ごめんなさい。色々．．．」

学校から出てしばらく歩いたぐらいで隠岐さんが声をかけてきた。ごめんなさい、ねえ……

「んー、別にいいよ。あえて一言言いたいのがあるとするれば公衆の面前で俺が隠岐さんに……いや、秋津茜に告ったことをバラされたくらいだし。桐原のことは隠岐さんのせいじゃないでしょ。」

「う、えつとそれの事なんですけど……青野くんは葵さん、ですよね?」

「今更な気もするけど……そうだね。葵こと青野伊鈴です。よろしくネ?」

「はいっ! えーつと秋津茜こと隠岐紅音です! よろしくお願ひします!」

「私……私、青野くんのが好きです! 私とリアルで付き合ってください!」

待つつて、えつ? え、えつ? そ、そんなグイグイ来ちゃう? いや、確かに告白されちゃうかもー、みたいなことは冗談交じりに考えてたけど、ええ! お、隠岐さんてば積極的。

「えつと、うん。俺で良ければ……」

はあああああん!? 何、何なのその煮え切らない返事は! むしろ俺の方から頼む! くらいのこと言えよ!! あああ、もういいや! こんな時くらい吹っ切らないでどうするよ!

「あー、もう! とりあえず隠岐さんじゃなくて秋津茜で呼ぶな。秋津茜! 前に言ったように俺はお前のが好きだ。んでもって、それはリアルでも変わらない。だから俺

の方から頼む。俺と付き合ってくれ！」

「んん、恥ずかしい・・・何ならゲーム内で告白した時よりも恥ずかしい。ていうか秋津茜はいつ俺に葵って気づいたんだ？時期によつては非常に、ひっじょおーうに恥ずかしいことになるんだが？」

「てか、沈黙長くない？やっぱりキモかった？ここで振られるとかあるの？」

「・・・はい・・・はいっ・・・！」

「えへへ、私から告白する気だったのに告白されてびっくりしちゃいました。えつと・・・伊鈴君？」

「はあああああん！可愛い！！嬉しいー!!!」

「んん、えつとこれからよろしくね・・・紅音？」

・・・

・・・

・・・

「あの、名前呼びはもうちよい待って（ください）・・・」

Another Stories

乙女の恋争

2月14日……バレンタインデー。乙女達が偉大なる聖人に少しの勇気を借りて心に秘めた熱き想いを伝える日。そしてここにまた一人思いの丈をぶつけるべく奮闘する少女がいた……

「……痛っ！」

チョコを刻んでいたら手元が狂って指を切ってしまいました。今日は2月13日。バレンタインの前日です。今まではお友達のみんなに買ってきたチョコを上げていたんですが……今年はどうしても手作りのチョコをあげたい相手が出来てしまいました！

「……はぁ……伊鈴くん……」

彼のことを考えると胸が自然と高鳴って、顔が真っ赤になっちゃいます。彼ともつと

一緒にいたい、隣で笑っていたい。そのためにも今回のチョコ作りは絶対に失敗できないのに……

炭化したナニカ（試作品1号）

風化したナニカ（試作品2号）

微妙に蠢くナニカ（試作品3号）

「……………はあ……………」

料理作りとお菓子作りは全くの別物でした……料理は得意だから大丈夫だと思ったのに！うう、このままじゃ伊鈴くんに告白どころじゃありません……それどころかこんなものを食べさせたら、最悪……………死!?

「い、いやいや！次こそはっ！」

さあ、いざ電子レンジをオープンです……………っ！溢れ出るこのいい香り！これは成功間違いなしで……

蛍光色に煌めくナニカ（試作品4号）

……………はあ……………

「紅音ー？どう？出来た？」

「ひゃあああああ!!！」

「お、お母さん!? もう! 入ってこないでって言ったでしょ!」

「えー、だって全然戻ってこないんだもの。もう3時間はやってるわよ?」
え?

「あ、ホントだ……」

うう、もう夜ご飯の準備の時間です……片付けないと……

「うーん……ねえ、紅音。お母さん、手伝おうか?」

「えう……それは……」

「お母さんもね、お父さんに初めてチョコを上げた時は1人で作ったらそれはもう酷いものだったんだけどねえ……」

「正直お母さんに手伝ってもらえばよかつたって思ったわ。それに、自分の娘と一緒に菓子作りするの憧れてたのよねえ。」

うう、どうしましょう。私だけの力でやりたいけど……このままじゃ伊鈴くんに劇物を渡すことになるし……ええい! 背に腹は代えられません!!

「お母さん! チョコ作り手伝ってくださいっ!!」

「ふふ、いいわよ。でもご飯作りが先ね? 紅音も手伝ってちょうだい。」

「うんっ!」

よーし、伊鈴くんのため頑張りますよ!!

◆ 青野家

「お兄ちゃん。夜ご飯の后台所使っていい？」

「?別にいいけど・・・何に使うんだ？」

「・・・ええ・・・まあ、明日の準備、かな。」

明日の?明日って2月14日だよな・・・なんかあつたつけ?

「まあ、使ったらちちゃんと片しとけよ？」

「はーい!」

うん、いい返事。今日は課題多いしシャンフロできつかな・・・ま、とりあえず飯作るか。

◆ 隠岐家

「で、出来たーっ!!」

「ふふ、おめでとう。紅音。」

「うんっ!お母さんもありがとう!」

目の前には綺麗にラッピングされた小さめのチョコケーキ。ふふふ、伊鈴くんが甘すぎるものが得意じゃないのはリサーチ済みですから!ちやんと、ビターチョコレートを使ってます!

「にしても、紅音にも好きな人ができたのねー。嬉しいような寂しいような気分だわ
く。」

「え?お母さん、何か言った?」

「ふふ、何でもないわよく。ほらほら、明日も学校あるんだから早く寝なさい。」

「はーい!」

いよいよ明日はバレンタインです・・・!ちゃんと渡せるといいなあ・・・

◆ 紅音就寝後の隠岐家

「・・・いやあ、紅音に好きな人ができる日が来るなんてなあ・・・」

「ええ、ほんとにねえ……」

「小さい頃はよく倒れて……ようやく元気になったと思つたら……子供の成長は早いものだな……」

「ふふ、でも嬉しいんでしよう?」

「はは、君には叶わないな。」

「……嬉しいき、嬉しいに決まっている。昔から思っていたんだ。紅音に普通の女の子の幸せな生活を送らせてやることは出来ないんじゃないかって……でも、元氣になってくれた。友達も大勢できたそうだ。それに好きな人ができたって……!」

「ああ、本当に……良かつたなあ」

「ええ……本当に。」

そして乙女達の決戦が幕を上げる。

◆ 2月14日

「じゃあ、行ってきます!」

「行つてらっしゃい、気をつけてね。」

「うんっ!」

今日はいよいよバレンタインです!昨夜は緊張してなかなか寝れなかったけど、頑張ります!!

「放課後……よし、放課後に……」

「……あれ、紅音?今日は早いじゃん。どしたの?」

「ひゃあああああ!!?」

「うえっ!?何!?どしたの!?!」

い、伊鈴くん!?何で!?

「え、えと伊鈴くん。何でここに?」

「え、何でつてここ通学路だし……紅音こそ普段もうちよい来るの遅いじゃん。どしたの?」

「え、あー……えつと……」

あわわわわ……ど、どうしましょう!放課後に一緒に帰りながら告白する計画が既に崩壊の危機を見せてます!

「きよ、今日はちよつといつもより早く目が覚めたので!!」

「ふーん?まあ、いいけど……せつかくだから一緒に学校行くか?なんも「えつ、良

「いんですか!」 あつ、ハイ。」

えへへ、朝から伊鈴くんと一緒に学校に行けるなんて今日はいい日です!

「あつ、そうだ・・・伊鈴くん!」

「んー、何ー?」

「今日一緒に帰りませんか!」

「・・・まあ、良いけど。何か今日の紅音はアレだね。いつもよりテンション高い気がする。なんかいいことでもあつた?」

「伊鈴くんと一緒に学校に行けるからですよ!」

「んん、っ・・・そつ、そつかあ。」

「はいっ!」

よし、ちゃんと約束出来ました!あとは帰り道でチョコを渡して・・・好きだつて伝えます!

◆ 放課後——紅音 s i d e

正直、今日の授業の内容はほとんど頭に入ってきてませんでした。でもいよいよです！
いよいよ伊鈴くんに……！！

「ごめん、紅音。待たせた！」

「あ、伊鈴くん！大丈夫ですよ！（心の準備に）ちょうど良かったので！」

「？ま、いいか。帰ろ？」

「はいっ！」

しばらく無言で歩きます。伊鈴くんはあんまり自分から話しかけないタイプの人なのでしょうがないですけど。そ、そろそろいいでしょうか……？他の生徒の人も居なくなりました……

「あの、伊鈴くんっ！」

「ねえ、紅音。」

あ……

「あー、紅音先いいぞ。」

「いえいえ、伊鈴くん、どうぞ！」

「いや……ってこれ終わんねえか……つとき。紅音何か今日変じゃない？どこか心ここに在らずみたいなの……朝も悲鳴あげてたし、どこか体調でも悪いんじゃない……？」

うっ．．．伊鈴くんに心配かけちゃったみたいです．．．

「ぜつ、全然大丈夫ですよ！ほら、とつても元気です！」

恥ずかしさを誤魔化すためにわざとオーバーに腕を振り回して元気をアピールします。

「そう？ならいいんだけど．．．そういや紅音の言いかけてたことって？」

「あ、えつと．．．」

ちよつとこの流れで言うのは恥ずかしいです!!ぎ、さつき言えばよかった．．．!ええい、女は度胸です!

!

「あ、あの伊鈴くん!こ、これ受け取ってください!!」

カバンから取り出したチョコケーキを伊鈴くんに差し出します。受け取ってくれるかな．．．?

「．．．?いいけど．．．」

や、やった!!受け取ってくれまし

「どしたの?急に。今日なんかあったっけ？」

え．．．ええ!?ひよ、ひよつとして伊鈴くん．．．!バレンタイン知らないんですかあ!!?

「えーっと、あの伊鈴くん。今日がなんの日だか知ってます?」

「今日? 2月14日だよねえ・・・俺の誕生日は8月だし・・・夢花も5月だし・・・
紅音は3月だよね?」

「あつ、はいっ! っつてそうじゃないですよ!」

私の誕生日を覚えててくれたのは嬉しいですけど違います!! 本当に知らないんで
しょうか・・・?

「ええー・・・あつ! そういや今日アレか! そういやスーパーで出てたな!」
「そう、そうですよ!」

「煮干しの日!」

「バレンタインデー!」

.....

「え?」

え? 煮干し? 何ですか! え、実は今日バレンタインデーじゃなかった
りします!?! 私の勘違い!!?

「ねえ、紅音。」

「は、はいっ! 何ですか?」

「そのさあ．．．あのー、非常に申し訳ないんですけど．．．．．バレンタインデーって具体的にどんなイベントなの？チョコレートが安売りになるイベント？」

「．．．ほんとに知らなかったみたいです。バレンタインデー知らない人っているんですね．．．．．だいぶ驚きました！」

「えっと、バレンタインデーは．．．．．あつ。」

「？紅音？」

「これ．．．バレンタインデーの説明をするってことは伊鈴くんが私が渡したチョコの意味を知ること、それってすごく遠回しな告白．．．．．ダメです!!私はおつとちゃんと伊鈴くんに私の好きを伝えたいんです!!うう、でもどうしましょう．．．」

「あー、説明しにくいなら別にいいよ?帰って調べるし。」

「あつ、待つてくださいい!えっと、バレンタインデーっていうのは．．．その、女の子が好きな人にチョコを渡す日です．．．」

「ふーん、好きな人にチョコをあげる?そんな日があつたんだ．．．」

「あ、あれ?気づいてないんでしょうか？」

「．．．．．ふえ!?あ、そ、そうなんだ．．．ふうん．．．．．」

「これ、気づいてますね．．．．．あー、もう!こうなったら当たって砕けろです!!」

「えいつ!!」

「わっ!……っど!どしたの? 紅音?」

「私は……私は! 伊鈴くんのが好きです! 大好きです!! いつも優しくても負けず嫌いで、色んなことに一生懸命な伊鈴くんが大好きです!! 私と付き合ってください!!」

◆ 放課後——伊鈴 side

今日の放課後は紅音と帰る約束があったのに、先生に呼び出されて遅れてしまった。チツ、資料の運搬くらい誰でもいいだが……

「ごめん、紅音。待たせた!」

「あ、伊鈴くん! 大丈夫ですよ! ちょうど良かったので!」
 ちょうど良かった……? 何が?

「?ま、いいか。帰ろ?」

「はいっ!」

わーい、会話が全然ねえ。いや、普段なら紅音の方から何かしら話しかけてくれるから会話には困らないんだよな……やっぱなんか変だな。今日も一日中上の空だっ

たし。

「ねえ、紅音。」

「あの、伊鈴くんっ!」

「……こういうのいちばん嫌いな奴ですわー。話しかけようとしたら被るやつ。」

「あー、紅音先いいぞ。」

「いえいえ、伊鈴くん、どうぞー!」

「いや……つてこれ終わんねえか……つとき。紅音何か今日変じゃない?どこか心

ここに在らずみたいな……朝も悲鳴あげてたし、どこか体調でも悪いんじゃない?」

「ぜつ、全然大丈夫ですよ!ほら、とつても元氣です!」

いや、嘘だろ。それ大丈夫じゃない奴がやるやつだし。んー、でも本人が言ってるんな

ら俺から言うことは無いよなあ……

「そう?ならいいんだけど……そういや紅音の言いかけてたことつて?」

「あ、えつと……」

「あ、あの伊鈴くん!こ、これ受け取ってください!!」

紅音がカバンから取り出した何かをこちらに渡してくる。……?何だ、これ。お土

産?いや、それにしても手作り感があるし……

「……?いいけど……」

「どしたの？急に。今日なんかあったっけ？」

ま、こういう時は聞くに限るよな。マジでわからんし。

「えーっと、あの伊鈴くん。今日がなんの日だか知ってます？」

今日ー？

「今日？2月14日だよねえ・俺の誕生日は8月だし・夢花も5月だし・紅音は

3月だよね？」

「あつ、はいっ！つてそうじゃないですよ！」

誕生日じゃない……？つてなるとあとは記念日系か？待て待て、記憶を

「ええー……あつ！そういや今日アレか！そういやスーパーで出てたな！」

「そう、そうですよ！」

「煮干しの日！」

「バレンタインデー！」

……

「え？」

え？バレンタイン？……聖バレンタイン？確かローマあたりで殉教したおっ

さんの記念日だっけ？でも、それでなんでチョコ？……そういやお菓子売り場

で最近チョコが安売りしてたな。

「ねえ、紅音。」

「は、はいっ！何ですか？」

「そのさあ．．．あのー、非常に申し訳ないんですけど．．．．．バレンタインデーって具体的にどんなイベントなの？チョコレートが安売りになるイベント？」

「えっと、バレンタインデーは．．．．．あつ。」

「？紅音？」

んー？何か説明しにくいのか？バレンタインにはそんなに深い意味が．．．！？」

「あー、説明しにくいなら別にいいよ？帰って調べるし。」

「あつ、待つてください！えっと、バレンタインデーっていうのは．．．その、女の子が好きな人にチョコを渡す日です．．．」

好きな人にチョコ！へえー。知らなかった。あれ、じゃあ夢花が昨日台所使つてたのは．．．．．いや、考えないようにしようにしよう．．．

「ふーん、好きな人にチョコをあげる？そんな日があつたんだ。」

．．．．．？何か不満そうな顔してんな．．．えーっと、待て待て？今日はバレンタインで？好きな人にチョコを渡す日でー？紅音がチョコを俺に．．．．．

「．．．．．ふえ！？あ、そ、そうなんだ．．．ふうん．．．．．」

んんんんんんんんんんんん?!!?!?え、え!?!それってそういうことなの!?!?うう、顔が熱い．．絶
対今真つ赤になつてゐる．．．

「えいつ!!」

「わっ!．．．つと!どしたの?紅音?」

正直、既にキャパシティオーバーしかけていた俺に紅音がさらなる爆弾を放り込んで
きた。．．．もうこの際抱きついて来ていることは気にしないようにする。女の
子特有の体の柔らかさとか、いい匂いとか、何か胸の辺りに当たる2つの塊とか．．．
気にしてないからあ!

「私は．．．私は!伊鈴くんのが好きです!大好きです!!いつも優しく、
でも負けず嫌いで、色んなことに一生懸命な伊鈴くんが大好きです!!私と付き合っ
てください!!」

Happy Birthday……??

3月25日……特に祝日という訳でもなくイベントがある訳でもない。が、俺にとつては非常に、ひつじよおーに大切な日なのだ。そんな日をあと数日後に控え、俺はリビングで水揚げされた魚のごとく悶えていた。

(女の子宛の誕生日プレゼントって何買えばいいの?!?)

分かんねえよ!そもそも今まで誕生日プレゼントあげた異性って母親と妹だけだぞ!?!母親は妹と一緒に選んだし妹のは本人と一緒に選んだし……とはいえ今回はその手法は使えない。いくら男女関係に疎い俺でも流石に分かる。彼女のプレゼントを買うのに本人と一緒に選ぶのは……流石にまだ俺はその領域には至ってない。

「……………あー……………」

どうする?どうしよう。今どきの女の子って何貰うと嬉しいの?リアルマネー?いや、まさかな。

「あー、宿題多いっ!……………お兄ちゃん、何してんの?」

「あー、ちよつとな。お兄ちゃんにも色々あるの」

「ふーん?ちよつと待って、当てるから……………んー、彼女へのプレゼントで悩

んでるって感じかな？」

「何故バレた!?俺ってばそんなにダダ漏れなんか。紅音にもバレバレだったのか……?」

「んふふ、全くお兄ちゃんはしようがないですなあ。この超絶可愛い妹様がプレゼント選び手伝ってあげてもいいよお？」

「……確かにそれも考えたんだが、妹に彼女のプレゼント選んでもらうってどうなの?彼氏としてだけでなく兄としても色々ダメな気が……」

「む、なんか色々考えてるけどムダだよ!じゃあ聞くけどお兄ちゃん何かプレゼント候補考えてる?」

「ふふふ、妹よ。兄をあまり舐めるものには無い。無論考えてあるとも。」

「そうだな。紅音はワンタン麺が好きらしいから通販でいいとこのワンタン麺を……」

「はい、バカ!大バカだよ!!」

「何で!?!」

「解せぬ!」

「いや、確かに紅音さんならそれでも喜びそうな気はするけどさあ……女の子としてはですよ?好きな男の子から始めてもらおうプレゼントっていうのは特別なものなんだよ。それをワンタン麺って……はあ」

やめろ、その『ビー玉を宝石と勘違いしてる子供を見るような目』で俺を見るな。悲しくなってくるから………

「いい？別に高価なものじゃなくていいんだよ。贈り物は心だつて言うけどホントにその通りだからね。お兄ちゃんだつてそこら辺を歩いているおじさんから貰ったチロルチョコと私から貰ったチロルチョコだったら私からの方が嬉しいでしょ？」

いや、それ以前にそこら辺を歩いているおっさんから貰ったチロルチョコなんざ怪しくて食えるか！

「……まあ、そうだけど」

「それに中学生であまり高価なものを貰っても遠慮しちゃうしね。紅音さんの性格を考えるにあまりゴテゴテしたものは好まないだろうし……ちよつとしたアクセとかかなあ」

アクセサリーねえ……ああ、そういえば

「この前商店街に買い物行った時紅音に似合いそうなヘアピンあったな……」
「えっ、いいじゃんお兄ちゃん！そういうのだよ、そういうの！ほら、そうと決まったら行くよ!!」

「え？今から買いに行くの？マジで？」

「あつたりまえでしょ？売り切れちゃったらどうするのよ」

確かにー。じゃあ行くかあ。

「んー、でもお兄ちゃんとお出かけするのも久しぶりですなあ」

「そうかあ？この前の週末も一緒に買い物行っただろ」

「ちーがーうーよー！そういう事務的なやつじゃなくて遊びに行く的な意味の方!!全くもー……お兄ちゃんにはもう少し女心というものを学んでもらわないといけないなあ……」

「あー、そうだな。確かに俺が悪かったか。受験中はあんまり夢花に構ってやれなかったしこれからはもうちよい構ってやるよ」

ほーれ、うりうり。頭撫でちやる。

「うにゃー！やめろー、髪崩れるー！」

「くくく、悪い悪い。ま、行こうぜー」

「もう！これはスイーツ案件だよ！」

「へいへいつと……ああ、こんだこんだ」

そんなくだらない会話をしているうちに目的地に着く。

「ああ、ここかあ。なるほど、お兄ちゃんにしては珍しく良いチョイスだね！」

「珍しくは余計だ……そうそうこれだ。良かった、まだ残ってたか」

3日前買ひ物の帰りに何かプレゼントとしていいものは無いだろうかとキョロキョロしていた時に夕日の光を反射し俺の目に映り込んできた1つのヘアピン。紅く輝く小さな……宝石では無いが。綺麗な石をはめ込んだそれは何故か俺の目を強く引き付けたのだが……

「ふむふむー、なるほどなるほど……」

妹サマの審美眼には叶ったかね？

「いや、いいよ、お兄ちゃん！すっごくいい……ただ、紅音さんって陸上やつてるでしょ？こういうタイプのヘアピンとかだと部活中は使えないかもね」

ふーん、そういうものなのか……だったら

「んー、じゃあ普段使い用にもう1つ買うとかか？」

「そうだねー、それがいいかも」

結局その後色々見て周り、紅いヘアピンとシンプルな黒に赤い線が入ったヘアピンを買うことになった。ふふ、これなら紅音も喜んでくれるかな？

「いやー、いい買ひ物だったあー！」

「ほんとになあ。ありがとな、夢花」

「ふふふ、お兄ちゃんのためですから！という訳でえー、私気になってるスイーツがあるんだけど……」

「はいはい、付き合ってくれたお礼に奢ってやるよ、お嬢様？」

「あはは、私も半分くらいは出すよ。行こ行こー！」

別にいいのにな。こういう時くらいお兄ちゃんにカッコつけさせて欲しいものだ。

カランカラン♪

「いらつしやいませー！2名様ですか？」

「はい、そうです！」

「では、こちらの席にどうぞー」

「良かった、席空いてて。ほら、お兄ちゃん行こっ！」

「お、おう……」

「ん？どしたの、なんか変だよ？」

「いやいや、ここに完全に女子限定みたいな雰囲気じゃん……大丈夫？こんな空間に俺連れてきて。浮いてない？」

マジで見渡す限り女子しか居ない。制服姿であったり、私服であったり格好は様々だが……あ、あれうちの中学のジャージだな。そういや紅音も今日部活だつて言つてたな……

「なんの心配してんのさ……心配しなくても大丈夫だよ！ここに来ることを見越してお兄ちゃんの服選んだから」

「そうなん？じゃあまあ、いいか……」

「それよりそれよりい！じゃーん！季節限定デラックスパンケーキ!!どうどう？美味しそうでしょ！」

夢花が非常に楽しそうに見せてきたのは何と言うか……生クリームやら果物やらを盛りすぎてパンケーキ部分が見えなくなつてるパンケーキの写真だった。いや、美味しそうだよ？でもさあ……多くね？え、それ一人分？マジで？

「私は当然これ頼むけどお兄ちゃんはどうするの？同じの頼む？」

「あー、そうだな……じゃあこの宇治抹茶パンケーキにしよっかな」

流石にあれを食べ切れる気はしないからなー。どうせ分け合うことになるし。

「店員さん、注文お願いしますー！」

「はーい、ただいま！」

「注文お伺いします」

「あつ、じゃあ限定パンケーキと、宇治抹茶パンケーキをひとつずつ」

「限定パンケーキと宇治抹茶ですね。今当店では、カップル限定サービス期間中でして男女ペアでこられたお客様にはサービスドリンクをお付けしているのですがいかがでしょうか」

「サービスドリンク？お兄ちゃん、どうしたい？」

「いいんじゃないの？タダで貰えるんなら貰つとけ……まあ、カップルサービスを受けていいのかって疑問はあるが」

「うふふ、大丈夫ですよ。兄妹で来られる方も多いですし、親娘で来てる方もいましたから」

「あ、そうなんですな。じゃあお願いします」

「はーい、ごゆつくりー」

「♪~~~~♪~~~~」

「やけにご機嫌だな。そんなに食べたかったのか？」

「ん？……んー、それもそうだけど……やっぱ秘密！」

「え、逆に気になるんだけど」

「まあまあ、いいじゃん。それよりどんな風にプレゼント渡すの?」
「あー、そうだな……」

結局頼んだパンケーキが来るまで俺たちはそんな他愛もない会話を続けていた。何かは知らんが、ちよつと前まではあまり機嫌が良くなかった夢花も楽しそうだったし、たまにはこういうのもいいだろう。

そして数日が立ち……

Happy Birthday!

夢花と一緒に紅音のプレゼントを選びに行った数日後。ついに3月25日がやってきた。きちんと事前にアポもとってあるし、服装も夢花にアドバイスを貰いつつちゃんとしたのを選んだ。抜かりはないっ……!!

「……まだ待ち合わせには時間があるけどもう行つていいかな……いや、そんなに早く行つてもどうなんだ？」

うーむ、わからん。早く行つた方がいいよな？ 良い……のか？ いいか。行こう。

「じゃあ、夢花。行つてくるなー」

「あ、もう行くの？ 行つてらっしゃーい、頑張つてねー」

「おー、頑張つてくるわ。あ、後ありがとな。プレゼント一緒に選んでくれて。助かったわ」

「……ふふ、お兄ちゃんのためですから！ 頑張つてねー」

「ん、行つてくる」

待ち合わせ場所は近所の公園。いぎ、鎌倉ア!!

「………んー、流石に早すぎたか？」

時計を見れば待ち合わせ時間の30分前。やっぱこれ早すぎたか。まあ、幸い今日は気温もさして低くはないし適当に公園ブラついてるか……お、菜の花が咲いてる。もうすぐで桜も咲くかな。去年は行けなかったけど今年は夢花連れて花見に来るのもいいかもな……あ、見つけた。

「おーい、紅音ー」

「あ、伊鈴くん！すみません、待たせちゃいましたか？」

「あー、全然待つてない。割といまさつき来たところだから」

「そうですか！……あの、私伊鈴くんに一つ聞きたいことがあるんですけど！」

ん？聞きたいこと？何だろ、この言い方だと今日呼び出した理由じゃないだろうし……

「別にいいけど、聞きたいことって何？」

「そ、その……えと……」

んー？何か歯切れ悪いような。何か言いにくいようなことだろうか。こう言つてはなんだが、割と言いたいことはオブラートに包まずにズケズケと言う紅音がここまで躊躇うことつてなんだ………？

「あ、あの！私見ちやつたんです!!伊鈴くんが女の子と一緒にカフェでパンケーキを食べてるところ!!そ、それに店員さんがカップルって……!?!どういふことですか?!」
……あ、あぁー、そういうやつね。ってかそれって絶対この前夢花と一緒に رفتたやつだろ。マジでか。あの場にいたということですか。え？プレゼントのこ
と知られてないよね、大丈夫？

「………何も言わないつて言うことはそういうことなんですか?!」
ちよい待ち。違うから。

「えつとね、それは………」

「伊鈴くんのバカつ!!私は伊鈴くんと付き合うことになつてとつても嬉しかったのに、伊鈴くんは違うんですか!?!今日だつて私誕生日なんですよ!!それなのに何も言つてくれないし………!!」

目から大粒の涙を流しながら紅音が叫ぶ。ただ待つて欲しい。誤解だから。マジで。

「いや、だから」

「きつと伊鈴くんは私の事なんてどうでも良いつて思つてるからつ………!!」

「どうでも良い？ そんな訳あるか。強引に抱き寄せた紅音を抱きしめながら囁く。

「どうでも良いとか、そんなわけないだろ。紅音は俺にとつて何者にも代えられないくらい大切な存在だ」

「不安にさせたなら謝るよ。ごめん。卒業式以来ほとんど会えてないし……でも、忘れてなんかないさ。ほら」

紅音を離し、用意しておいたプレゼントを渡す。

「改めて、紅音誕生日おめでとう。……大好きだよ」

「……え、あ……ありがとうございまして……」

「それに、紅音が見たつていう女の子は妹だよ。誕生日プレゼント一緒に選んでもらつてな、それのお礼にカフェに付き合っただけ。紅音が心配してるようなことはないよ」

「え、い、妹さん？ ほ、ホントですか？」

「ホントホント。何なら電話かけるか？ 普通に今家いるし」

「だ、大丈夫でしゅ……」

なんかさつきからどんだん紅音の顔が赤くなってるし、涙目になってるんだけど。あれ？ 何か選択肢ミスってる？

「そう？ ならいいけど。……あのね、紅音。何回でも言うけど、俺は紅音のこ

とが大好きだし、ずっと一緒にいたい。もちろん紅音の気持ち冷めたら身を引くけど、それまでは絶対に浮気なんてしないよ」

「……ごめんなさい!!伊鈴くんは私の事ちゃんと考えてたのに早とちりしちゃって!」

「いーって、いーって。彼氏が知らない女と街歩いてたらそりやあ不安にもなるでしょ。それよりほら、プレゼント開けてみて?」

「はいっ!えーつと……あ、ヘアピンですか!……どうでしょう、似合ってますか?」

「はー、可愛い!!すごく、可愛い!!!」

「その、とっても似合ってる、と思います、うん」

「語彙力う!帰ってこい、俺の語彙力!!」

「えへへ、良かった……あ、もう一本あるんですね!」

「え、あ、ああ。ほら、紅音陸上部だし、一個目みたいなやつはあんまり良くないかなって」

「ありがとうございます!大事にしますね!!」

「あー、良かった。喜んでもらえるかとか引かれないかとか色々考えてたけど、もうこの笑顔見ただけで十分ですわ。」

「あの、伊鈴くん！せっかくですからちよつとおしやべりしながら歩きませんか？・・・その、まだ1回もデートしてませんし・・・」

デートしないかだつて？そんなの決まりきつてゐるわ。

「もちろんいいよ。行くこつ？」

「はいっ!!」

甘々高校編

そういう星の元に生まれたんだらうね

悠央高校。この辺の高校の中じゃトップクラスに頭のいい学校。自由な校風や公立校ながら綺麗な校舎と充実した設備が特長であり、また制服のセンスが非常に良いことでも知られている。何が言いたいかって？

「えへへ、伊鈴くん！高校楽しみですね!!」

紅音マジ可愛い、という事だ。中学の頃も良かった。それは認めよう。シンプルなデザインワイシャツはスポーティな紅音の雰囲気によく似合っていたと言えるだろう。だが、今朝待ち合わせ場所に現れた紅音を見て俺は自分の性癖と言うものを初めて理解した。いや、ひよっとしたらそれは好きな人が着ているから脳内で補正がかかっていたのかもしれないが。そうだとっても若干の照れを含ませつつ上目遣いで制服の感想を聞いてくる……ブレザーを身にまとった紅音は最高に可愛かったです!!（この間僅か0.1秒）

「そうだなー、何か高校ってだけでちよっとしたワクワク感があるよな」

ただ何よりも、好きな人と一緒に過ごせる生活が楽しみなだけだな。中学の頃は酷

かったからな……高校は平穩な生活を送りたい。

「それもそうなんですけど……やっぱり伊鈴くんと一緒に居られるっていうのが一番嬉しいです！」

「んん、っ……そ、そうね。うん」

同じこと考えてるっていう気恥ずかしさと嬉しさが同時に襲ってくる。中学以前の俺からしたらまさかこんな事でこんなふうになってるなんて到底信じられないだろうけど……悪くない気分だな。

「伊鈴くんは部活とかって決めましたか？」

「あー、部活かー。紅音は当然陸上部だよねえ」

「はいっ！伊鈴くんもどうですか？確か足そこそこ速かったですよね？」

「んー、悪くないけど……高校の部活ってそんな初心者OKだったりする？」

「部活がすごく活発な所とかは初心者はあまり受け入れてないっていうのもあるらしいですけど、悠央は大丈夫だと思いますよ？」

まあ、無理強いはいしないでですけど。そう言っただけで軽く微笑む紅音……何か凄い大人に見える。でも陸上か……ゲーム時間は減るけどやってもいいかな。

「うん。最終的にどうなるかは分かんないけどとりあえず仮入部はしてみようかな？」

「ホントですか!? やったあ!!」

ぴよこんぴよこんと跳ね全身で喜びを表現する紅音。溢れ出る小動物感。やっぱりこういう所はまだまだ子供っていうか紅音らしいな。

「………あ」

「?どしたの、急に止めて」

「も、もう高校生ですから! こういうのは卒業です! ……それに少しでも伊鈴くんと似合う女の子になりたいですし………」

んえ? 最後なんか言った?

「そなの? まあ、紅音がそうしたいならいいけど……俺はああいう紅音のことも大好きだよ?」

ふふふ、俺も成長しているんだよ! 2人きりの時くらいはこれくらいは照れ無く言える!! いや、言いすぎた。ちよつと照れくらいで言える。

「ふえつ………そ、そうですか」

ちよつと変な空気になつちやつた。慣れないことはするもんじやないということだろうか。ちくしょう。

「あ、見えてきましたよ！」

「お、ホントだ。やー、何回か来たことがあるとはいえやっぱり立派だなあ」
うお、すげえ。謎の銅像がある。入試で来た時は気づかなかつたな。

「伊鈴くん、写真撮りましょう！写真!!」

「はいはい、撮ってやるから。ほら、もうちよいズレないと邪魔になつてるぞー」

「えっ、あー！すいません!!」

いいよいいよと軽く手を振ってくれる初老のおばあさん。良かった、大事にならなくて。

「んじやまさつさと撮って行くか」

「はいっ！」

・・・ん、撮れたな。ちよつと気恥ずかしいけど。

「あとはあつちでクラス貼りだされてるみたいだなー」

「一緒のクラスだといいですね！」

「どうだろうか。悠央はランダムではなく入試の成績でクラスが決められる。もちろんしっかりと紅音に勉強を仕込みはしたが……果たしてどうなっているか。」

「んー……人が多くて見えないです……」

「びよこびよこ跳ねる紅音。いや、可愛いかな……ん、それはともかくどうするか。俺も紅音と身長ほとんど変わらんしな……」

「んー、じゃあまあ見てくるからここで待つてよ」

「そうですね！お願いします！」

「はいはい」と……」

「はー、こんな所で身長が小さいのが有利になるとは。人混みが一切干渉してこない。でもやっぱりもうちよい欲しいなー。」

「んーつと……」

「ああ、あつたあつた。Aクラスね。あとは紅音だけ……：隠岐、隠岐つと……」

「あつたわ。同じクラスだ……ん、やっぱり嬉しいな。こういう小さいところで自分がどれだけ紅音の事を思っているのかを実感出来る。んじやま、さつさと伝えに行くか。」

「おーい、紅……音……？」

「あの、やめてください!」

「いやいやいや、良いじゃないか! ね? 君も僕みたいな優秀な人間と付き合えるのは幸せだらう?」

何だあいつ。なんかすごいムカつく。いや、紅音に言いよつて言うのもあるんだけど……何てーの? すつごい甘やかされて育つた世間知らずのお坊ちゃんという概念を擬人化したみたいなの……いや、とにかくムカつくわ。

「あー、紅音どうした?」

「あ! 伊鈴くん!」

俺が声をかけるがいなやこちらに走りよつてきて俺の背中に隠れる。……すごいな、ここまでしよたいめんのやつを拒絶してる紅音始めて見たぞ。

「おお、どうしたんだい、紅音! ほら、そんな所に居ないで僕の胸に飛び込んでおいで!!」

うわあ……

「ハイハイ、紅音さん? 誰あの痛々しい男。知り合い?」

「違います! 伊鈴くんを待つてたら急に声をかけてきて……その、すつごく困つてます!」

ほーん。なるほどなるほど。要するにあの男は人の彼女にナンパ仕掛けたと。しか

もこんな公衆の面前で。

「あの一、あなたどちら様で？」

「何だ君は！私のことを知らないのかい!!」「あ一、そつすn」よし、それなら教えてあげよう!!」

ちよいちよいちよい、待てや。

「僕は長谷川グループの御曹司、長谷川忠彦さ!!君みたいな田舎者でも長谷川グループの名前くらいは知ってるだろう?さあ、分かったら大人しく紅音を渡してもらおうか!!」

書いてる時に吐いた砂糖だけでジャムが作れる

やべえ。俺の今までの人生経験じゃあこういう手合いに遭遇した時なんて答えればいいのかわからん。そりゃあ、何で紅音を名前呼びしてんだぶつ潰すぞ。とか長谷川グループって別にそこまで大きい会社って訳じゃなくね？とか田舎者ってお前もこちらに住んでんだろうが。とか思うことはいっぱいあるよ？でもなあ．．．．あまりにもテンプレすぎるっ．．．．!!

「あの、伊鈴くん？どうしたんですか、固まっちゃって」

「あ、ああ。ごめんごめん。えーっと、で結局なんの用なんですか。鯨はげが綿抱がわたっこさ
ん。」

「誰だよそれ！僕の名前は長谷川忠彦!!全く！これだから愚者は困るんだ．．．．まあいいよ！何の用かだつて？簡単な話だよ。君は紅音と仲がいいんだろう？君からも紅音は僕と付き合うのが相応しいって言ってあげてくれないかな。さつき声をかけたら断られちゃってさ。まあ、照れ隠しなんだろうけど！」

あー、うん。何かお笑い見てる気分になつてくるな。いや、ムカつくかそうでないか
で言ったら当然ムカつくんだが．．．．何だろうな。見てて笑えてくる。ここまで

人生樂觀視してても人って生きていられるんだなって。いや、しょうがない。彼の望みを叶えてあげよう！

「何言つてんだ、お前と紅音が釣り合うわけないだろ？鏡と性格診断見てから来いよ」
え、望みを叶える？何言つてんだ。そんなわけないだろ。

「・・・・・・・・・・は・・・・・・・・・・な?」

「い、いきなりなんなんだ君は!!紅音の友人らしいから下手に出てやったのに!もういい!!君なんか言うより紅音に直接言う方がよっぽどいい!!紅音!!僕と結婚を前提に付き合ってくれ!!!」

いや、させねえよ?そう思い口を開こうとした瞬間

「いい加減にしてください!私は伊鈴くんと付き合ってるんです!貴方みたいな人の都合も考えないような人とはお友達にもなりたくないです!!」

思いつきり俺に抱きつきながら紅音がバツサリと長谷川何某の告白を切り捨てた。・・・・・・・・卒業式の時から思つてたけど割と紅音って付き合ってることを隠そうとしないよね・・・・・・・・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・?!?!?」

ははは、陸に打ち上げられた魚みたいに口パクパクさせてら。きつと今までこんな経験なかったんだろうなあ・・・・・・・・・・

「そ、そうか!! そのお前が紅音を洗脳しているんだな!? そうに違いない!!」

「だって僕は勉強もできる! 運動もできる!! 顔もいい!! 何よりお金持ち!!! こんな素晴らしい選ばれた存在である僕に靡かない女の子がいるはずないんだから!!」

「ああ、可哀想な紅音! きつとその卑劣で意地汚い男に無理やり従わされてるんだ! 大丈夫!! 僕が君を救ってあげるよ!! 僕と一緒にいれば君は何もしなくていい! ぜーんぶ周りの人がやってくれるんだ!! 頑張るなんて非生産的なことやる必要は無くなるんだ!!! さあ、僕の元へおいで!!!」

きつつう……最早哀れにさえ感じるな。ほら、周りの人の目も面白いものを見る目から可哀想な目を見るものに変わってるもん……ただうちの可愛い自慢の彼女サマはそうは思わなかったらしい。無言でプルプル震えてる……あ、これヤバイやつだ。

「ふっ……ざけるのも大概に「はい、紅音ステイ」……!!!」

「何で止めるんですか、伊鈴くん!!」

「落ち着けて。あんなやつ相手に怒ったって体力無駄に消費するだけだよ。後で自分に愚痴は聞いてやるから」

まあ、紅音に対して頑張らなくていいなんて禁句もいとこだからな……とんでもない迄の地雷の踏み抜き方したもんだ。

「だって！あの人伊鈴くんのこと卑劣で意地汚いって！伊鈴くんがとっても優しく、色んなことができて、私のことをすっごく大切に思ってくれていることも知らないのに！！」

んん、っ…………え、待って、そういうことなの？

「伊鈴くんが私のことを思ってた止めてくれるのは嬉しいです！でも私嫌です！！好きな人のことを悪く言われてそのまま引き下がるなんて出来ません！！」

あの、ちよ、まって

「伊鈴くんは優しすぎるんです…………私のことを優先してくれるのは嬉しいけど、それでももつと自分を大切にしてください！」

ギューっと俺の体を腕を回し頭をグリグリと押し付けてくる紅音。いや、かわいいけどまって…………

「それに…………」

「あかねさん、あかねさん、まわり、まわりみて」

「え？…………あ…………あ…………」

そう、ここは学校の昇降口であり今日は入学式。当然新生だけでなく在校生や教師の目も……………って教師い！いたなら止めるや！！あー、もう無理。目の前でみるみるうちに紅音の顔が真っ赤に染まっていくのが見えるけど茶化す気力もない。絶対俺

の顔も同じかそれ以上に赤いだろうし……

「くく、もういいかな？お二人さん」

「んえ？……どちら様で？」

「ああ、私は悠央高校生徒会会長、進藤玲奈だ。いや、新入生代表を迎えに来たんだが……まさかこんな熱々のラブストーリーが見られるとはね。朝からいいものを見させてもらったよ」

んぐう……やめて！追い討ちは良くない!!

「あはは……あ、じゃあ私たちはこの辺で……ほら、紅音行くよ」

「いやいや、何言ってるんだ。青野伊鈴って君だろう？」

「え？そうですけど、それが何か？」

「さっき言ったろう？新入生代表を迎えに来たって。君のことだよ、青野伊鈴くん。入試成績1位の生徒は新入生代表挨拶を入学式です。事前配布資料にちゃんとして書いてあったはずだよ？」

確かに書いてはあった。が、どうせ関係ないと思って読み飛ばしていた……うっそでしょ!?!マジで!?!やだよ、絶対!

「そんな顔をしているとこ悪いけど拒否権はないんだ。いや、しかし驚いたよ。まさか歴代最高得点……全教科満点を達成する人が現れるなんてねえ……と

いうわけで彼女ちゃん！君の彼氏くんは借りてくよ。存分に彼の勇姿を見届けてやっ
てくれ！」

ちくしょう、落ちる訳には行かないと思って頑張りすぎた！！

純然たる嘯ませ犬

あー、もうヤダ。入学式早々帰りたい。平穩な日常を送りたいと進学した高校、悠央高校。まさか入学式当日からあんな辱めを受けるとは思わなかった。公衆の面前でイヤつき、そのままの流れで全生徒の前で新入生挨拶。1度もとちらずに言えた俺を誰か褒めて欲しい。

「くくく、随分な名演説だったじゃないか。どうだい？生徒会に興味あったりしないかな？」

「あー？生徒会っすか。俺は陸上部入るんで無理です」

「我が校は生徒会と他部活の兼部も可能だぜっ……とそろそろ君も教室に行きたまえ。クラスで自己紹介やら説明やらがある頃だからね」

行きたくねえなあ……もう俺自己紹介必要ないでしょ。

ガラツと教室の扉を開け入った瞬間、教室中の視線がこちらに飛んでくるのがわか

る。ようし、落ち着け。俺の足。まだUターンをするには早すぎる。何事も無かったように席に座るんだ。えーつと、俺の席は……

「あつ、伊鈴くん！こつちですよ!!」

やーめーてー。俺にトドメを刺すんじゃないよ。つーかまた隣か。出席順的に普通に有り得るとはいえ……やはりリアルラックカンスト勢。とんでもねえな。

「ん、ありがと。ま、改めてこれからもよろしくね紅音」

「はいっ！よろしくお願ひしますね、伊鈴くん！」

ところで周りから飛んでくるこの事情聞きたいって言う好奇の視線は無視でいいっすかね。え、ダメ？うるせーっ！俺は無視するぞ！

「はーい、皆席ついてるー？今年一年君たちの担任を受け持つ白上優花です。よろしくねー」

よ、ようやく来てくれた……もう周りの視線が痛いよ、ほんと。紅音は特に気にしてるように見えなかったけど……メンタルどうなってんだ、こいつ。俺はまだその領域には辿り着けなかったよ……

「んー、じゃあとりあえず自己紹介してもらおうかなー言うことは何でもいいよ？

じゃあ出席番号一番の人……えーつと青野伊鈴……あつ

おいこら、何だその「あつ」て。

「ゴホン！うん、じゃあ青野くんよろしくっ！」

丸投げやめろや！うう、逃げられない。気分は四方を囲まれたメタルス○イム……もはや俺に残された道は勇者たちの経験値情願になるのみ……

「えつと、青野伊鈴です。第2中から来ました。趣味はゲームしたりランニングしたりすることです。あ、あと一応新入生代表らしいです。つても特に気負わず話しかけてくれると嬉しいです。」

あー、自己紹介とか嫌いだわ！何言ってるかわかんねえもん！

「はい、ありがとうございしましたー。じゃあ何か聞きたいことある人ー」

おい、やめろその質問は。絶対酷いことに……

「ちよつと待てよー！何で僕じゃなくてお前が新入生代表なんだよ！僕は選ばれた存在なんだぞ!!」

お前かよ!!呼んでねーんだわ!っかこのクラスだったの?嘘でしょ?

「はいはい、長谷川くん、ストップ。あんまり言いたくないけど君、このクラスの中でもほぼ最下位だから頑張らないと来年このクラスにいれないよー?」

「んなつ……!」

「はい、他にある人」

お、あのバカが空気読まなかったおかげで何となく上げにくい雰囲気になってる。ナスだバカ。良くやったぞ、名前は忘れたけど。

「無いかなー？じゃあ次の人……えーつと隠岐紅音さん、よろしくねー」

「はいっ！」

入れ替わりで紅音に教壇を譲る。……あれ、何かクラス内の雰囲気が変わったような……まさか俺の時に質問出さなかったのは紅音の方が答えてくれそうだと思ったから……？いやいや、まさか。

「隠岐紅音です！伊鈴くんと同じ第2中から来ました！好きなことは走ることです！高校では陸上部に入ろうと思っています！仲良くしてください！！」

あー、溢れ出るいい子感。俺には出来ないタイプの自己紹介だあ。

「はい、じゃあいつも「はいっ!!」渡辺さん、どうぞー」

何だ今の。あげた瞬間が全然分かんなかったぞ。こっわ……

「青野くんのことを伊鈴くんって呼んでるけど2人はどういう関係なんですか!？」

「あ、えつと……」

チラチラと紅音がこちらを見てくる。さすがに俺の許可を取った方がいいと思っただろうか。正直今更なんだよなあ……いいよー、言っても。そんな意

を込め軽く頷く。

「えっと、私と伊鈴くんは、その……お付き合いをさせて頂いてます!」

「きやあああああ!!!」

ちよつと顔を赤らめつつ勢いよく言い切った紅音に対しクラス中の女子が黄色い悲鳴を上げる。分かる、分かるぞ! お前たち! 普段あんまり女子を意識させない紅音が急にそういうことをするとギャップで死ぬ。そういうことだろう。……あ、お坊ちやま(笑)がプルプル震えてる。……煽りてえなあ。凄いいい反応しそう。

「はいはいっ! どつちから告白したんですか!」

……そういや俺たちってどつちから告白したことになるんだ? 秋津茜&葵の頃を含めるなら俺からだけど……いや、でもリアルでも結局俺の方からか? ……あー、いいいいいよ答えて。

「最初は私の方から告白したんですけど……俺に言わせて欲しいって……えへへえ……」

あああ、可愛いー! その思い出し笑いは可愛すぎるっ!! ……あれ、今度は悲鳴が上がんないのな……あ、違えなこれ。全員心臓を撃ち抜かれてる。満足そうな顔してるからいいか。

「じゃ、じゃあじゃあ」

「はいはい、先生も気になるけどこれ以上やっていると時間足りなくなっちゃうからそれ以降は個人的にねー」

「えー！」

「あと1個だけ！お願いします!!」

「紅音ちゃん、いいですか!？」

「んー、じゃああと1個だけよ？隠岐さんもそれでいい?」

「はいっ！こういう雰囲気大好きなので大丈夫ですっ!!」

執念が凄い！まあ、いいけどね。ただ質問が完全に俺と紅音の関係なのはこういうことなの。他のことも聞けよ。

「じゃあ最後に……青野くんのどこが一番好きなの?」

「まてや！それは非常に俺が恥ずかしいことになる気しかない。」

「……伊鈴くんは色々な所はあるし全部が大好きですけど……やっぱ一番は優しいところですよ。ちよつと長くなっちゃうんですけど、私が伊鈴くんを好きになった切っ掛けも彼の優しさに救われたからなんです。なんて言うかアイデンティティを失いかけていた私を全肯定してくれて……絶対に見捨てないって言ってくれて……その時からずっと大好きです……えへへ、改めて言うとお照れちゃいますね!」

ああああああ!! 恥ずかしい!! 可愛い!! 恥ずかしい!! 可愛い!! あ、
すげえ。皆最早倒れるを通り越して泣いてるよ。男女問わず。何か後ろのやつがめっ
ちや泣きながらグツジョブしてくるんですけど。何やねん。

そのあとの自己紹介はもう酷かった。皆名前だけ言つてあとはいかに紅音が可愛い
か、どう応援していきたいかなどなど 自己を紹介しろ!! 担任! 止める!!
一緒になつて泣いてんな!!

「.」

? あ、あれじゃん。お坊ちやま(笑) じゃん。そつか、もうそこまで行つたのか。こ
いつ、この状況でどんな自己紹介するんだろう。逆に気になつてるんだけど。

「僕は長谷川忠彦 長谷川グループの御曹司で 優秀な人間 そう
だ、僕は選ばれた存在なんだ! そうだよ!!」

「おい、お前!」

何かこつち指さして来た。おいおい、長谷川グループの御曹司サマは人に指をさし
ちやいけないことも教わらなかつたのかなあ? 将来が不安だねえ!

「無視すんな! お前だよ、お前!! 紅音の彼氏面してイキつてる奴!」

ひよつとして、それは俺の事なのだろうか。彼氏面つていうか彼氏ですね。ははっ、

照れるなあ。

「はいはい、なーにー?」

「1万円上げるよ。だから紅音と別れる」

「は?何言つてんだ、ついに頭沸いたか?嫌だね、御曹司サマは。何でも金で解決できると思つてやがる。いいこと教えてやるよ。金じやあ欲望は満たせても心は満たせないんだよ、分かるうー?」

「おお、凄い。考えたことが口からそのまま出てくるのは久しぶりだな。しゃあないな、ムカついたし。無言で殴りかかつてないだけマシと思え。ここがシャンフロだったら今頃生きたまま解体ショーだわ。」

「はあ!?ふざけんな!!金があれば何でも解決するんだよ!部下も、女も!何でも俺の思いどおりだ!!だから、さあ!紅音!僕の元へおいで!!」

「なあ、おい。お前の耳は飾りなのか?それともお金が詰まつちやつてなんにも聞こえなくなつてるのかな?紅音、嫌だつて言つてたよな?悪いけど彼氏としてあんたに紅音は渡せねーよ」

「お前には言つてない!!紅音、僕とこいつどっちが大事なんだ!!」

それ、もう解決した問題じゃなかったの?思いつきし友達にもなりたくないって言われてたじゃん。やめろよ、繰り返すの。文字数稼ぎだと思われるだろ。

「……………さつきも言いましたよね。私貴方とは友達にもなりたくないです。もう話しかけてこないでください」

……………ここまで言う紅音とか始めて見たわ。今日は色んな紅音の姿が見れるなあ……………別に見なくてもいい姿だけど。

「んなっ……………何でそんなことを言うんだ！僕の方が君にふさわさ」

「お前しっつけーんだよ！」

「そうよそうよ！紅音ちゃんが迷惑がつてるでしょ!？」

「だいたい何であんなラブラブな二人を見てワンチャンあると思えるんだよ!!」

「「それな!!!」」

何でそれに同調すんの!?!止めてくれるのは有難いけども！

「な……………なんだよお前ら！僕は長谷川グループの御曹司だぞ!?!そんな僕になんて口を聞くんだ!!パパに頼めばお前らの親が勤めてる会社なんか直ぐに潰せるんだぞ!!?」

いやー、その脅しはAクラスここじゃあ効かないんじゃないかなあ……………

「やってみろよ、上等だオラア!!」

「父親の力にばっか頼って恥ずかしくないの!？」

「どうかそれは脅迫に当たるのですが?」

ほら、このとおり。悠央高校は入試成績、あるいは学期末試験の結果によってクラスが決められるが……それはBクラスまでの話。Aクラスは何と云うか勉強だけではない優秀な人材を育てることを主眼に置いているクラスだ。故にそこに入れるのはまあ、いいとこのご子息やお嬢様。あるいは余程好成績を残した生徒くらいのものである。……そう考えると紅音良くAクラスに入れたな。

「はいはい、皆さんそこまでえー。一旦落ち着きましようねえー?」

遅いわ! 今まで教室の後ろで座って状況を傍観していた担任……何だっけ白上先生? がようやくやく仲裁に入ってくる。まあ、いい加減泣きそうだったからなー、お坊ちやま(笑)が。頃合と言えば頃合か。

「皆が青野くんと隠岐さんのことを応援する気持ちもそれを邪魔しようとする人を許せない気持ちもわかるけどー、だからって皆して責め立てるのはどうかと思うわー?」
おお、まだ新人感のある先生なのにみんなを上手く沈めてる。Aクラスの担任になるだけはあるってことなのだろうか。

「で、長谷川くんは後で職員室に来ることー。ちゃんとお説教してあげるからねー?」

「……は、はあ!? 何で僕がそんな」

「長谷川くん……? あなたのせいで皆迷惑してるのよ? これ以上迷惑かけるの

なら……」

ん？何だ？何か一言二言耳元で囁いて……あ、お坊ちやま（笑）が凄い震えながら席に戻った。え、何言ったの、怖……

「はい、じゃあ次の人よろしくねー」

まだ続けんの!?

結局時間が足りなくなつて自己紹介は次の日に持ち越された。お坊ちやま（笑）は職員室に連行されたあと全然絡んでこなくなった。めでたしめでたし。

甘い話を書こうとすると書けない現象

「……にしても、急に降ってきたなー」

「今日は晴れの予報だったんですけどね……」

「一応聞くけど紅音傘持ってる？」

「すみません、持ってないです。伊鈴くんも……持ってないですよね」

「うん、ちなみに貸出傘も無くなってた」

高校生活にも慣れてきた6月中旬のある日の昼休み、俺と紅音は教室の窓の前に並んで急に大雨が降ってきた空を見上げていた。他にも何人かの男女が俺らと同じように空を見上げている。梅雨の時期は折り畳み傘の需要が高すぎて乾かすのが間に合わないんだよな……放課後までに止めばいいけど……

「ゼーんぜん止んでねえな……むしろ強くなってない？」

「何でも台風が近づいてきてるらしいですよ、部活もお休みだつて」

「なるほどねえ……」

台風とか本来もう少し夏に来るものじゃん……梅雨の時期に来るなよ、空気読め！

「でもどうしましょう。止むの待ってみますか？」

「うーん、台風が近づいてきてるんじゃないや止みそうにもないよなあ。そうなる就走つて帰るのが一番か……？」

「うっ……ですよね……はあ……」

この辺にビニール傘とか買えそうなどころないからなあ……走つて帰るのが一番いい気がする。ただ紅音がなあ……雨に濡れると露骨にテンション下がるんだよな。それで人に当たったりするつてわけじゃないけど……うーん、よし！

「とりあえず紅音これ被つとけ」

最近はまだ気温が低くて上着着てたのが幸いしたな。多少の撥水性もあるし家までくらいなら大丈夫だろう。

「え！でも悪いですよ！伊鈴くんが濡れちやいます！」

「いーって、いーって。こういう時くらいカツコつけさせろ」

というか俺の精神衛生上紅音には濡れずに家に到達して欲しい。濡れた紅音は色々ヤバいのだ。色々。

「……分かりました！お借りしますね！」

「よろしい、とりあえず俺の家のが近いから一旦そこ寄ろう。傘貸すよ、そこで」

「はいっ！じゃあ行きましよう！」

俺の家まで全力で走って約10分。果たしてこのバケツをひっくりかえしたような豪雨の中、紅音を濡らさずに帰れるのか……！

無理でした。いや、上着の撥水性は流石のものだった。普通の布のような素材なのに下手なレインコートよりも弾いていたんじゃないだろうか。ただ道中で出会った荒々しい運転のあの車！俺が大部分を被ったとはいえ少なくとも水が紅音にかかってしまった。そんなこんなで何とか辿り着いた俺の家の玄関で2人して座り込んでる訳だ

が……

「ん……………ふう……………」

雨の中、10分程度とはいえほぼ全力でダッシュしてきたため互いに息が上がっている。加えて全身を濡らした紅音は普段とは完全に異なる物憂げな雰囲気を感じており……正直に言おう。かなりクラッとくる雰囲気だし、見てはいけないと思っただけでも自然と視線が吸い寄せられてしまう。

「ん……………どうしたんですか、伊鈴くん。そんなに見てきて、何かついてますか?」

「へ!? え、あ、何でもありません、ハイ」

ヤバいやばい。女性は男が思ってるより男からの視線に敏感ってホントだったのか……

「……………ひよつとして、私に見蕩れてたんですか?」

え、っ……………

「……………なーんてウソだ……………ハイ」えっ……………」

「……………」

なんとも言えない沈黙が玄関を覆う。あー、やった。やってしまった。完全に引かれてますね、これは。いや、言い訳じゃないけど言わせてくれ。俺だって健全なる男子高校生なわけで? いくら将来的なことを考えてそういうことはしないようにしていると

はいえしたくないという訳ではなく？こんな状況になったら自然と見蕩れてしまうのはしょうがないと思います！（完全なる言い訳）

「……………えう……………あの、伊鈴くん。伊鈴くんはその……………こういう雰囲気の子が好きなんですか？」

え？……………あ、なんか分かった。えーつと……………

「えつと紅音。その、ね？見蕩れてたのは紅音だからであって、物憂げな雰囲気の子なら誰でもいいってわけじゃないし、普段は明るい紅音がたまにああいう雰囲気を出すっていうギャップがいいって言うか……………」

いきなり何口走ってんの!?違うじゃん!そこまで言う必要ないじゃん!!ただ俺が性癖を暴露するという恥を背負って放った言葉は紅音にクリーンヒットしたらしく、

「そ、そんなんですか!……………やっぱり男の子って……………」

何とか無罪を勝ち取れたっぽい。やっぱりあれだな、甘えを見せちゃダメだな。頼れる存在でないと紅音も安心しないだろう。うん。

「伊鈴くん、私そろそろお暇しますね。傘お借りします」

「あつ、うん!持ってたって持ってた。何なら送ってこうか?割と暗くなってきたるし」

「あ、大丈夫で……………いえ、お願いします!!」

「……………おっけー、行こうか」

「はいっ!」

送ってくつて言っても5分も無いだけだな。でも最近是不審者の目撃情報なんかも聞くし注意しすぎるに越したことはないだろ。

その後、特に何事もなく紅音の家に着いた。

「あ、ここまでで大丈夫ですよ。ありがとうございます!」

「どういたしまして。じゃあまた明日、学校で」

そう言つて振り返つたんだが

「あ……………」

後ろから紅音の名残惜しそうな声が聞こえ、再び振り返る。

「……………? 紅音? んむっ!」

どこかデジャブを感じる唇に当たる感触。驚き、見開いた目に入ってきたのはあの時とは違い、どこか不安に揺れているような表情で…………

「ん……………あの、今はこれくらいしか出来ないですけど……………これからも一緒に居てくれますか?」

唇から温もりが離れ、広がった視界に写り込む紅音の手は何か怯えるように震えていて……………ああ、そういう事か。最近クラスで急増しているカップル、普段ああいう

タイプの冗談を言わない紅音が聞いてきた見蕩れているのかと言う質問、普段紅音にあまり見蕩れることの無い（客観）俺が今日に限って紅音に見蕩れたという事実、そして今はこれくらいしか出来ないという言葉。……わかったけどこれ言うの？いや、まあ……言うけど。

「あー、紅音。別に俺はそういうことがしたいから紅音と付き合ってるんじゃないよ。確かにそういうカップルもいるだろうけど、俺はもつと紅音と一緒にいる時間を大切にしたいし……だから、その、絶対に俺は紅音を見捨てないから安心してよ」

どうやら俺の回答は花丸満点だったらしい。驚愕に見開かれた紅音の目は数瞬後には溢れんばかりの歓喜を浮かべ、そのまま飛びついてきた。

「わっ……とと」

「……………伊鈴くんっ……………」

言葉を並べるだけでは溢れんばかりの想いを伝え切れないとばかりに強く、強く抱きしめてくる紅音を抱き締め返しつつ思う。

（抱きとめる時に数歩下がったせいで背中にくちや水滴入ってくるなあ……）

……………こんなことでも考えてないともじやないが耐えられそうにない……

「……落ち着いた？」

「はいっ！すみません、いきなり抱きついちゃって」

「いーって、いーって。こういうスキンシップは大歓迎ですとも。……俺の方もごめんな、気づいてやれなくて」

「いえいえいえ！私が勝手に思ってただけなので！伊鈴くんが謝ることじゃー！」

「いやいやいや……って永遠に終わらんな、これ。まあじゃあこれからはー、そのー、互いに甘える頻度を上げるということで……」

何これ、めっちゃ恥ずかしい……

「はいっ！伊鈴くんもどんどん甘えてくれていいんですよ！前々から思ってたんですけど、伊鈴くんは全然甘えてくれませんか！頼り甲斐があるのはいいんですけど、私は彼女ですから！存分に甘えてください!!」

んん、っ……なんというか甘え方が分からないんですよ、紅音さん？

「ぜ、善処します……」

「楽しみにしてますよ？じゃあまた明日学校で！」

「うん、また明日。バイバイ」

結局次の日2人とも風邪ひいて学校休んだし、その次の日に学校行ったら紅音は女子たちに拉致されて行ったし、俺は男子に囲まれて怨嗟の視線とグツジョブサインを送られた。何やねん、マジで。

需要があるのか分からない年表もどき

0歳 青野伊鈴 生誕。

2歳 青野夢花 生誕。同時に母、青野楓は体調を崩し入院生活を余儀なくされる。

幼少期 父である青野春樹が男手ひとつで二人の子供を育てる。この頃は出張を一切していないかった。

幼稚園 伊鈴が1番明るかった頃と言っても過言ではない。生き生きとすごし、にこやかな日々を送った。

小学校低学年（1〜2年） 順当に澱んでいた時期。幼き子供というのは純粹が故に容赦なく言葉のナイフを突き刺すものなのだ。参観などに母親が来ないことで伊鈴はいじめられていた。この頃は泣き虫。

「ねえ、お父さん。何でお母さんは学校に来てくれないの・・・？」

「……………めんな、めんな……………」

的な会話があったとか無かったとか。

小学校中学年（3〜4年） 悟りの時期に入る。人とは表面上のことではしか物事を判断できない悲しい生き物である（要約）という考えに至り、常に学校では虚無の表情で

過ごすようになる。中学年は担任もなかなかのクズであったため基本的に親以外の人間は母の病院の人以外信用しなくなる。また、勉強、運動、家事を積極的にやりだしたのもこの頃。親のことは好きだがそれはそれとして、大体のことを自分でできるようにしようと思ったとは本人談。

小学校高学年（5〜6年） 悟り継続中。家は比較的裕福であるため私立中学に進むことも提案されたが、何となく公立中学を選んだ。ちなみにここで私立に進んでいた場合リアルが腐りきって引きこもりルートに入っていた。また、いじめも安定的に受け続けていた。と言っても、殴ったりけつたりはじめはバレやすいと思ったのか基本的には物を隠したり落書きをしたり壊したりが主流。また、クラス全員からの無視は当然のように行われていた。ちなみにこの頃から通知表はオール5。テストもほとんど満点である。当然のようにカンニングの疑いをかけられたが、そもそも他に満点がいなかったため何となく無かったことにされる。父はこの頃から出張が多くなっている。

中学1年生初期 様々なことが起こり、様々なことを思い、様々なことに失望した年。まず、入学祝いとしてVRゲーム機とシャーププロを親に買ってもらう。

「あー、そのなんだ…伊鈴には子供らしい遊びを全然させてやれなかったからな…まあ、気が向いたらやってみてくれよ。」

「……うん、ありがとう、父さん。」

的な会話が あったとかパート2。

とりあえず貫ったのだしやってみるかという軽いノリで始めたらどハマリした。今まで内々に抑えていた怒り、戦意、殺意など諸々の感情が初戦闘時に爆発し、今の性格に近づく。また、ゲーム内ではプレイヤーは本質的には平等であり、リアルな事情は反映されないという点もまた伊鈴の心をゲームに引き付ける一因となった。

く小話く

始めてパーティーを組み最初のボスである貪食の大蛇を倒した際ハイタッチを求められた葵。ハイタッチを今までしたことがなかったためすぐに反応することが出来なかったが、その時同じパーティーだった少年、カルテルに優しくハイタッチをしてもらい、ちよつと泣きそうになったのは誰にも話せない秘密。今でもカルテルとは連絡を取り合う仲。ちなみに後述のジョギングの最中、彼との電話を紅音が聞いていたため紅音は伊鈴がシャンフロを葵という名前で行っていることを知っている。ゲーム内で初めて会った時は気づいてないけど。

なお、リアルはだいたいぶお察し。地元の公立中学など小学校の頃とメンツがほぼ変わらないため、直接的ないじめは減ったが無視は続けられていた。なお、当時の伊鈴にとつてはどうでもいい事だがこの時が紅音との初めての出会い。というか、入学当初が出席順の席だったため普通に隣同士だった。紅音は当然小学校のことを知らないため、(原

作では一応高学年くらいで体は治っているのですが、整合性を取るのがめんどいので中学校から入っているということにします。)普通に話しかけてきている。このアウエー感の中話しかけてくる人がいることに驚きつつもちゃんと会話はしていたのだが、伊鈴はこの時会話したことを中三の終わりくらいまで後悔していた。

中一夏 大したイベントはないが、夏休み中に日課のランニングをしていた伊鈴が紅音と学校外で初めての出会いを果たす。

〈小話2〉

「……ふう、流石に8月にもなれば早朝でもそこそこ暑いな・・・」

「あれ?ひよつとして青野くんですか?」

(げっ……)

「……あー、隠岐さん、だっけ」

「はいっ!でもこんな所で奇遇ですね!何してたんですか?」

(この子、やたらグイグイ来るからちよつと苦手なんだよなあ……)

「まあ、ランニングを少々……」

「ランニングですか!!実は私もそうなんですよ!でも意外でした!青野くんってあんまり運動するような人に見えなかったの!」

(余計なお世話だよ……)

「あー、まあよく言われますねー……」

「……あつ、もうこんな時間！じゃあ私は行きますね！また会いましょう!!」

「ええ、そうですねー」

(……あんまり会いたくないなあ……)

的な。ちなみにこの後ほとんど毎日会ってます。ちなみにこの時点ですっかり隠岐紅音という個人を認識しています。というのも割とこの頃の伊鈴は人を人だと思つていません。ゲーム内では違いますけど、リアルでは他人に対して好きも嫌いもなんの感情も抱いていないのです。それなのに苦手、というややマイナスなイメージとはいえしつかりと個人に対して感情を向けていますからね。好きになる土壌は既にあつたということで。

中一秋 夏休み中のノリで紅音が伊鈴によく話しかけるようになる。また、なんの運命の因果かこの頃から、かなりの頻度で席が隣同士になる。その結果何が起こるか？隠岐紅音親衛隊による肅清が起こる。今まで伊鈴のクラスは伊鈴無視勢と興味無い勢と紅音の三択に別れていたが興味無い勢のほとんどが隠岐紅音親衛隊であつたためクラスの勢力図が塗り変わる。卒業式クレイジー女こと桐原恵美が出てきたのもこの頃。伊鈴の心情としては、(隠岐さんは別に害はないけどついてくる付属品が迷惑を通り越して害悪だからあんまり関わりたくないかも) みたいな感じ。

こつからだいぶ飛んで、中2秋。それまでは膠着状態が続く。考えてないとも言う。

中2秋。 皆さんご存知、シャンフロ内でジークヴルム討伐イベントが起こる。また、秋津茜と葵が出会ったのもこの時。ジークヴルム討伐直後はそこまで二人の関係は進展しなかったが、その後クエストのクリアなどのイベントにより秋津茜と葵の仲は進展していく。また秋津茜は、端々の挙動やたまに漏らす情報から葵と伊鈴であることをほぼほぼ確信し、リアルでもついついゲーム内のノリで話しかけてしまう。伊鈴からしたら(???)であるため微妙に温度差がある。

また、ただただ作者が書きたかっただけの入れ替わりイベントは葵側の秋津茜に対する認識が変わる重要なイベント(ということに今なった)。話の中でも触れられているようにそれまでは単なる後輩にしか思っていなかった秋津茜の事を異性である意識した瞬間である。それまで女とか集団で言葉のナイフを突き刺してくる集団としか見ていなかったため、秋津茜の事を恋愛的に意識してしまったことで初めて感じる感情にめっちゃワタワタしてた。

中2秋後半冬、二人の関係性が完全に変化するきっかけとなったイベントが起こる。作者の性癖を詰め込んだイベント、秋津茜のキャラ崩壊を指摘されてもこのイベントがあつたので！で、言い訳するためのイベントなどの異名を持つ葵告白イベント。グルメチキンパイセンはかませ。某デープなスローターさんの闇を参考にはしている。

「……えへへえ……うふふ……えへへ……」

抑えようとしてもついつい顔がにやけちやいます。私、自覚してなかったけど葵さんのこと大好きみたいです。こんなにも幸せな気分になったのは初めて走れた時以来です……！

「——はあああ——……」

……まずいです、気持ちが昂りすぎて寝れそうにないです。……ちよつと走つてこよかな？まだそんなに遅くないし……その辺りを走つてくるだけなら大丈夫でしょう。

「お母さん！ちよつとランニングに行つてくるね！」

「あら、お風呂入ったあとなのがいいの？……あら？紅音、何かいいことでもあったの？」

「え!?あ、えつと……」

ゲームの中で告白された、なんて言つていいんでしょうか……もし、お母さんに葵さんとの仲が認められなかったら……?今まで沢山迷惑をかけたのにまた迷惑をかけてしまふんじや……

「ああ、ごめんね紅音?そんな顔させる気はなかったのよ。あなたがまるで恋する女の子みたいな顔してたから気になつちやつて」

……お母さんになら言つても大丈夫でしょうか……また、思考の渦に陥りかけた私の

脳裏につきさつきかけて貰った言葉が蘇ります。……よし！

「あのね、お母さん……」

「なあに、紅音？」

「すー、はー……」

「今日、シャンフロで男の子に告白されたの！」

「……あらあらあら、紅音を選ぶなんて見る目のある子ねえ」

「そー!？」

「え、えつとお母さん？」

「うふふ、ごめんなさい。ちよつと驚いちゃって……えつとシャンフロってあれよね？紅音が最近やつてるゲーム。告白されたって誰に？本当に男の子？紅音はどう思ったの？」

「えつと、詳しく話すと長くなるんだけど……」

その後私は今日起こったこと、葵さん……青野くんのこと、そして私の想いについて余すことなくお母さんに伝えました。途中お母さんが厳しい顔をしたり、デレデレな顔をしたりして不安になったけど……うん、大丈夫でしょう！

「……なるほど、話は分かりました。紅音の好き好きオーラも存分に伝わってきました」

ふえっ!?そ、そんなバレバレでしょうか……

「そしてそこまで気持ちが決まっているなら私から言うことは何も無いわ。おめでとう、紅音。……良かった……」

「……！ありがとう、お母さん！」

まさか認めてもらえるなんて！私は本当にいいお母さんに恵まれました……

「お父さんには私から伝えておくから紅音はランニングに行つてきなさい。あんまり遅くならないようにね」

「うんっ！行つてきます!!」

なお、この後家に帰つたら父は号泣してたし、結局嬉しすぎてほとんど眠れなかった。葵もまた色々考えていたせいで眠れず、次の日2人とも寝不足で登校したため変な噂がたち伊鈴の評判がまた下がったのは余談である。

年表もどきの途中で挟まれる謎の短編……まだ途中なのに……

中2冬 紅音の伊鈴に対する態度が見る人が見ればすぐにわかるぐらいには変わったため、伊鈴に対してブリザードが吹き荒れている。それと同時に伊鈴の表情がどんどん死にかけてる。簡単に言うところんな感じ。

〈小話3〉

「おはようございます！青野くん！」（めっちゃニッコニコ）

「……あー、隠岐さん……おはよ」（表情筋6割死んでる）

ストツ（紅音着席）（なんかやたら近い）

スーッ（距離を取る）（困惑）

……あからさまにしよんぼりする（悲しそう）（上目遣い）

……分かったから！（元の距離になる）（表情筋7割死ぬ）

これが割と頻繁に繰り返されるためクラスの人の視線は日に日に冷たくなり、紅音の笑顔は日に日に煌めきの度合いを上げ、伊鈴の表情筋は仕事を諦める。

この後は特にイベントは無い時期が続く。（細かいイベントはあると思う）（考えてないだけとも言う）

中3夏 非常に面倒臭いイベントである青野伊鈴、隠岐紅音拒絶事件。伊鈴が紅音の（正確に言うとは隠岐紅音親衛隊の）せいで削れた心を秋津茜との交流で癒すっていう訳の分からない状況に耐えられなくなったために起こる。秋津茜との交流によって中途半端に人の心を取り戻したためリアルのいざこざに耐えられなく……いや耐えようとしなくなった。ちなみに拒絶した理由の半分くらいは某E・Kさんに脅されたから。その後のなんだかんだで結果的にリアルで伊鈴が紅音のことをガチで意識するようになる。でも思ってる側も思われてる側も気づいてない。クラスの人との仲は完全に破

綻する。

また、そのあとの夏休みでは紅音が伊鈴と一緒に高校に行くために超頑張る。県下トップクラスの高校であるため伊鈴はともかく紅音には厳しかったが、伊鈴も紅音と一緒に高校に行きたいと思ったため全力で勉強を教える。結果、紅音の成績は秋以降にめっちゃ伸びて担任の先生は歓喜した。他のクラスメイトは心を惑わされすぎて成績落ちてる。

そして中3春（冬？）卒業式イベント。伊鈴からしたら何となく隠岐紅音Ⅱ秋津茜を予想してたとはいえとんでもない形でバラされた事件。一生忘れないレベルで記憶に刻み込まれた。紅音からしたらクラスメイトの本性をしっかりと知ってしまった瞬間。結構絶望したが、伊鈴への想いが勝った。クラスメイトは皆紅音相手に薄汚い本性を隠すのだけは得意だったのだ……紅音相手だけ。

当初の予定ではちゃんと校舎裏に行くはずだったし恵美ちゃんもここまで狂う予定はなかった。でも割とちゃんと書けたから満足。

高校編は中学で書けなかった定番イベントを書くと思われ。

かる方が多いって言うか」

「ああ……」

おい、なんだそのしたり顔。ほっぺぐにぐにしてやろうか。うりうり。

「にやつーや、やめてくださいよ伊鈴くん！」

「くふふ、悪い悪い。ほら、企画考えないと」

「もう……でもそうですね……女の子の格好してる伊鈴くんはちよつと見てみたいかも……」

ちよいちよいちよい、そういう不穏当な発言をするもんじゃないよ。そういうこと言うと確実にうちのクラスの連中嗅ぎつけてくるじゃん……

「なにになに？ 紅音女装喫茶やりたいの？」

ほらあー来たあー！

「え!?! あ、その個人的な理由なんだけど……伊鈴くんの女の子姿見たいなって……それだけ、です」

「よーし、お前ら！ 私たちのクラスの今年の出し物は男女逆転コスプレ喫茶だああ!!!」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」」」」」」」」

こうなると思ったわ、ちくしょうめー!! どうか男子共！ それでいいんか!?

「あの、伊鈴くん。えと、大丈夫ですか？」

「んー、だいじよぶ。葛藤はあるけど……ここで駄々こねるほど子供じゃないし、紅音のおねだりつて割と貴重だからこんくらいなら叶えてあげたいし……」

ちなみにこの後に行われた役割分担では俺の名前は接客の所に立候補もしていないの
に書かれていた。選択権を奪うな!

波乱の出し物決めの翌週、実行委員である渡辺氏がみんなを集めて一言、

「さて諸君! だいたい役割も決まったところで一つ問題がある。コスプレ喫茶という
以上様々な衣装を用意するわけだけど……青野に何着せたいですか! ハイ、挙手!」

待てや、コラ。いきなり深刻な雰囲気話出したかと思えば何言い出してんだこい
つ。

「はいっ!」

そしてなぜそんなに手を上げるやつがいるんだ、男女問わず。

「はい、吉田!」

「時期的にはちよつと違うけどミニスカサント!!」

「「あ〜」」

!? なんだその良いねえ、みたいな声。何なん、こいつら。他に決めることあるでしょー

「はいっ!」

「はい、加藤!」

「絶対ナース服似合うと思う!」

「分かる!!!」

よーし、分かった。これは耳を塞いで机に伏せるのが正解だな。俺は何も見えてないし聞いてない。

「はいっ!」

「はい、田中!」

「俺たち男子が望むのはただ1つ……ミニスカメイドだけだああ!!!」

「うおおおおお!!!」

クソが!!!人を着せ替え人形にするなあ!!

「ふふふ、色々な意見が出てきたわけだけど私から提案があります」

「どうした、渡辺!」

「よっ!待ってました!」

「迷うくらいなら全部着せればいいじゃない!!!」

「「「それだ!!!」」」

どゆこと!?!?!

「文化祭の期間は2日。青野は入る度に別の衣装を着てもらいます。それでいい?」
うっ……クラス中の期待に満ち満ちた目が刺さる……何とか絞り出せた言葉は、

「……そこまで際どくない衣装でお願ひします……」

実質的な死刑宣告を認める言葉だった。

「「Fooooooooooooo!!!」」

……覚悟を……決めるしかない……っ!

「あの、伊鈴くん!」

紅音エ!!きつと優しい彼女なら今の俺を救ってくれるはず

「私もコスプレするので一緒に頑張りましょうね!」

違う!!そうじゃないの!!……まあ、でもやるなら徹底的にやってやるか。どうしよう、サンラクとかに演技指導頼んだ方がいいか?あいつロールプレイ結構やってるし

……

なお、最終的に俺が着ることになった服はメイド服、ナース服、チャイナ服、サンタ服、セーラー服になったことをここに記しておく。

キヤラ崩壊が酷いなあ（他人事）

「はははははは!! 素材置いて死にさせえ!!」

「……おい、秋津茜。なんだ、あいつは。やたらと荒れているようだが?」

「あはは……葵さんにも色々あるんですよ」

あー! シャンフロでの戦闘はストレス発散に最高だあああ!!! あ、お前も素材落としてけえ!!

出し物を決めた日から数週間が経ち、いよいよ最初の衣装合わせとなった今日。凄まじいストレスが俺に降りかかった。

「青野おー! 衣装着ようかあ!!」

昼休みが終わり、午後からの文化祭準備に備えていた俺の元にそれはもうヒラッヒラ

でキラツキラの服を大量に抱えた死神渡辺が連行要員を連れてやって来た。

「え、待つて。多くない？衣装作るの早すぎるでしょ……」

「衣装作成班がみんな本気出しちゃってさー、他の人はまだまだだよ」

怖ア……執念が怖いよ。でも逃げられないよねー。よし、待つてろ。3秒で覚悟を決める。……よし。

「オーケー、分かった。着てやろうじゃん」

「お、良いねえ！そういうノリいいのは大歓迎だよ！じゃあまずはコレねー」

メイド服か。コスプレの定番中の定番だな……ねえ、待つて。スカート丈短くない？え、これ着るの？マジで？……あ、早く着ろつて？ちくしょう！

〜着替え中〜

「青野ー？もう終わったー？」

……

「青野？大丈夫？紅音いる？」

「……………だいじよぶ……………きがえおわつてる……………」

「じゃあ早く出てきてよ。他にもまだ服はあるんだから」

……これは仕事、これは仕事、これは仕事……心を殺せ。大丈夫、大丈夫。シャンフロで無数のサメに包囲網仕掛けられた時よりはマシなはずだ。俺はやれる。……よしー

「……………」、「これでいい…………？」

「……………」

何か言つてよ！黙られるのが一番キツいんだわ!!

「おい、みなさーん？何も言つてくれないと不安になるんだけど……」

「……………」はっーや、ごめんごめん！思つてた以上に女の子の子にしてビックリしちゃった」

「青野…………お前つてやつは最高だぜ…………！」

「全くだ。ここまであざと可愛い存在になるとは…………」

「不慣れな感じがまたいいな。貴重な照れ顔と相まつて普段とのギャップが素晴らし
い」

生き恥つ…………!!うう、これで接客するつてマジでございますか？大丈夫かな、文化祭終わる頃には灰になってそう。というか紅音はいないのかな。いや、見られないに越したことはない。この姿は特に。

「いや、これは思つてた以上の逸材だね！ところで青野、ポーズ取つて「お帰りなさい

ませ、お嬢様」って言ってもらっていい？」

「……………それ必要……………？」

「何言ってるんだ、必要に決まってるだろ!!」

「そうだそうだ！立ってるだけじゃ接客にならないんだぞ!」

「大丈夫だ、お前なら出来るって信じてる!」

くううう……………あながち間違つてるとも言えないのが悔しいつ……………!……………!……………!いいよ、わかつたよ、やってやるよ!クソゲー時代に相手をおちよくるために鍛えたボイチェン技能の前に悶絶しやがれ!!

「んん……………お帰りなさいませ、お嬢様、ご主人様♡（ロリボ）（上目遣い）（潤んだ目）くううう……………精神力がゴリゴリ削られていく音が聞こえる……………だが、俺の捨て身の攻撃はとてつもないダメージを叩き出したらしい。親指を立てたまま床につつ伏すクルスメイト達。ふふふ、完全勝利だな、これは。

「美香ちゃん、着替え終わりましたよ……………え!?伊鈴くん!?!」

「み……………」

喉の奥の方から蛇に食われてる最中の死を覚悟した蛙みたいな声が漏れる。あー、詰んだ。とか、何その執事服、可愛いんですけど!?とか、こいつらいつまで倒れてるんだ?とか様々な思考が浮かび、言葉にはならず虚空に消えていく。

「えつと……」

「………み、みにやいで………」

何だろうか、女物の服を着ると女の子らしい仕草を取ってしまうもののだろうか。紅音の驚愕の視線を受けた俺に出来たのは片手でスカートを出るだけ引つ張りつつ、もう片方の手で体を覆うことだけだった。しかも囁んだし………ううう、恥ずかしい………今までに受けたのとは違うベクトルの恥ずかしさを感じてる。非常にまずい。演技とかでなくマジで顔赤いのが分かるし、何ならちよつと泣きそう。

「………あ、あのー伊鈴くん、とっても似合ってますよ!!」

「………ほんと………?」

「はいっ! すつごく可愛くて見蕩れちゃいました!!」

「………そ、そつか………そつかあ………」

………ちよつと落ち着いた。テンパリすぎてたかも。でも普通に考えて彼女に女装してるどころ見られたら大なり小なりこんな反応になると思うんだけどなあ………

「んん、………紅音もその格好よく似合ってるよ。普段のイメージと違ってカッコよく見える」

「ホントですか!? えへへ、ありがとうございますっ!!………えいつ!」

んん? 紅音がいきなり手を握ってきた。どうしたんだろ?

「……ふふふ、今の私は執事ですから！伊鈴くんをエスコートしてあげます！」
ああ、なるほどね。ふふ、そういうことならこっちも……

「ええ、そういうことなら。お願いするわね、私の大切な王子様^{紅音}？」
でも今の俺の格好メイドだしなあ……従者同士でエスコートも何も無いんじや……

結局この後割とマジで校内連れ回されそうになったため丁重に辞退した。
以下他の服を着た時の反応抜粋。

◆ ナース服

「こんな感じー？」

「きやああああ!!似合ってるうううう!!!可愛い!!!」

「俺……ナース服好きかもしれない」

「というか何であいつあんなに足綺麗なんだ？絶対領域が魅力的すぎるっ……!」
「女子として負けた気分になるわね……」

◆ サンタコス

「……クリスマスにはまだ早くない？」

「いい!凄くいいよ、青野!!赤い服に白い肌がとっても映えてるよ!!」

「あんな可愛いサンタだったら毎日でも来て欲しいよな……」

「これもう接客担当青野だけでいいんじゃない？」

「紅音ちゃんにトナカイの着ぐるみ着せて隣に立たせたいわ」

◆ セーラー服

「これどこから調達してきたんだ……え、手作り？マジで？」

「はああああ!!可愛い!!!これはもう現役JKと言っても過言じゃないわ!!」

「セーラー服っていいよな……俺志望校選ぶ時女子の制服がセーラー服の所とここですごい悩んだもん」

「セーラー服は過度な露出はいらぬよな。清楚感が出てるのがすごいぞ」

「あれ、なんか若干胸ない？詰め物かしら……？」

◆ チャイナ服

「あー、このスリットは良いね。動きやすくて快適だわ」

「良い!すごい!!!というかめちやくちやエロい!!!」

「こんな可愛い子がいる店とか絶対貢ぐわ」

「これはっ……!激しくっ……!性癖に刺さるっ……!!」

「ああ、分かった。あれって性別：青野でしょ」

◆ ぶかぶかのワイシャツ一枚

「聞いてないんだけど!? ……聞いてないんだけど!!」

「萌え袖！彼シャツ!!可愛い!!! ……けどさすがにこれは表には出せないわね ……悪いけど青野、それは紅音と2人きりの時にでもやってちょうだい？」

「あゝー、あんな可愛い彼女が欲しい ……」

「落ち着け ……あれは男、あれは男 ……あゝ あゝ あゝ あゝ あゝ!!!」

「何この感情 ……はっ、これが母性!?!」

そんなこんなで多少は楽しんでいたとはいえ着せ替え人形にされていた俺は鬱憤を晴らすためモンスター共を虐殺スロウターするのであった。素材集めとストレス解消を同時にできるシャンフロはやはり神ゲーっ!!!

妹と彼女

お化け屋敷に縁日、飲食店に喫茶店。いよいよ文化祭まであと一日となった今日、俺と紅音は宣伝係として各クラスにビラを配るべく学校中を歩き回っていた。本日の格好はミニスカサントラ……もう慣れた。慣れちゃダメな気がするけど慣れた。ちなみに我が1年A組が誇る広告塔のもう一人である紅音は俺の横でトナカイの着ぐるみを着てご満悦である。「可愛いね。」

「1年A組です。ビラ置きに来ましたー」

「あー、そこに置いといて……!!?」

「ビラ配りの子……!!?」

「失礼しました!」

「え、あんな可愛い女の子新入生に居たの!?!」

「知らない知らない!」

「でもあのトナカイの子は隠岐紅音さんだよね……つてことは横の女の子ってまさか

……」

「当日絶対行こうね！」

「にしても紅音、やけにご機嫌だねえ。そんなに文化祭楽しみ？」

「はいっ！第2中の文化祭って小規模って言うか……合唱祭みたいな感じだったじゃないですか。だからこういう雰囲気初めてでとつてもワクワクしてます!!」

「あー、まあ確かにねえ……でもちよつと分かるかも」

「えへへ、伊鈴くん！当日は絶対一緒に回りますよね!!」

「当然！クラスの奴らもシフト合わせてくれたしなー、存分に楽しもうや」

よく考ええると俺も成長したな……昔だったら絶対協力してないし楽しもうとも思っ
てなかっただろう。……うん。

「紅音、ありがとね」

「……？何がですか？」

「んー……色々。とにかく俺は紅音に感謝したい気分なの！」

「そんなこと言ったら私だっていっぱい伊鈴くんに感謝したいことありますよ！例え
ば……」

その後、二人の思い出に耽りながら俺たちは学校中を練り歩いた。

「おかえり、広報2人組！校内デートは楽しかったかい？」

「デ、デートじゃないですよ！ね、伊鈴くん！」

「んー？俺はデートのつもりだったけど？」

「ふえっ……」

くく、紅音はほんとからかいがあるな。とてもいい反応をしてくれる。

「ヒューヒュー!!お熱いねえ!!」

お前は黙ってようか。

「まあまあそれはそれとして2人とも他の子の接客練習見てあげてね？2人が一番よくできてるし」

「はいっー!」

「りよーかい」

さーで、クソゲー仕込みの演技術存分に見せたりしますかあ！

「よーっし！準備しゅーりよーっし！！皆ありがとーっし！！」

時刻は現在午後5時30分。6時が最終下校時刻であるため割とギリギリだったな。あの後俺と紅音は手分けして接客の指導に当たった。最終的にかんりのものにはなったのだが……飲食店でゾンビのコスプレはやめた方がいいと思うなあ……

「それじゃあ明日に備えてみんなちゃんと寝てくることー！かいさーん！！」

明日からが本番だと言うのに渡辺は元気だな。んー、さすがに今日はゲームを控えて早めに寝るか？一応明日朝早いしな……

「伊鈴くん！帰りましょうー！」

「ん、おっけー。……ねえ、紅音今日シャンフロどうする？」

「え？……うーん、軽くノワルリンドさんに挨拶してそれで終わりにしようと思います！明日に備えて早く寝たいですし！」

そーだよな。俺もそうするかー。

「そだよねえ。……ま、帰ろっか」

「はいっ！」

土曜日朝。いよいよ今日は文化祭の本番である。

「おはよー、お兄ちゃん。今日は私部活だから行けないけど明日は行くからねー」

「……出来れば来て欲しくはないんだけどな……あ、おはよー」

身内にあれを見られるのはなかなかの恥だなあ……そんなことを考えながらも手はスムーズに朝ご飯と弁当を作り上げる。

「はい、完成つと。これ食ったら俺はもう行くんで洗い物はよろしくな」

「はーい。紅音さんによろしくねー」

うまうま。我ながら良い出来『ピンポーン♪』んあ？誰だこんな朝早くから。

「はいはーい、どちら様で……つて紅音？どしたの？」

「おはようございます、伊鈴くん！……えつと、ちよつと早く起きちゃつて、それで……」

……ああ。紅音つてあれだもんな。旅行の前日に楽しみすぎて寝られないタイプ。大方待ち合わせ場所に早く着きすぎたんで俺ん家まで来たつてどこか。

「んー、じゃあ上がる？もう少し俺は時間かかるし」

俺が遅いように思うかもしれないが待ち合わせ時間にはまだ30分はある。……そう考えるとすごいな。

「え!?良いんですか?」

「良いよー、つてもそんな歓待はできないけど」

「いやいや、無理言つて入れてもらってるんですから大丈夫ですよ!」

「んじゃ鍵開けるから入ってきてねー」

「あ、はい!」

「おはよー、紅音」

「はいっ、おはようございます!」

「まあ、とりあえず上がってよ。飲み物くらいは出すからさ」

「お邪魔します!……うう、ちよつと緊張します……」

「ん?なんか言つた?」

「へあ!?な、なんでもないです!」

ならいいけど。……よく考えるとこの状況って彼女を初めて家にあげてるのか……なんか緊張してきた。

「あ、紅音さん！どうしたんですか？」

「おはよう、夢花ちゃん！えっと、その……」

ん？なんか紅音がチラチラ見てくる。助け舟出せってことか？

「……ああ、そういうことですか。お兄ちゃんはご飯食べてなよ。紅音さんは私がもてなしておくから」

「あ？まあ、助かるけどいいのか？夢花も学校あるだろ？」

「まだまだ時間あるから大丈夫！ささ、紅音さんこつちへどうぞぞ？」

「うん、お邪魔するね。じゃあ伊鈴くん、準備終わったら呼んでくださいー！」

「おー」

まあ、女子同士俺には聞かせられない会話もあるのだろう。そんなことより冷めないうちにトースト食っちゃお。うまうま。

「紅音ー、準備できたよー」

「ひ、ひやいっ！」

……う？なんかめっちゃ慌てる？まだ時間は大丈夫だよな。

「じゃ、じゃあ行きましようか！じゃあね、夢花ちゃん」

「はい！行つてらっしゃい、お兄ちゃん、紅音さん！」

「おー、行つてくるわ。行こうぜ、紅音」

「は、はいっ！」



今日は文化祭とはいえ通学路になにか変化がある訳でもなく、伊鈴くんと一緒に学校に向かっているのですが……：……うう、夢花ちゃんに変なこと言われたせいで伊鈴くんのこと、妙に意識しちゃいます。

「……………ねー」

夢花ちゃんがなんで知ってるのか分からないけど……伊鈴くんって家ではそんな感じなんですわ……ちよつと可愛いかも……いやいやいや、何考えてるんですか、私！

「……………かねー」

夢花ちゃんの言葉が頭の中で繰り返されます。

『お兄ちゃんは昔から私に弱音を全然吐かないんですけど……結構限界だと思っ
すよね、あれ。よく寝ながら泣いてますし。まあ本人は自覚ないし認めないでし
ど。……だから紅音さん、お願いします。お兄ちゃんを助けてあげて。私じゃお兄
ちゃんを癒してあげることとはできませんから』

……夢花ちゃんはあるってたけど私に出来るのかな……

「紅音!!」

「きやつ!」

強く腕を引かれ、前を見ると青信号なのに高速で車が駆け抜けていった。

「大丈夫!?!怪我してない!?!」

「あ、はい……大丈夫です。ありがとうございます」

「良かった、無事で。でもどしたの?きつきからぼんやりしてて。寝不足?」

「いえ、そういう訳では無いんですけど……」

さすがに言えませんよね、伊鈴くんをどうやったら癒せるか考えてたなんて。……で
も伊鈴くん私と一緒にいる時でも気を張ってるっていうか、甘えてくれないですし。
むう、前にももつと甘えてくれるようになって言ったのに!

◆ 夢花の部屋に紅音が行ったあとなんか紅音の様子が変わった。話しかけてもぼんやりしてるし、さつきなんか車に轢かれかけた。あれは車側が悪いけど。……あいつ何吹き込んだんだ？

結局学校に着くまで俺たちの間に会話はなかった。あれ、これってヤバいのでは？付き合いつつ始めてから一年以内が一番別れるカップルが多いって聞くし……

「お、おはよーご両人！今日も仲良いねえ！」

いや、タイムミングラウ！ちよつと今気まずいの！

「あはは……おはよう、透子ちゃん」

「……？ま、いいか。今日は頼むぜ2人とも！」

——そして、波乱の文化祭の幕が上がる……！

一途なる守護

◆ 文化祭1日目

……今一度うちのクラスの出し物を確認しておこう。店員が男女逆転コスプレをしているという点は特筆すべき点だが、それ以外はさして珍しいものがある訳でもない一般的な喫茶店である。そこまで客が来ることもないだろう、そう思っていた。のに……

「青野ー！次3番テーブルにこれー！」

「はーいー！」

なんなのこの混み方!?!おかしいでしょ!ただまあ、外部客は少ないな。生徒が多いって感じかな。

「お待たせしました!ブラックコーヒー2つとモナカアイス2つです!ごゆっくりどうぞ♡」

出来ればゆつくりしないでテイクアウトしてくれると助かるけどね!

「あ、あの!写真いいですか!」

……なんかこれなのかなあ、混んでる理由。うちの店はその特性上店員と写真が撮れる。もちろんSNSなんかにあげないことが条件だけど。文化祭が始まってから1時

間ほどしか経ってないのに既に10回以上写真撮ってるんだよね……

「もちろんいいですよ☆」

「えーい、ピースピースう。……はあ、仕事に戻ろう。この仕事をする上で必要なのは表面上のにこやささと内面での凧いだんだ。ビークールビークール。プロ意識を持つんだ……」

「すみませーん、こつちも写真いいですかー?」

くあつ!」

「いやいや、青野ちゃんはモテモテだねえ!よつ!稀代の美少女!」

喧嘩か?お前は喧嘩を売ってるのか?

「うるせー、笑いながら言うな」

「くふふ、まあまあ。存分にデートを楽しんできたまえよ。紅音も楽しんでくるんだよー……あつ、そうそう。なんか不審者が入り込んでるとかいう噂が流れてるから注意してね?」

不審者……?まあ、悠央の文化祭って割と誰でも入れるからな。そういうこともある

のだろうか。

「うん！ありがとう、透子ちゃん！……行きましょう、伊鈴くん！」

「ん、行こつか。紅音どこか行きたいところある？」

「えっと、お化け屋敷行つてみたいです！」

お化け屋敷か。ちよつと意外だな。紅音つて結構怖いのが苦手じゃなかったっけ？それに悠央のお化け屋敷つて結構本格派なことでも有名なんだよな……

「いいけど……紅音大丈夫なの？」

「ちよ、ちよつと怖いですけど大丈夫です！伊鈴くんも怖かったら私にしがみついていいですからね！」

「……うん、まあその時は頼るね？」

さすがにそんなことはしないとと思うけどな。お化け屋敷で彼女にしがみつくのはちよつとだらしないくない？

「お、あそこだね……〇廊？」

なんかどつかで聞いた名前だな。まあ、それはさておきあんまり混んでないかな？これならちよつと待てば入れそう。

「あんまり混んでないみたいですね！良かったです！」

「そだね。のんびり話しながら待つてようか」

うだうだととりとめない話をするこゝと数分、ついに俺たちの番が回ってきた。

「2名様ですね！こちらの懐中電灯は出口で返却してくださいねー。では行つてらっしゃいー！」

「い、行きましょう、伊鈴くん！」

「ん、行くかうか」

……ふうん、さすがに本格的だな。各所に配置されてるフレイムライトが雰囲気出してるな。……おい待て、紅音。なぜ先頭を行こうとしてるんだ。大丈夫なの？

ガタンツッ！

「びゃっ!!」

ダメそうだなあ………物音だけでこゝまでビビつてちやろくに進めないだろう。いよいよもつてなんでお化け屋敷選んだんだろ。

「ほら、紅音。掴まりなよ」

多少は怖さも軽減されるだろうと思ひ手を差し伸べたのだが……

「だ、ただ大丈夫です！ついてきてくださー……うああああ……『きゃああああ?!?!』
なんなの!?!何がそこまで紅音を駆り立てるの!?!大人しく頼ってくれていいんだけど
!?!もはやそつちが気になってお化け屋敷の怖さが半減してるよ!」

「……………うう、伊鈴くん。手、握つていいですか？」

「いいけど……」

おずおずと差し出された紅音の手を握り返しながら、なんであんなに固辞したのか？
そう聞こうとしたがやめた。何故かって？後ろから早く行けやリア充が……的な視線
を感じるからだね！

その後紅音が何回も絶叫し、最終的に手を握るところかコアアか何かのようにピツタ
リと張り付いてきたのは……まあ言わなくても良いことだろう。あえて言うなればめ
ちやくちや可愛かったし父性がくすぐられた

「ほら、紅音。ドリンク買ってきたよ」

「うう、ありがとうございます。伊鈴くん……」

本格派お化け屋敷の恐怖に存分に打ちのめされた隠岐紅音氏に休息を与えるべく俺
たちは休憩所に来ていた。

「にしてもなんであんなに張り切ってたの？紅音、ホラー系苦手じゃん」

「……………笑いませんか？」

「……………うん、笑わないけど……………」

え、そんな笑う可能性があるような内容なの？

「……………その、なんと言いますか、えっと、伊鈴くんに頼れるところを見せたかったというか……………」

目を逸らしながら人差し指をつんつんしてる紅音はそれはもう可愛かったのだが……………なんて？頼れるところを見せたい？

「なんでまた急にそんなことを……………」

「実は……………」

そんな前置きとともに聞かされた話を聞いて……………まあ、とりあえずアイツ夢花は一回シメておこうと思った。紅音に余計なこと吹き込むんじゃないよ。この子は優しいんだから絶対気にしすぎるんだよな……………

「なるほどね……………まあでもそんな気にしないでいいよ。俺は大丈夫だから」

正直こんな言葉をかけても紅音が止まらないだろうってことは分かる。そのくらいの関係にはなってる。……………だからってそう簡単に俺の抱えている問題がどうこうなる訳でもない。というか一生活ることはないまでである。幼少期の経験ってのはそういうレベルで人生に影響を及ぼすんだ。

「っー……………はい」

紅音も察したのだろう。何を言っても無駄であると。

「ん……………そろそろ教室戻ろっか。シフトの時間だ」

「はい……………」

俺の言った言葉は本来なら安心を誘う言葉で、でも彼女紅音にとっては拒絶に等しい言葉だったのだろう。そんなことはわかっている、分かっているが……………それでも言わなければならなかったのだ。俺のために紅音庇護対象の心が彷徨うことなどあつてはならないのだから。

結局その後教室に戻った俺たちの間に会話はなく文化祭の一日目は全体として見れば盛況で終わった。

裏設定的な何か

伊鈴の中では紅音も夢花も本質的には同じカテゴリーに分類されている。それはすなわち庇護すべき対象。幼い頃より妹を守り、育て、独り立ちさせたあとには一人で生きていこうとしていた伊鈴の中に共に支え合い助け合うというカテゴリーはない。

”彼女”の意味

◆ 文化祭2日目

今日もうちの店は朝から盛況である。大量にくる生徒生徒……たまに教師混じってるのどういうことだ。仕事しろ、仕事を。とはいえこのくらい忙しい方がありがたい。……会話をしない免罪符になるから。昨日から俺と紅音の間には会話は無い。互いにどこか遠慮し合う、中学校の頃を思い出すような微妙な距離感。もちろん紅音のせいでない事くらい分かっている。俺の子供じみた価値観のせいだ。だが、分かっているからと言ってそう簡単にはどうこうできるものでもないわけで……おっと。

「いらつしやいませ！2名様ですか？」

思考は常に紅音のことを考えていても身体は完璧な接客を果たす。よく言えば動きが最適化されている状態であり、……悪くいえば慣れたことで注意力や判断力が薄まっている状態である。故にこそ…………事件は起こる。

時刻は12時過ぎ。朝から数時間に及ぶ連続労働。自分から志願したとはいえなかなかブラツクな働きっぷりだ。……少し疲れてきたかな。客数も減ってきてるし次の交代で代わってもらおうか………ん、

「いらつしやいませ！1名様ですか？」

「……………ぐふふ、う、うん。そうだよお……………」

目の前の客が放つオーラはまともな思考状態をしていればひと目でわかる程のヤバさであり……………しかし連続労働による疲れと思考がトビまくってることによる判断力の低下は俺から危機管理能力を欠如させていた。

「ではこちらの席に……………っ!」

気づいた時にはもう遅く、俺の全身は後ろからの抱きしめにより完全に拘束されていた。

「……………え、なん……………え？」

しかし未だに思考は遅く、口から漏れるのは意味をなさない単語の羅列で……………

「ぐふふふふう……………っかまあえたあ……………君可愛いねえ……………」

「ぴゃっ」

耳元に息を吹きかけながら話しかけられたことで生まれる全身を貫く嫌悪感。それと共に全身をまさぐられる不快感。今までに感じたことの無いような感情が全身を

襲い抵抗する氣力を奪っていく。

「うふふふふ……抵抗しないってことはあ……君も満更じゃないのかなあ……？」
「……うああ」

そんなわけあるか！と、叫ぼうとしても口から出るのは弱々しい呻き声だけ。ああ、なんて無様な姿だろうか。必ず守ってやると言っておきながら、彼女の心一つ満足させてやることも出来ず、痴漢一人撃退することも出来ない。あまりの不甲斐なさに涙が出てきそう。

「ぐふふふふ……青野ちゃんっていうのお……？可愛いねえ……今にも泣いちゃいそうで……ぐふふふふふぶつ」

何か固いものに固いものが当たる音がし、男の拘束が緩む。すかさず誰かが俺の手を引き男から引き剥がしてくれる。

「だ、大丈夫ですか！伊鈴くん!!」

………実に惨めだ。うだうだと自分のことばかり考え、その結果起こしたトラブルに自分一人に対応することも出来ずにあまつさえ守るべきと決めた人に助けられる。なんだこれは。因果応報とでも言うのだろうか。

「な、何するんだあ！ぼ、ぼくはお客様だぞ!」

「うるっさいわね、あんたなんか客なわけないでしょ!?!直ぐにでも警備員さんが来る

から覚悟なさい！」

夢花の声も聞こえる。だらしないうところを見せてしまった。それではダメなのに。俺は頼られる存在で居なくてはならないのに……………

「紅音さん、お兄ちゃんをお願いします。ここは私が」

「え、ダメですよ！夢花ちゃんはお客様なんですから

！店員の私が……………」

「何この惨状……………って思ったけどとりあえず紅音は青野についてあげて。ここは私が対応するから」

「透子ちゃん……………うん、お願い！行きましよう、伊鈴くん！」

何も出来なかった罪悪感、人前で無様をさらしたことに對する恥、嫌われるのではないか……………いや、頼れないと思われないかということに對する焦燥感。無数の感情に縛られた俺の体は無意識的に紅音について行く。

「……………うん、ここなら大丈夫ですね。……………えっと伊鈴くん、大丈夫ですか？体に異変があったりとかは」

何か言う気力もなくなつただ首を力なく左右に振る。

「そうですか、良かった……」

安堵の言葉と共にこちらに伸ばされた手を俺は……

「……や……」

短い言葉に拒絶の意志を乗せ、身を引いて躲す。

「あ……」

空を切つた手はそのまま下ろされ、沈黙が部屋を満たす。一心に俺のことを考えてくれている少女の献身すら無碍にして黙りこくることのなんと残酷なことだろうか。……もう……消えてしまいたい。

「伊鈴くん……」

「辛いことがあるなら、言いたいことがあるなら、全部全部言ってください。どんな内容でも絶対に伊鈴くんを見捨てたりしませんから……」

懇願するようにこちらに声をかけてくる紅音。だけどダメなんだ。それじゃあダメなんだ。見捨てられるとかそういうんじゃない。弱い所を見せちゃダメなんだ。自分のことを守ってくれる存在が自分と大差ない弱々しい存在だと知つたら？ 庇護される者は不安で仕方ないだろう。だから……ダメなんだ。俺にとつては妹も彼女も守るべき存在であつて頼る存在では無いのだから。

ふるふると弱々しい拒絶の意志を込めて首を振るう。俺の事を思うのなら今すぐにもここから出ていって俺を一人にして欲しい。言う勇気もないのに、そんな自分に都合のいいことばかり頭の中で考えてしまう。

「……………何ですか……………」

「なんで何も言ってくれないんですか！私はず……私は伊鈴くんの友達でも、仲間でも！妹でもないんです!!ずっと後ろにいて守られるだけの存在じゃない！あなたの横に立って互いに助け合える存在でいたいんです!!だって私は……………伊鈴くんの彼女なんですよ……………?」

ズキンと深く心に刺さる慟哭。紅音のためを思って、紅音が幸せでいるため、紅音が、紅音が……………そんな想いが否定されたようにも聞こえる言葉。だけど、何よりも、誰よりも紅音の心を踏み躪っていたのは他の誰でもない俺自身なのだろうか……………

「私は伊鈴くんに守られると大切に思われてるんだなって心がポカポカします。伊鈴くんを抱きつくとき心がきゅーってなって、でもほわほわします。それに伊鈴くんと一緒にいるのは……………とつても楽しいです。伊鈴くんはどうですか?」

そんなの……………

「楽しいよ……………楽しいに決まってる……………!でも！頼られる存在でないと……………俺は……………!」

ふわりと優しく紅音に抱きすくめられる。それは今までの親しい友人にするような抱きつき方ではなく、母親が泣いている幼子を抱きしめるようなもので……………

「よしよし……………大丈夫ですよ。伊鈴くんは良い人です。頼れるところだけじゃない、頼りないところもゼーンぶが愛おしい大切な人です。ちよつと疲れちゃいましたよね……………今も、これからも、私の前では存分に休んでいいんですよ?」

優しく慈しむように頭を撫でられ……………幼い頃の記憶が蘇る。

あれは……………確か小学生の頃。人との交流を断たんとし、でもそれに耐えられずに無意識的に救いを求めて母さんの病院を訪ねた。起きていることの方が珍しかったあの頃。病室の扉を開いたら偶然にも母さんは起きていた。

色々な感情が溢れ、駆け寄った俺を優しく抱きしめて頭を撫でてくれた。細かい会話はもう忘れてしまったけれど、最後に言ってくれた言葉は……………今なら思い出せる。

『伊鈴。将来あなたに大切な人が出来ても決して夢花に接するように接しちやダメよ? 夢花はあなたにとって守るべき家族かもしれない。でも、あなたの大切な人はあなたが守るだけの存在じゃない。互いに支え合う人。……………ああ、今は分からなくてもいい

わ。そういう人ができた時に思い出してね』

何故今まで忘れていたのだろうか。きっと俺の心は自分で思っていた以上にいっぱいいっぱい……だから頬に一筋流れた雫をもう止めることは出来なかった。

「……………んん……………」

あれ？今日は確か文化祭。なんで俺は寝てるんだ？それに枕なんて上等なもの学校にあったか？……………待て待て、一つずつ思い出していこう。昼頃に喫茶店に変態がやってきて、紅音と夢花に助けられて、[?]それで……………

「にやあああああああああ
!?!?!?!」

悲鳴とともに思いつきりはね起きる。え、え、えええええ!? ひよつとして、紅音に泣きついて寝落ちした……? てことはあの枕つてのは……ふるふるすると震えながらゆつくりと後ろを振り向く。

「えへへ……おはようございます、伊鈴くん」

やや照れながらも満足気な表情で笑いかけてくる紅音。……なるほどなるほど。自害案件か。

「拙者、自害いたす」

「なんでですか!？」

ちくしょう、止めるなあ! 女の子に泣きついた挙句寝落ちつて! 寝落ちつてえ!!

「うう……紅音ー、紅音さーん、紅音さまー」

9割9分地雷案件だろうが……聞かねばならない。

「はいっ! なんです、伊鈴くん!」

なんでそんなつやつやしてるんだよう……

「そのー、えーつとですねー……ど、どう思った?」

「……? 何をですか?」

ぐぬぬ……言わなきゃダメか……

「その、だから……女の子に泣きついたらうえ寝落ちまでしたわけじゃないですか

……その、恥ずかしいやつだなとか……思ったりしてませんか？」

何となく敬語になってしまう。ゴリッゴリにやましいことがあるからね、しようがないね！……うう。

「……ふふ、伊鈴くんは心配性ですねえ。そんなに私に嫌われたくないんですか？」
なんだ、この圧倒的余裕さ！紅音はもつとこう……幼い感じだったじゃん！

「あ、当たり前じゃん……」

「大丈夫ですよ、嫌いになんかなったりしません。むしろ子供っぽいところが見られてもつと好きになりました！」

ふええ……紅音が急に成長してるう……女の子は成長が早いって言うけど早すぎません？

「ほら、行きましょう、伊鈴くん！もう少して後夜祭ですよ！」

……俺ただけ寝てたの？……ああ、でもすぐくスッキリした気分だ。きつと今日の瞬間、俺は初めて紅音のことを彼女として認識できたんだろう。

「うん……ねえ、紅音」

何かあるのかとばかりに疑問符をうかべこちらをみる紅音に最大限の笑顔で笑いかける。

「ありがとう……大好きだよ」

きつとこの先また間違えることがあるかもしれない。紅音を傷つけてしまうことがあるかもしれない。でもきつとまた俺たちは笑い合えるだろう。なんせ俺たちはカッブル互いに支え合う存在なのだから。

ゲロに触発されて

異形なるモノ Route (Bad End)

「……え、あ……何、これ……」

「茜ー？いるー？」

「あー………んえ？」

「あ………」

◆ 数時間前

珍しく秋津茜に呼び出された俺とカツツオ、ペンシルゴン……何だこの取り合わせ、ろくな予感がしない。てか、なんでサンラクはいないんだ………捕まらないからか。えっと、それで何だっけ……

「クエストの手伝い？」

「はいっ！ノワルリンドさんから言われたんですけど超転身をさらに強化できるらしいんです！でも複数人で挑戦することが条件らしくて、それで皆さんにお願いできないかと！」

「ふうん……そういうことなら私は全然構わないけど君たちは？」

「俺も大丈夫かな。クラメンの戦力が上がるのはちょうどいいでしょ」

「まあ、断る理由はないわな」

来たる王国動乱に向けて戦力の拡充はいくらしても過剰ということは無。それに秋津茜の頼みを断るわけないしな。

「いやにしても茜ちゃんもなかなかユニークに愛されてるねえ！それに引き換え

……？」

「オйкаツツオくんはあ!？」

「いい加減ユニークネタしつこいんだよ！ていうか葵は言うてそんなユニーク見つてるわけじゃ……あ」

「んんん？あれえ、俺の身体忘れちゃったかなあ!？」

ほーれ、ほれほれ。全身ユニークだぞ、讚え、崇めよ。

「くう、ミスった……！」

「はいはい君たちそのへんで。今日は茜ちゃんがメインなんだから」

「アーサーが最初にやったんだろ……まあいいや。それで秋津茜、どこ行きやいの？」

「えっと、それが分からないですよ。何でも人数が集まれば勝手に開始される？みたいな感じらしく」

「そんなのもあるんだ。でもそれならパーティー組んで待ってればいいって感じかな？」

「まあそんなとこだろうな。一応秋津茜がパーティーリーダーの方がいいか」
茜から飛ばされてきたパーティー申請を受けた瞬間……

「なるほど、貴様らか………良いのだな、秋津茜」

どこからともなくノワリンが湧いてきた。え、何今の。転移魔法？そんなん使えるの？てかなんだよ、なんで今俺の方思いつきり睨んでから言っただよ。

「はいっ！ノワリンさんお願いします！」

『ユニーククエスト』が自動で開始されます』

……

……

………？

「えっと、ノワリン？それで何すればいいの？」

「貴様らには我が用意した迷宮を攻略してもらおう。攻略条件は一定数以上の魔物を倒した後に貴様ら3人と秋津茜の合流。秋津茜には最初から超転身を使ってもらおう」

……?なんかノワリンの様子が変というか、NPCっぽいような……?

「疑問はないな……では跳ぶぞ」

が、抱えた疑問をぶつける間もなくノワリンが放った黒い光によつて俺たちの視界は塗りつぶされた。



ノワルリンドさんの出した黒い光が収まった時私は見たことの無い石造りの部屋の中にいました。

「……あれ、ここは?……ノワルリンドさーん!どこですかー!」

「そう叫ぶな、秋津茜。ここに居る」

「ノワルリンドさん!えっと、ここが迷宮で間違いないんですよね?」

「ああ、そうだ。……さっさと行くぞ、早くアレを使い」

「分かりました！刃隠心得奥義【超転身】！」
いつものようにノワルリンドさんと合体し竜人の姿になります。

「これでモンスターたちを倒せばいいんですよね！……つてあれ!?制限時間がない!?」

『この空間に限り超転身に制限時間はない。時間は気にせず戦え』
「分かりました！サクサク行きましょう！」

「刃隠心得龍の巻【龍気揚々】！たああああ!!」
黒いトカゲのようなモンスターにトドメをさし、一息着きます。

「結構倒しましたね……ノワルリンドさん！そろそろ合流できるでしょうか！」
『……ああ、そうだな。規定数の魔物は倒している。あとは合流するだけだ』

最初にノワルリンドさんから言われた時は「人を辞める覚悟はあるか？」なんて大袈裟なことを言われましたけど、意外と余裕でした！……えへへ、強くなったら葵さん褒

めてくれるでしようか……

「んー、道は……あれ？これ鏡でしようか……」

行き止まりの道の先に何故か置いてある鏡。何となく鏡を覗き込むと……

「……え、あ……何、これ……」

超転身でノワルリンドさんと融合した時のような人間らしさの強く残った姿ではない、それこそホラー映画か何かで出てくるような怪物がこちらを覗いていました。

「秋津茜ー？いるー？」

え……今の声は……！に、逃げなきや、こんな姿見られたら……

「あー………んえ？」

「あ………」

光に照らされた私はどうすることも出来ずにその場に立ち尽くします……って、ダメです！な、何か言わないと！

「あ、葵ちやーん。茜ちゃん見つかったー？………え？」

「ん、どしたのペンシルゴン、そんな固まるなんて珍し………は？」

あう………ど、どうしよう、逃げる？説明する？でも何て言えば……

『ア、ア、ア………』

……!? 声が……さっきまでは普通に出せていたのに!

「葵、ペンシルゴン! 注意して! ボスカもしれない!」

「……はっ! ごめんごめん、ぼんやりしてた!」

「……………うん?」

……………ああ、そういうこと、だつたんですね。ノワルリンドさんがあんなにも大袈裟なことを言った理由、葵さんたちと来た時に「良いのか」と聞いた理由、キズナを捨てよという不穏なクエストの名前。全ての点が繋がり、このクエストの本質が分かれます。でもこんなにも辛くて苦しくて泣きたくなるものなんですね……………大切な人たちに自分を分かつて貰えないって言うのは…………

『アッアッアッアッアッアッアッアッアッアッアッアッ!!』

心からの泣き声は威嚇のための咆哮として、分かってもらいたくて伸ばす手は振るわれる攻撃として、剣を交える度に体力ではない心が削られていきます。

……私は何をしているんでしょうか。クエストを手伝ってもらっているのに彼らを襲う……もう逃げてしまいませんか……ここから……………この世界から……………

『アッアッアッアッアッアッ!!』

手を思いっきり振って距離を取りそのまま逃げ出します。1歩を踏み出す事にこぼれ落ちて行く思い出の数々。十分に距離を取った頃には、もう、私の中にはこの世界に留まる理由すらも残っていませんでした。

「……………ログアウト……………」

最後まで捨てられなかった1人の少年との思い出。出会い、救われ、笑い合い、愛を交わすまでに至った彼との思い出さえも振り払い……………この世界に別れを告げます。



「何だったんだろ、あのモンスター」

「うーん、道中で出てきたやつ親玉っぽさはあったよねえ」

黒い、爬虫類と人間の合成獣キメラのようなモンスターとの戦いを終え、俺たちは引き続き秋津茜を探していた。にしてもさっきのモンスター……………何だったんだ？

『ユニーククエスト「ヒトを捨てよ、キズナを捨てよ」は強制終了されず。参加者は自動的に転移されます』

「はあ!？」

「え、何これ!カツツオくん、何かした!？」

「いや、なんで俺!？」

『転移します』

「いや、何だったんだよ。ていうか秋津茜は？」

「うーん、葵くん。心配なのは分かるけど私たちに聞かれてもなあ」

「……そりやそうか。ちよつと落ち着こう。……よし、オーケー。」

「にしてもクエスト出してるノワルリンドがないっていうのもおかしな話だね。
強制終了って言うなら説明の1つや2つくらいあっても……」

「……呼んだか」

「うおわ!」

「ちよお、ノワリン!強制終了ってどゆこと!?!秋津茜は!?!」

「ええい、詰め寄るな鬱陶しい!」

「簡単な話だ。秋津茜はある1つの道を選んだと言うだけ。我の出した試練は突破し

ている」

何だ、クリアしてるのか。じゃあ別ルートクリア方法があったってことか？

「ふうん……それで茜ちゃんは？クリアしたんでしょ？」

「秋津茜なら眠った。戻ってくるかは知らんがな」

眠った……？ああ、ログアウトか。いや、にしてもあの秋津茜が、何の連絡もなしにログアウト？そういうクリア方法だったなら良いけどなんか違和感が……

結局その後ノワリンは消え、俺達もモヤモヤを抱えたままログアウトすることとなった。

翌日

「え？紅音が？」

「ええ、そうなのよ。昨日の夜からずっと部屋にこもりっぱなしで……青野くん、何か知ってる？」

「いえ、特には……」

「そうよね……とりあえず学校には連絡してあるから。暇があれば青野くんも会ってあげて。あの子も喜ぶと思うわ」

「あ、はい……」

紅音が引きこもってる？しかも昨日の夜から？……そんなの原因は1つしかないだろう。昨日のノワリンが出した試練。でもなんで……まさか。

まさか、あのモン・スターは秋津茜だった？いや、でも……そう考えると辻褃が合う。ということは、俺のせい、なのか……？

その日は授業なんかろくに聞けなかった。嫌な想像ばかりが頭の中を駆け巡り、その度に自責の念と罪悪感が湧き出てくる。放課後になり、部活をサボって速攻で紅音の家に向かう。

「あの！紅音に会いに来ました！」

「ええ、上がってちょうだい。紅音の部屋はこつちよ、私は下にいるから……紅音をお願い」

本当に原因が昨日のことなら……俺に紅音が救えるのだろうか。紅音の心を傷つけた張本人も張本人。追い討ちをかけることになってもおかしくは無い……

「紅音……いる？伊鈴です。会いに来ました」

ガタンと音がなり誰かがドアの前に近づいてくる気配。

「伊鈴くん、ですか……？」

「あ、ああ……えと、その、大丈夫……？」

聞こえてくる紅音の声は今までにないくらいに憔悴していて、だから俺はそんなありきたりな質問しか出来なくて、だから……

「……ごめんなさい。もう伊鈴くんには……会いたくないです」

だから、拒絶されることになる。

「……そつ、か、うん、じゃあ……帰るね……さよなら……」

アタマが痛い、吐き気がする、全身の感覚が消え失せるような消失感、もう何を言ったのか、どうやって帰ってきたのかも分からない。気づいた時には家のベットに転がっていて、頭を上げれば大きな染みができていた。

「……ああ、もし、もしも……」

この世界に奇跡というものがあるのなら……

「……戻りたい」

あの日、あの時に。

異形なるものゝRoute HAPPY ENDゝ

……私は何をしているんでしょうか。クエストを手伝ってもらっているのに彼らを襲う……もう逃げてしまいましたでしょうか……ここから……この世界から……

『アゝアゝアゝアゝ ツツツ!! ……ツツツ!? 』

「待って……!!」

振るった手は何か止められて見れば私の手は葵さんの体を切り裂いて止まっていた。うそ……なんで……!?

「あかね、だよね」

『……………ウア”ア”アアあ…………』

こちらを見てくる目はどこまでも真っ直ぐで、いつも私に向けられてきた彼の目そのもので……もう込み上げる感情をとどめることは出来ませんでした。

『うあああああ!!!」

異形と化した両腕で葵さんに抱きつきます。きっと彼ならこんな姿の私でも受け入

れてくれるであろうという確信をもって。そしてその確信は私の予想と寸分たがわぬ形で示されました。優しく私を抱きとめいつかの時と同じように、いえ、あの時以上の慈愛がこもった手つきで私を撫でてくれます。

「え、本当に茜ちゃんなの？ ガチで？」

「全然わかんなかったんだけど。逆になんでわかったのさ……」

「いや、もうガチよガチ。分かった理由に関しては何となくとしか言いようがないけどね」

ペンシルゴンさん達の会話も思考の表面を滑っていくだけで、頭の中には何も残りません。ただただ目の前の人に甘えていたい、私が私であると気づいてくれたこの人と離れたくないという思いで頭の中が埋め尽くされていますから。

『……………ふん、気づくのが遅いわたわけが！』

「え？……………あ、あれ？」

まだ体は元のままなのになんでノワル lind さんがいるんですか!? ……というか声戻ってますね。全然気づかなかったです。しよ、正気に戻ると急に恥ずかしさが……！ ううう、ペンシルゴンさんやオイカツオさんの前で葵さんに抱きついちゃったのすごく恥ずかしいです!!

「あれ、ノワリン。どしたの急に出てきて」

『急には無い、試練が終わったから出てきたまでのこと！ それにだ、最後の問いがまだ残っている。それに答えねば完全に攻略したとは認められん』

「問いいー？」

『そうだ……アーサー・ペンシルゴン、オイカツツオ』

「うん、なあに？」

「何かな？」

「え、俺は？」

『貴様は後だ……貴様らは仲間が異形となったとしてどう思う？』

……それ、は……聞くのが怖い、です。だから耳を塞ごうとしたのに

「だーいじようぶだよ、秋津茜」

葵さんがそれをさせてくれません。……大丈夫、なのかな……

「そうだねえ……まあ理性無く襲ってくるようなら処分するけど、そうでないなら見捨てないよ。「友達」だしね」

「俺？ プロゲーマー舐めないですよ。人型なんて捨ててからが本番でしょ。その程度でどうこう思うようななまっちょろい精神してないよってね」

……!!

「ね、言ったでしょ？ こういふ奴らなのさ」

……!! ……!! 何かを言おうとして、でも言葉にできなくて、ただただぎゅつと葵さんを抱きしめます。

『そうか……最後は貴様だ、葵。なぜアレが秋津茜であると気づいた。面影などなく、人の形すら捨てた異形。それを何故?』

「さつきも言ったでしょ、理由なんてないよ。」

『ほう?それが貴様の答えか?何となく、そんな理由で気づいたとでも?』

「そういうことじゃないんだよ、ノワルリンド。あかねが秋津茜あかねが隠岐紅音である限り俺は絶対に見捨てない、手を離さない、目を逸らさない。何となくじゃあないんだよ」

……葵さんは時々小難しいことを言います。何が言いたいのか分からない時もあるけど、それでも私のことを大切に思ってくれている。その気持ちだけは確かに伝わってくるから。だから私は彼の隣にいたいんです。

『ふん……その言葉忘れるなよ』

『昏き道は断たれ、少女は光を取り戻した』

『黒竜の試練は新たなる力と絆をもたらす』

『特殊試練終結』

『ユニーククエスト「ヒトを捨てよ、キズナを捨てよ」をクリアしました』

視界の端にウインドウが流れ、クエストが終わったことを知らせてきます。

「やれやれ、やっと終わったか。ほら、帰ろう秋津茜」

優しく手を差し伸べてくる葵さんに色々なことを思い……それらの全てを一言に集約させます。

「……はいっ!!」